

2024 年 5 月

食料安全保障月報

(第 35 号)



令和 6 年 5 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2024 年 5 月食料安全保障月報（第 35 号）

目 次

概要編

I	2024 年 5 月の主な動き	1
II	2024 年 5 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「ウクライナ及びロシアの生産・輸出動向」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 1
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 2
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 3
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 5
5	食品小売価格の動向	1 9
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	2 0
7	FAO 食料価格指数	2 2

今月のコラム

「ブラジル便り③：ブラジルの代表的料理」	2 3
----------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 2.5%増の 50.6 百万トン
	＜カナダ＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 8.3%増の 34.6 百万トン
	＜豪州＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 11.5%増の 29.0 百万トン
	＜EU27＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 4.2%減の 127.0 百万トン
	＜中国＞	2024/25 年度の生産量は 140.0 百万トンと史上最高の見込み
	＜ロシア＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 3.8%減の 88.0 百万トン
	＜ウクライナ＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 8.7%減の 21.0 百万トン
2	とうもろこし	
	＜米国＞	2024/25 年度の生産量は、前年度より 3.1%減 9
	＜ブラジル＞	2024/25 年度の生産量は増加の見通し
	＜アルゼンチン＞	2024/25 年度の生産量は、前年度から減少する見通し
	＜中国＞	2024/25 年度の生産量は、前年度から増加する見通し
	＜ウクライナ＞	2024/25 年度の生産量は、前年度より 12.9%減
3	コメ	
	＜米国＞	2024/25 年度の生産量は増加の見込み 1 5

<インド>	2024/25 年度の生産量は史上最高の見込み
<中国>	東北部は4月末で作付終了、東部・南部の早稲の生育は順調
<タイ>	乾期米の収穫は完了、一部地域で雨期米の作付けを開始
<ベトナム>	南部メコンデルタ地域の冬春作（乾季米）は海水侵入で単収減少

II 油糧種子

大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 1
<米国>	2024/25 年度の実産量は、前年度より 6.9%増
<ブラジル>	2024/25 年度の実産量は前年度より増加
<アルゼンチン>	2024/25 年度の実産量は、前年度より増加
<中国>	2024/25 年度の実産量は、前年度より減少する見通し
<カナダ>	2024/25 年度の実産量は 6.9 百万トンの見込み(AAFC)

(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2024/25 年度)・・・	2 7
(参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 7
(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・・・	2 8

特別分析トピック

「世界の食料需給の動向」

【利用上の注意】

表紙写真：カナダのオンタリオ州の大豆作付けの様子。5月は降雨が多く、作物の作付作業に遅れが生じているという。（オンタリオ州 2024 年 5 月 4 日）。

(概要編)

I 2024 年 5 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2024/25 年度の作況について、北半球では冬小麦が出穂期から登熟期、とうもろこし等その他の作物は作付期から発芽期を迎えている。なお、南半球では 2023/24 年産の作物が収穫期を迎えている。

品目別にみると、5 月の米国農務省 (USDA) の需給報告によれば、2024/25 年産の小麦については、ロシアや英国で単収・収穫面積ともに前年度より減少するものの、インドや中国で単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年 3 月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する 4 者合意（黒海穀物イニシアティブ）については 2023 年 7 月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU の東欧経由での輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル、EU 等で単収・収穫面積ともに前年度より増加するものの、米国で収穫面積の減少、ウクライナで単収・収穫面積ともに減少すること等から、世界全体の生産量は前年度を下回る見通し。大豆については、ブラジルや米国で単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、主に食肉価格の上昇等により、3 月の 118.8 から、4 月(最新値)は 119.1 に上昇（参考：2023 年 4 月 128.7、2022 年 4 月 158.4、2021 年 4 月 122.1、2020 年 4 月 92.5）。海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値と同程度の水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021 年 7 月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2024 年 5 月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の5月需給報告によれば、2024/25年度の小麦の生産量は、主として収穫面積が減少することから前年度より9%減少し2,100万トンとなる見込み。とうもろこしの生産量も、収穫面積・単収ともに減少することから前年度より13%減少し2,700万トンとなる見込み。2024/25年度の小麦の輸出量は、生産量と期首在庫の減少を受け、前年度より20%減少し1,400万トンとなる見込み。とうもろこしも同様に、前年度より8%減少し2,400万トンとなる見込み。

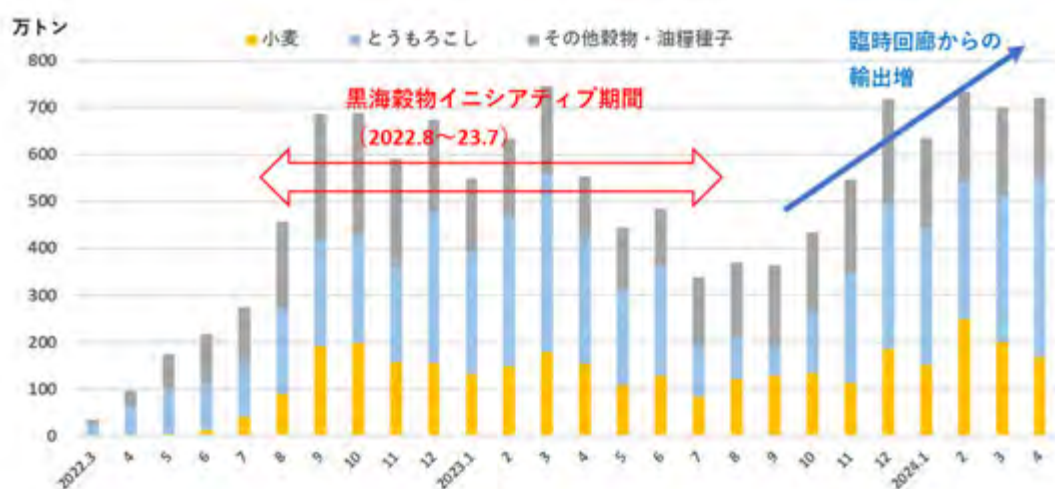
ウクライナ農業政策食料省によれば、4月末現在、2024年産の冬小麦は平年より10～14日早いペースで生長が進んでおり作柄は概ね並み。春小麦は出芽期から分げつ期を迎えており作柄は概ね並み。とうもろこしの作付作業は4月下旬から5月上旬にかけて最盛期を迎える。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等3港（オデーサ港、チョルノモルシク港、ビブジェヌイ港）から輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが離脱を表明し、輸出が停止した。ウクライナ農業政策食料省によれば、同イニシアティブ履行期間中の輸出実績は、穀物・油糧種子6,846万トン（うち、小麦1,728万トン、とうもろこし2,949万トン）。

ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」をIMO（国際海事機関）に通報、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊からの輸出や、運河等を利用しルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出（鉄道又はトラック）は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が増加している。ウクライナ農業政策食料省によれば、2023年8月～24年4月までの穀物・油糧種子の輸出量は5,222万トン（うち小麦1,451万トン、とうもろこし2,103万トン）（参考）。

（参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022年3月～2024年4月）



出典：農業政策食料省のデータをもとに農林水産省で作成

注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

1 米国：2024/25 年度のとうもろこしは減産も、小麦・大豆は増産の見通し

米国農務省の5月需給報告によれば、2024/25年度の米国産とうもろこしの生産量は、収益性の高い大豆に作付けがシフトすることから、前年度より3.1%減の3億7,746万トンとなる見込み。一方、大豆は収穫面積と単収の増加に伴い、前年度から6.9%増の1億2,111万トンとなる見込み。また、小麦は収穫面積と単収の増加から、前年度より2.5%増の5,056万トン。

輸出量については、とうもろこしは5,588万トンと、アルゼンチン、ウクライナ及びブラジルの輸出減から前年度より2.3%増、過去5年平均より1.8%増となり、2年連続で世界最大の輸出国となる見込み。小麦は2,109万トンと、生産量の増加と価格競争力の高まりから前年度より7.6%増も、過去5年平均に比べ8.5%減となる見込み。大豆は4,967万トンと、世界全体の搾油用需要が増加するため前年度より7.3%増も、過去5年平均に比べ6.8%減となる見込み。

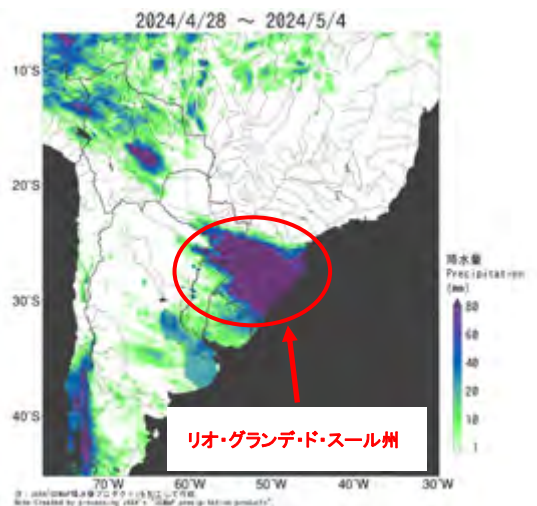
2 ブラジル①：リオ・グランデ・ド・スール州で洪水による被害が拡大

ブラジル食料供給公社の5月見通し(2024.5.14)によれば、2023/24年度のブラジル産とうもろこしの生産量は、作付面積・単収ともに減少したことから、前年度より15.4%減の1億1,164万トンとなる見込み。現在、夏とうもろこしは収穫作業が進展しており5月5日時点の収穫進捗率は63.1%。冬とうもろこしは5月より収穫作業が始まる。大豆の生産量は、作付面積は増加したものの単収が減少したことから、前年度より4.5%減の1億4,768万トン。5月5日時点の収穫進捗率は94.3%。

リオ・グランデ・ド・スール州では、4月最終週から暴風雨に見舞われ、州の生産地域の大部分で洪水が発生。まだ収穫されていないとうもろこしや大豆の単収が損なわれているほか、すでに収穫され保管されている作物にも損失が発生している。

リオ・グランデ・ド・スール州のとうもろこし生産量のブラジル全体に占める割合は5%程度であり、その影響は限定的とみられる一方、大豆の生産量は約15%を占めるため、収穫期は終盤を迎えているものの被害の拡大による影響が懸念される。

図：南米の降水量(2024.4.28~5.4)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム

ブラジル②：日伯農業・食料対話高級実務者会合を開催

令和6年5月23日及び24日、農林水産省はブラジル農業・畜産省と「日伯農業・食料対話高級実務者会合」を開催した。会合の中で、日本からは、ブラジルから日本への穀物の安定供給の観点で、食料需給がひっ迫する等の不測時に備え、両国間で情報交換・意見交換を行う対話の場を提案し、9月のMOU締結に向けて議論を進めていくことで合意した。また、日本企業が投資する穀物積み出し港などのインフラ整備事業を円滑に進めるため、今後、二国間で省庁横断的に議論していくことを確認した。ブラジルからは、G20農業大臣会合に係る情報提供の他、両国間の貿易関係強化、気候変動、持続可能な生産システム構築等に向けた技術協力について提起が行われた。両国は、本年9月にブラジルで開催が予定されているG20農業大臣会合に合わせ、閣僚級の日伯農業・食料対話の開催を目指すことで一致した。

3 英国：「英国食料安全保障指数」公表

2024年5月14日、英国政府は、3年ごとに公表される「英国食料安全保障報告書(UKFSR)」を補完するものとして、「英国食料安全保障指数(UK Food Security Index 2024)」を公表した。現在の英国の食料安全保障の状況を評価するために、必要なデータと分析を提供するものである。

この指数は、UKFSR2024（今年後半に発表予定）の幅広い指標群から選択された9つの指標（世界の消費に対する食料供給量、世界の穀物・大豆の国際貿易率、生産/供給率、農業の全要素生産性、農地利用、エネルギー・肥料価格、ビジネス投資、生物防疫リスク、食品サプライチェーン関係者に対する消費者の信頼感）を取り込んでおり、現実の食料安全保障は、食料需給、国内外の動向、投入と算出、食の安全に対する消費者の認識や信頼感など、相互作用する様々な要因によって形成されており、単一の指標やテーマに還元されないと説明している。

なお、現在の英国の食料安全保障は、世界のサプライチェーンの混乱という困難な時期から抜け出しつつあり、概ね安定した状況であると評価している。

4 中東：紅海における船舶航行の安全確保が困難なため回避

イスラエルとハマスの戦闘が継続する中、報道等によれば、2023年12月以降、イエメンの親イラン武装組織フーシ派が、地中海とインド洋をスエズ運河経由で結ぶ紅海を航行する商船を攻撃しており、運送各社は貨物輸送をアフリカ喜望峰経由等に迂回させている。また、パナマ運河については、降雨不足による水位低下に伴う運航制限が継続しているが、2024年4月15日、パナマ運河庁は、3月中旬以降のまとまった降雨により水不足が一定程度緩和したことを受け、同16日から通行枠を増加すると表明した。5月7～15日には1日24隻、同16日からは31隻、6月1日には32隻と順次制限を緩和する予定である。

我が国の穀物輸入に関し、小麦は主に米国・カナダ西海岸及び豪州から輸入しており、上記２つのルートを通過しない。また、ブラジル産穀物等の多くを喜望峰経由で輸入している。

一方、米国産のとうもろこし及び大豆は、通常、メキシコ湾（ガルフ）からパナマ運河経由で輸入している場合が多い中、最近のパナマ運河の水位低下により地中海→スエズ運河→紅海→インド洋経由のルートを選択したケースもあったが、最近の中東情勢を受け、再度、喜望峯や米国西海岸（PNW）経由に切り替えざるを得なかったとみられる。喜望峯経由の場合、ガルフからパナマ運河経由で輸入する場合と比較して2週間から3週間程度日数が嵩む。PNWの港からとうもろこしを積み込む動きも一部に見られる。引き続き、今後の動向について注視が必要である。



II 2024 年 5 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、4 月末、210ドル/トン台半ばで推移。5 月に入り、ロシアにおける乾燥及び霜害による減産懸念から値を上げ、5 月中旬現在、240ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、4 月末、170ドル/トン台前半で推移。5 月に入り、米中西部での作付け遅延及びブラジル南部での洪水被害を受けて、180ドル/トン台前半まで上昇。その後、米国農務省の穀物需給報告を控えたポジション調整から170ドル/トン台半ばまで下落したものの、米国農務省の穀物需給報告での期末在庫量が市場予想を下回ったことから上昇し、5 月中旬現在、180ドル/トン台前半で推移。

コメは、4 月末、610ドル/トン台前半で推移。5 月に入り、乾季米の収穫が終盤を迎えているものの、市場への流入が減速していることや、5 月末までにインドネシアがタイから11万トンを入力すること等から値を上げ、5 月中旬現在、660ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、4 月末、420 ドル/トン台前半で推移。5 月に入り、ブラジル南部での洪水被害を受けて 450 ドル/トン台前半まで上昇。その後、米国農務省の穀物需給報告を控えたポジション調整から 440 ドル/トン台前半まで下落したものの、ブラジル南部での洪水被害が長期化していることを受けて上昇し、5 月中旬現在、440 ドル/トン台半ばで推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 1.1%増の 28.38 億トン。消費量は、前年度より 0.9%増の 28.42 億トンとなり、4 年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り 27.1%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、とうもろこしで減少も、小麦、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.38 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメいずれも増加し、穀物全体で増加となり、28.42 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、コメで増加も、とうもろこしで減少し、穀物全体で減少し、5.03 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.69 億トンと前年度より減少、期末在庫率も、前年度より減少する見込み。

(注：数値は 5 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.87 億トン。消費量は前年度を上回り 6.65 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る 21.8%となる見込み。

(注：数値は 5 月の USDA「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報: ウクライナ及びロシアの生産・輸出動向

2024/25年度のウクライナ産小麦の生産量は、耕作面積が大幅に減少することから、前年度に比べ9%減少し2012/13年度以来の低い水準となる見込み。一方、ロシア産小麦の生産量は前年度に比べ4%減少するものの過去3番目の水準となる見通し。輸出については、ウクライナはEU向け、ロシアは中東・アフリカ向けのシェアを拡大している。2022年2月のロシアのウクライナ侵攻から現在に至る両国の生産・輸出動向についてまとめた。

注：文中の「2024/25 年度」等は穀物年度で、ウクライナおよびロシアの小麦は 2024 年7月から2025 年6月、とうもろこしは 2024 年10月から2025 年9月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P.27 参照)。

1 ウクライナ産小麦・とうもろこしの生産・輸出動向

(1) 生産動向

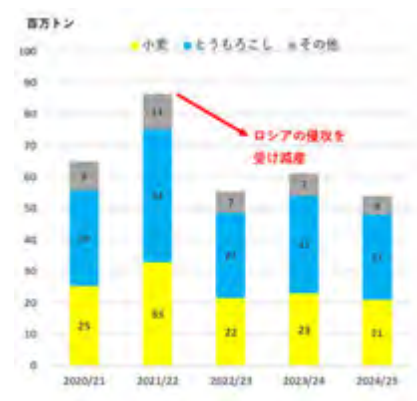
米国農務省（USDA）の5月需給報告によれば、2024/25 年度の小麦の生産量は、収穫面積、単収ともに減少することから、前年度より8.7%減少し、2,100 万トンと2012/13 年度以来の低い水準となる見込み。ロシアの侵攻前の2021/22 年度と比較すると36%の減産となる。また、とうもろこしの生産量も、小麦同様、収穫面積、単収ともに減少することから、前年度より12.9%減少し2,700 万トンとなる見込み。侵攻前の2021/22 年度と比較すると36%の減産となる。

USDA の GAIN レポートによれば、ウクライナ産小麦及びとうもろこしの生産者は、2022 年2月のロシアの侵攻以来、肥料の高騰により2年連続で採算が取れない状態が続いている。一方、大豆はとうもろこしに比べ肥料コストの負担が少ないため、2023/24 年度に利益を上げており、2024/25 年度も大豆・ヒマワリ種子等の油糧種子で利益を生むと予想されている。このことが農家の作付け判断に影響を及ぼし、2024/25 年度は、小麦・とうもろこしから大豆・ヒマワリ種子等の油糧種子へ作付けがシフトすると予想される。

(2) 輸出動向

USDA の5月需給報告によれば、2024/25 年度の小麦の輸出量は、収穫面積と単収の減少による生産量の減少や旺盛な輸出需要による期首在庫の減少を受けて、前年度から350 万トン減少し1,400 万トンとなる見込み。ロシア侵攻前の2021/22 年度と比較すると26%の減少となる。とうもろこしの輸出量も、収穫面積と単収の減少による生産量の減少や旺盛な輸出需要による期首在庫の減少を受けて、前年度から200 万トン減少し2,400 万トンとなる見込み。侵攻前の2021/22 年度と比較すると11%の減少となる。

図1 ウクライナの穀物生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.5.10)
※その他は他の穀物（大麦等）

図2 ウクライナの穀物輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.5.10)
※その他は他の穀物（大麦等）

現地調査会社のデータによれば、2023年7月から2024年4月までの小麦の輸出量は1,578万トンで、国別にはスペイン 512 万トン、エジプト 132 万トン、トルコ 106 万トン、インドネシア 106 万トンの順となっている。ロシアの侵攻前は、主にアジア地域及びアフリカ諸国向けに輸出されていたが、侵攻後は、輸送コストで優位性がみられる近隣の EU 諸国向けへの輸出が増加している。

2023年7月から2024年4月までのとうもろこしの輸出量は2,291万トンで、国別にはスペイン 482 万トン、中国 383 万トン、エジプト 298 万トン、イタリア 222 万トンの順となっている。ロシアの侵攻後は、小麦と同様に EU 諸国向けの輸出が増加している。

表1 ウクライナの小麦、とうもろこしの輸出時期別輸出先国シェア

(単位：％、万トン)

	2020年7月－2021年6月 ロシア侵攻前		2022年8月－2023年6月 黒海穀物イニシアティブ期		2023年7月－2024年4月 臨時回廊期	
小麦	インドネシア	15.7	トルコ	21.4	スペイン	32.4
	エジプト	14.8	スペイン	15.5	エジプト	8.3
	パキスタン	8.4	ルーマニア	15.1	トルコ	6.7
	バングラデシュ	6.8	バングラデシュ	6.6	インドネシア	6.7
	モロッコ	6.5	ポーランド	5.3	ルーマニア	6.3
	その他	47.9	その他	36.0	その他	39.4
	月平均輸出量	138.7		150.6		157.8
とうもろこし	中国	38.2	中国	19.7	スペイン	21.1
	オランダ	10.0	ルーマニア	15.6	中国	16.7
	エジプト	9.7	スペイン	11.2	エジプト	13.0
	スペイン	8.2	エジプト	7.4	イタリア	9.7
	イラン	5.3	イタリア	7.3	オランダ	7.3
	その他	28.6	その他	38.8	その他	32.2
	月平均輸出量	192.3		256.5		229.1

出典：APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省が作成 ※ピンクはアジア、青は EU

注：四捨五入による誤差のため、シェアの合計が 100%にならない場合がある。

図3 オデーサ港から出港のルート

(3) 臨時回廊による輸出と EU の免税措置の延長

2022年2月のロシアの侵攻後、ウクライナの穀物輸出は一時的に途絶えたものの、国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等からの輸出が再開された。同イニシアティブはロシアが離脱する2023年7月17日まで続いた。

同イニシアティブ停止以降は、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する「臨時回廊」が確立され現在に至る。大部分の穀物輸出は臨時回廊を通して行われており、現在も断続的に行われている EU 隣接国における農業団体やトラック運転手による国境検問所の封鎖等の抗議活動の影響は軽微とみられる。



出典：現地調査会社調べ
※緑は臨時回廊、ピンクは穀物イニシアティブ

現在、ウクライナにとって最大の輸出国は EU となっている。2024 年 5 月 13 日、欧州理事会は、EU へのウクライナ産農産物に対する輸入関税と割当の一時停止措置（2022 年 6 月に導入）を、2025 年 6 月 5 日まで延長することを承認した。これに併せ、EU 市場を保護するため 2 つのセーフガードメカニズムが導入された。1 つは、既存のセーフガードメカニズムの強化版で、定期的なモニタリングに基づき、特定の条件を満たした場合に発動される。もう 1 つは、ウクライナ産のとうもろこし、えん麦、鶏、卵、砂糖、ハチミツ及びひき割り穀物の輸入量が 2021 年下期から 2023 年の年間平均値を上回った場合、関税割当が自動的に再導入される。

なお、報道によれば、EU による輸入関税と割当の停止措置の 1 年延長が欧州理事会で承認されたとはいえ、EU 内部での不協和音は依然として存在する。全ウクライナ農業フォーラムのジドゥフ会長は、5 月 13 日の欧州理事会における投票で、ハンガリーとポーランドは反対票を投じ、ブルガリアは棄権したことを指摘。欧州理事会の議長国が今年後半はハンガリー、来年前半はポーランドになるため、ウクライナの対 EU 交渉は今後も難航するとみられる。

2 ロシア産小麦の生産・輸出動向

(1) 生産動向

USDA によれば、2024/25 年度のロシア産小麦の生産量は 8,800 万トンと、豊作だった前年度より 4 % 減少するものの、過去 5 年平均より 5 % 上回り、過去 3 番目の水準を維持する見込み。ロシアの小麦生産は主に欧州部で栽培される冬小麦とシベリア地域で生産される春小麦であり、冬小麦は 6,400 万トンで約 7 割を占める一方、春小麦は 2,400 万トンの見通し。なお、USDA によるロシアの生産予測は、クリミアの生産量を除外している。

5 月上旬、ロシア南西部で季節外れの寒波による気温低下と降霜により、農作物に大きな被害をもたらしている。16 日、ルト農業大臣は、寒波による作物の枯死の面積は農作物全体の作付面積の約 1 % に相当する 83 万ヘクタールになると述べた。

(2) 輸出動向

USDA によれば、2024/25 年度の小麦の輸出量は、生産量と期首在庫の減少により、史上最高を記録した前年度から 150 万トン減少し、5,200 万トンとなる見込み。輸出量は前年度より若干減少するものの、過去 2 番目の水準を維持するとともに、世界最大の小麦輸出国であることに変わりはない。

現地調査会社によれば、現在、ロシアの穀物輸出は過去最高のペースで進んでおり、2023 年 7 月から 2024 年 4 月の穀物輸出量は、前年同期比 1,012 万トン増の 6,149 万トンを記録した。うち、小麦の輸出量は前年同期比 414 万トン増の 4,474 万トンで、輸出先国の内訳は、エジプト 710 万トン、トルコ 596 万トン、バングラデシュ 334 万トン、パキスタン 213 万トンの順となっている。また、2023/24 年度の小麦輸出は、前年度か

図 4 ロシアの穀物生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2024.5.10）
※その他は他の穀物（オーツ麦等）

図 5 ロシアの穀物輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2024.5.10）
※その他は他の穀物（オーツ麦等）

らの繰越在庫が多く、輸出が好調であることから、初めて生産量の半数を超え、56%に達する可能性があると思われる。

表2 ロシアの小麦の輸出先国シェア

(単位：％、万トン)

	2020/21年度 (2021年7月～2022年6月)		2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)		2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)		2023/24年度 (2023年7月～2024年4月)	
小 麦	エジプト	21.0	トルコ	21.6	トルコ	19.2	エジプト	15.9
	トルコ	17.1	イラン	17.8	エジプト	17.0	トルコ	13.3
	バングラデシュ	5.0	エジプト	15.3	カザフスタン	6.5	バングラデシュ	7.5
	パキスタン	3.9	カザフスタン	6.6	サウジアラビア	5.5	パキスタン	4.8
	イラン	3.8	サウジアラビア	3.0	イラン	5.1	アルジェリア	4.3
	アゼルバイジャン	3.4	アゼルバイジャン	2.9	アルジェリア	4.4	カザフスタン	4.1
	カザフスタン	3.1	ナイジェリア	2.3	パキスタン	3.6	サウジアラビア	4.0
	ナイジェリア	3.1	スーダン	2.2	バングラデシュ	3.3	ケニア	3.4
	スーダン	2.9	シリア	1.9	スーダン	3.1	イエメン	3.4
	イエメン	2.3	イスラエル	1.7	リビア	2.8	インドネシア	3.1
	その他	34.3	その他	24.7	その他	29.6	その他	36.2
	月平均輸出量	332.1		274.2		404.0		447.4

出典：現地調査会社のデータをもとに農林水産省が作成 ※ピンクは中東、緑はアフリカ

注：四捨五入による誤差のため、シェアの合計が100%にならない場合がある。

(3) ロシアのウクライナ侵攻から現在までの動向

ロシアの主要な小麦輸出先国は、従前から引き続き中東及び北アフリカ諸国となっており、特にエジプト及びトルコがロシア産小麦の主要な市場となっている。こうした中、2021/22年度はイランへの輸出が大幅に伸びている。これは2021年にイランが深刻な干ばつに見舞われた中で、ウクライナ侵攻の対ロ制裁の影響により一時的にロシア産小麦の輸出が鈍化し、行き場がなくなった小麦がイランに向かったことも影響しているとみられる。

ロシアのウクライナ侵攻以降、ロシアの小麦輸出については、ロシアの主要な輸出先国はもとも「友好国」が多い中東や北アフリカ諸国であり、これら友好国と決済スキームを構築したことにより、対ロ制裁の影響による輸出先の変更はほとんどなかった。ただし、制裁はロシア産小麦の価格を抑制する結果となり、ロシアは従来の主要市場への輸出を継続しつつも、低価格を武器に新市場（アフリカ、アジア、中南米）への販路拡大に力を入れており、このことが輸出量の増加に繋がっているとみられる。

報道（2024.4.19）によれば、ロシアはBRICSの農業部会で加盟国の代表らに、BRICSの枠組み内での穀物取引所の創設構想を提案し、賛同を得た。この構想は、2023年末にロシア穀物輸出者同盟がロシア農業省に提案したものであり、BRICS諸国は世界市場で大きなウェイトを占めている（世界の小麦生産量に占めるBRICSの割合は48%）にもかかわらず、価格はシカゴ市場で形成されているため、BRICS諸国の食料安全保障にとって望ましくない状況となっていると主張している。穀物輸出者同盟のゼルニン会長は、今年10月のBRICSサミットまでに穀物取引所の創設に関する事務的な問題を解決できるとの見通しを明らかにしている。

また、2024年5月16・17日、プーチン大統領は、大統領再任後の最初の外遊地として中国を訪問した。同16日の習近平主席との首脳会談では、対中関係の優先分野はエネルギー、農

業、ハイテク、インフラ、建設及び運輸であると述べた。会談後に署名された「包括パートナーシップと戦略的連携の進化に関する共同声明」において、両国は農産物及び食品の貿易拡大や農業分野の投資における協力を進めるとの意向が明記されている。

3 今後の動向

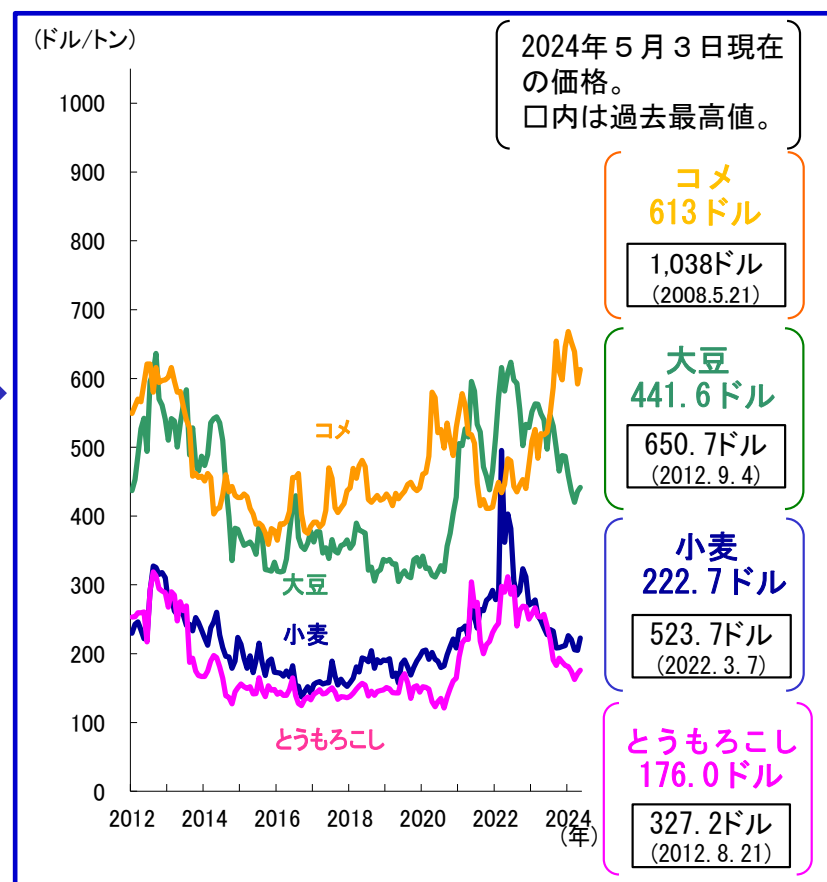
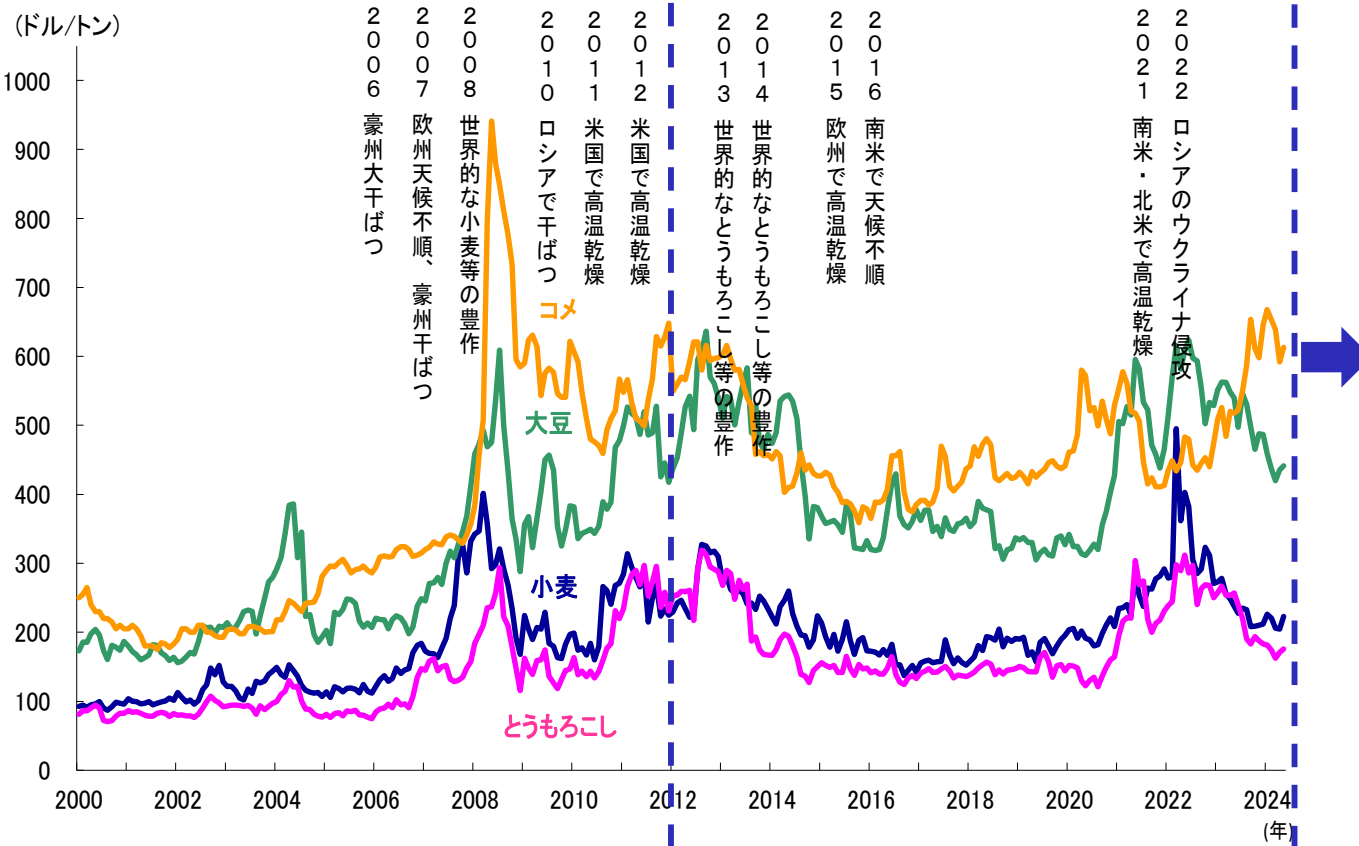
現在のところ、ウクライナは、臨時回廊により EU 諸国向けを中心に順調に輸出が行われている一方、ロシアは、中東やアフリカ向けを中心に輸出を拡大している。この傾向は 2024/25 年度も続くと思われるが、2024/25 年度は、消費量の増加に伴う輸入需要の伸びが予想される中東とアフリカで市場シェアを争うことになるだろう。

また、ロシアによるウクライナに対する軍事侵攻が続く中、プーチン大統領は中国や BRICS との関係を深めてきており、今後の動向を含め注視していく必要がある。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの一時的な輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時の高騰から低下も、南米の乾燥等から侵攻前と比較し依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



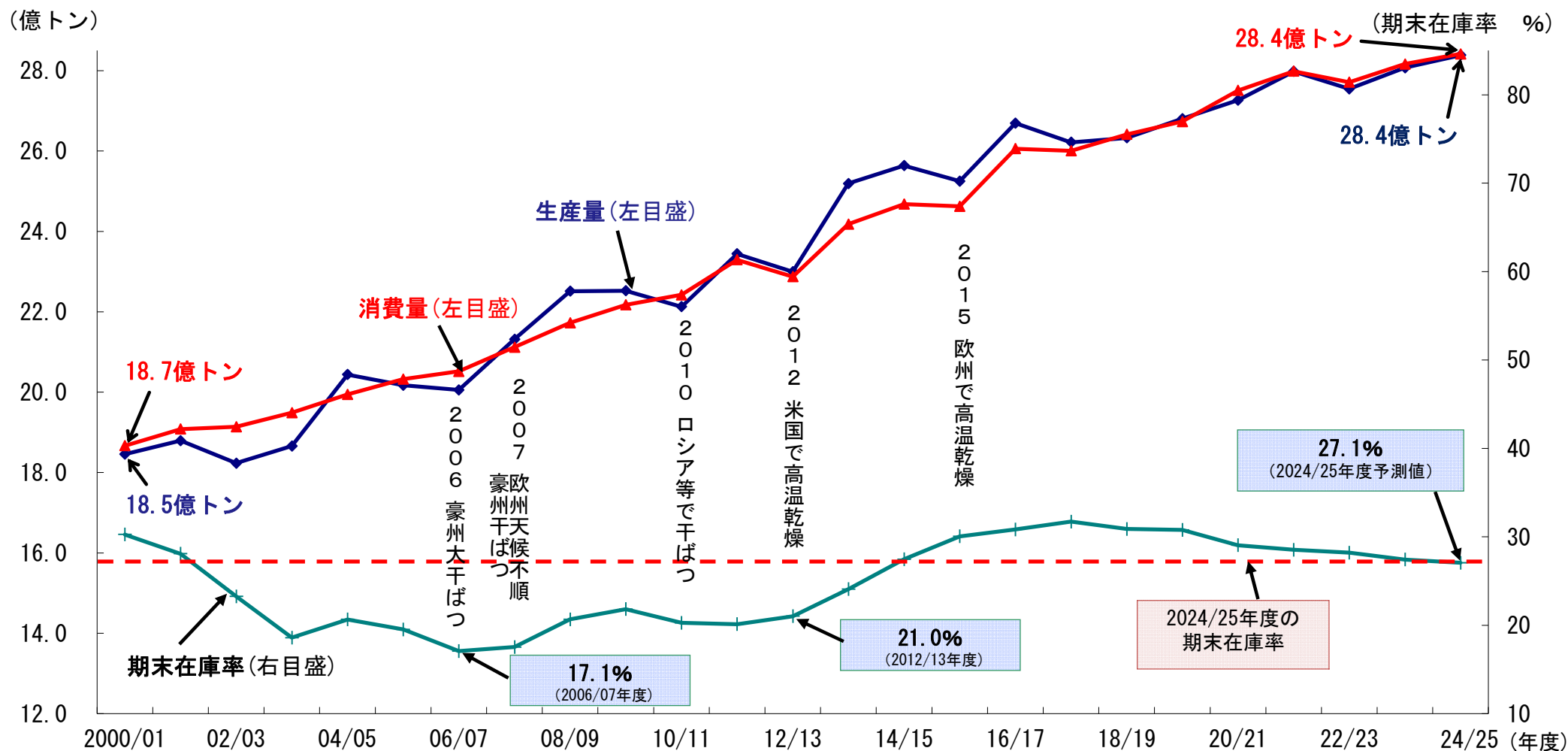
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
なお、コメ価格は4月30日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2024/25年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2024/25年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、27.1%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

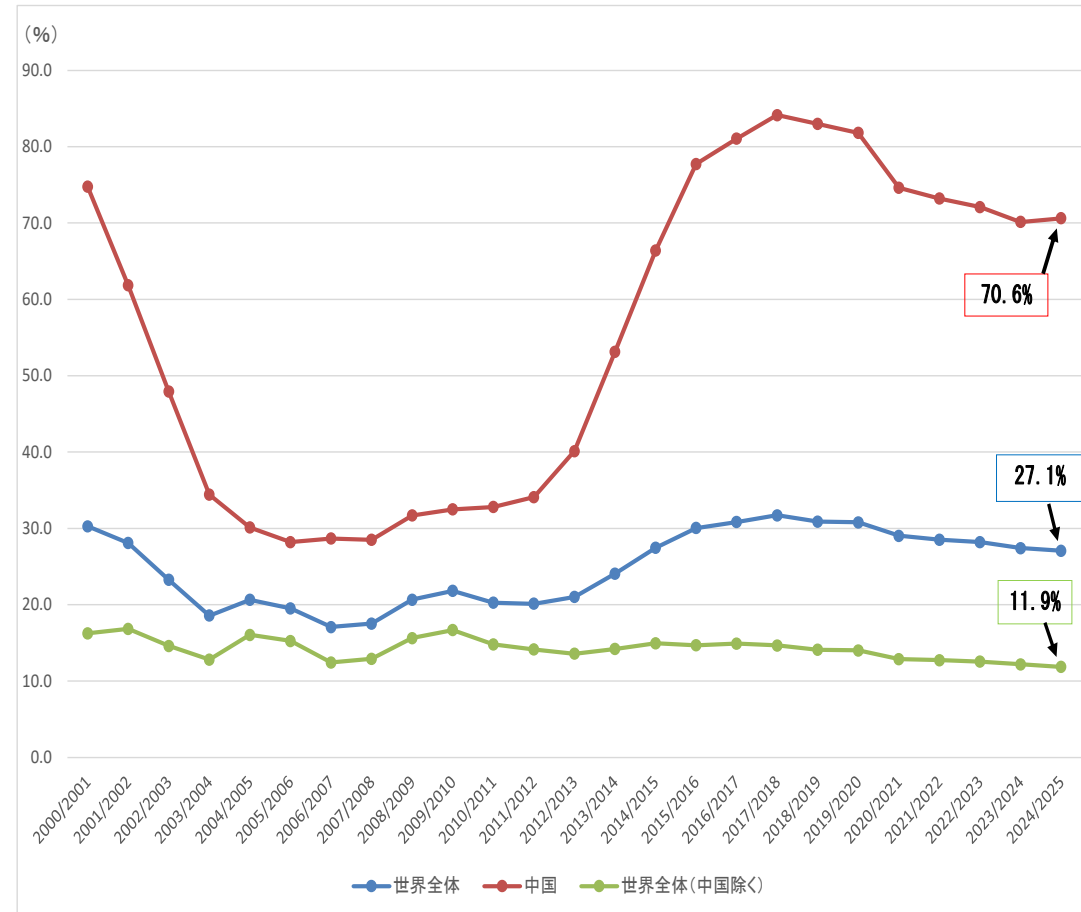


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(May 2024)、「PS&D」

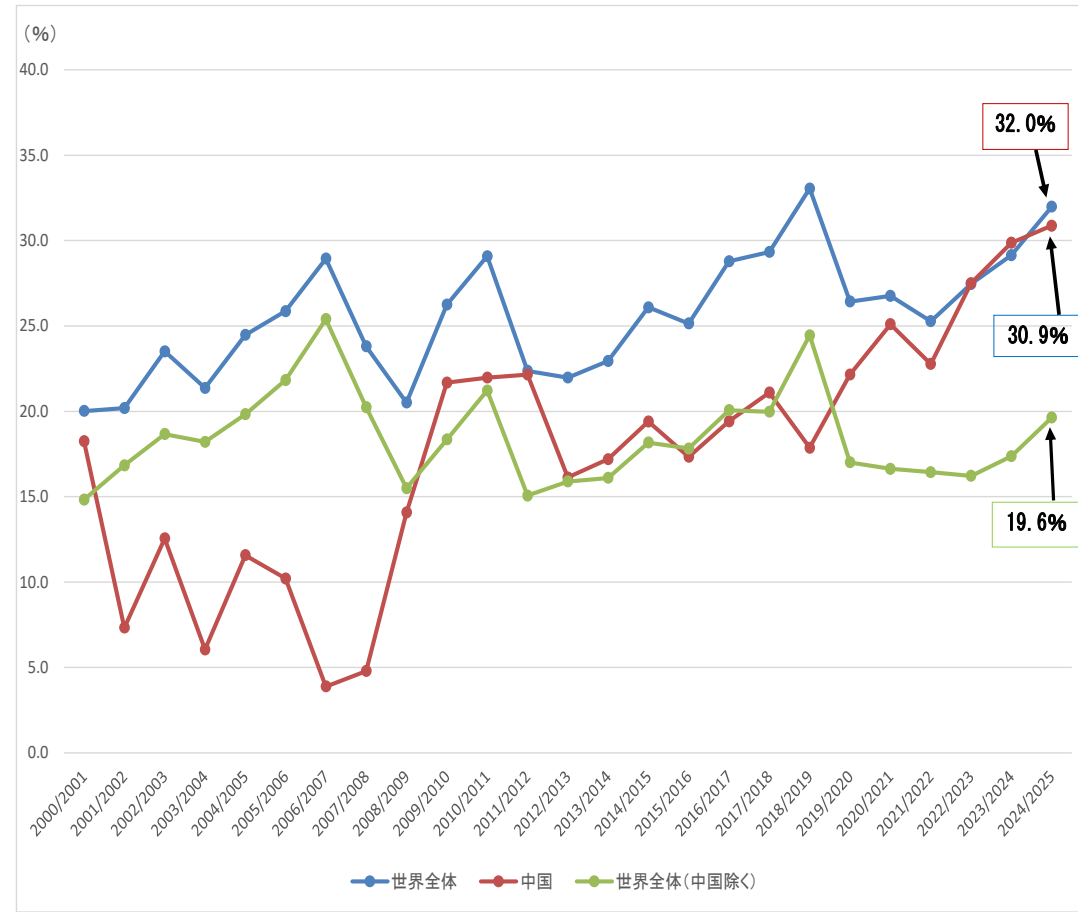
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(May 10, 2024)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

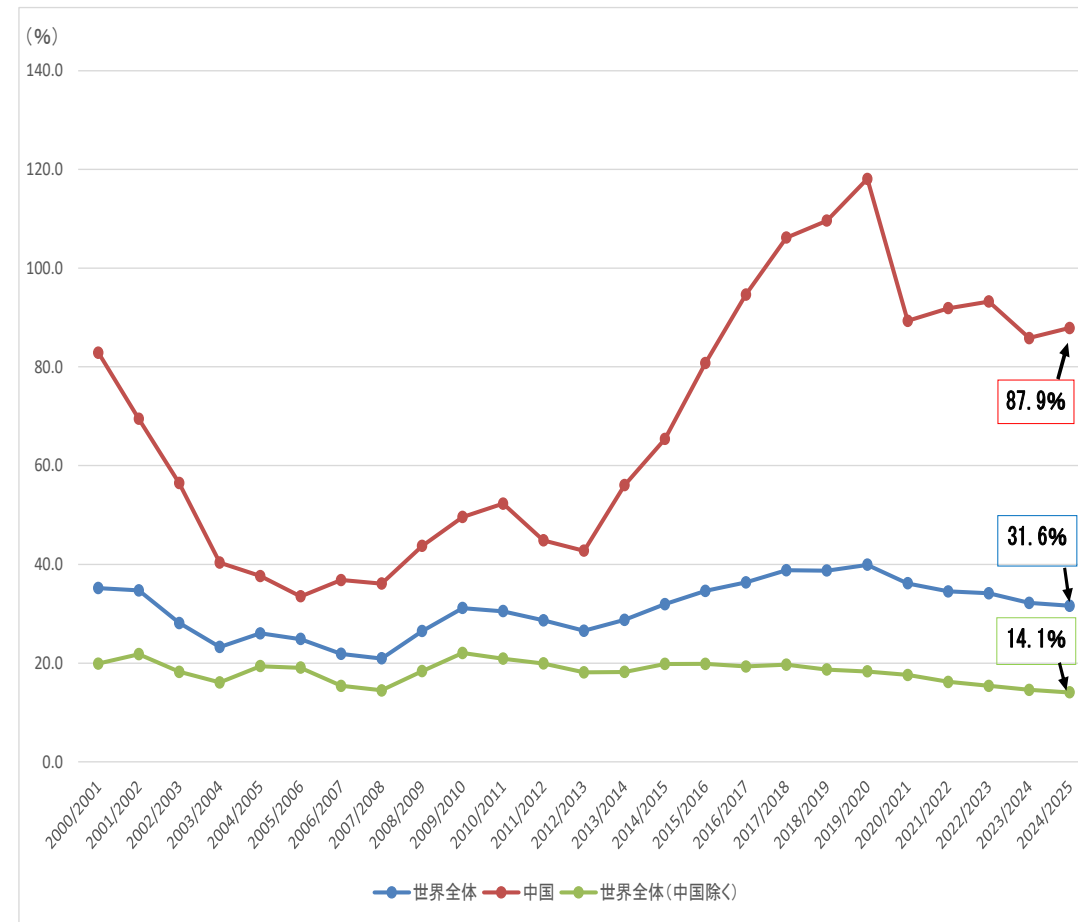
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

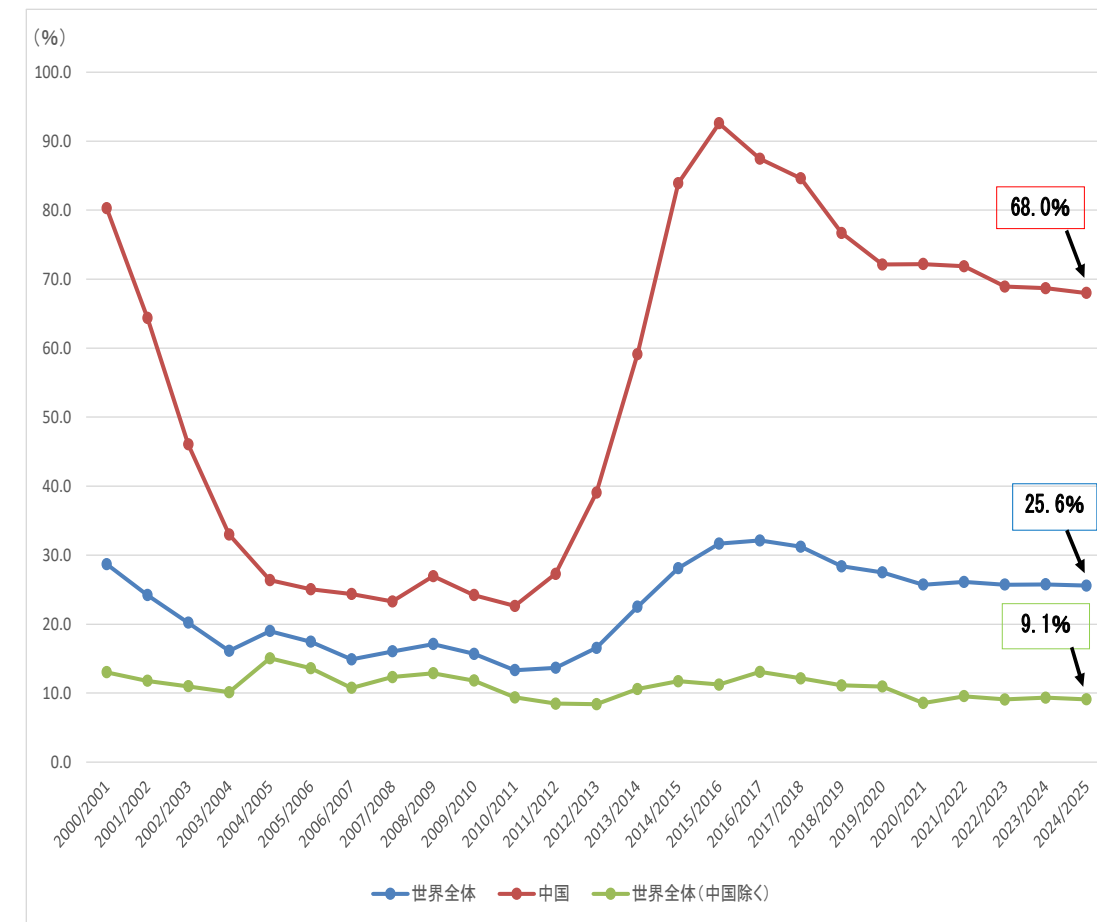
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(May 10, 2024)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

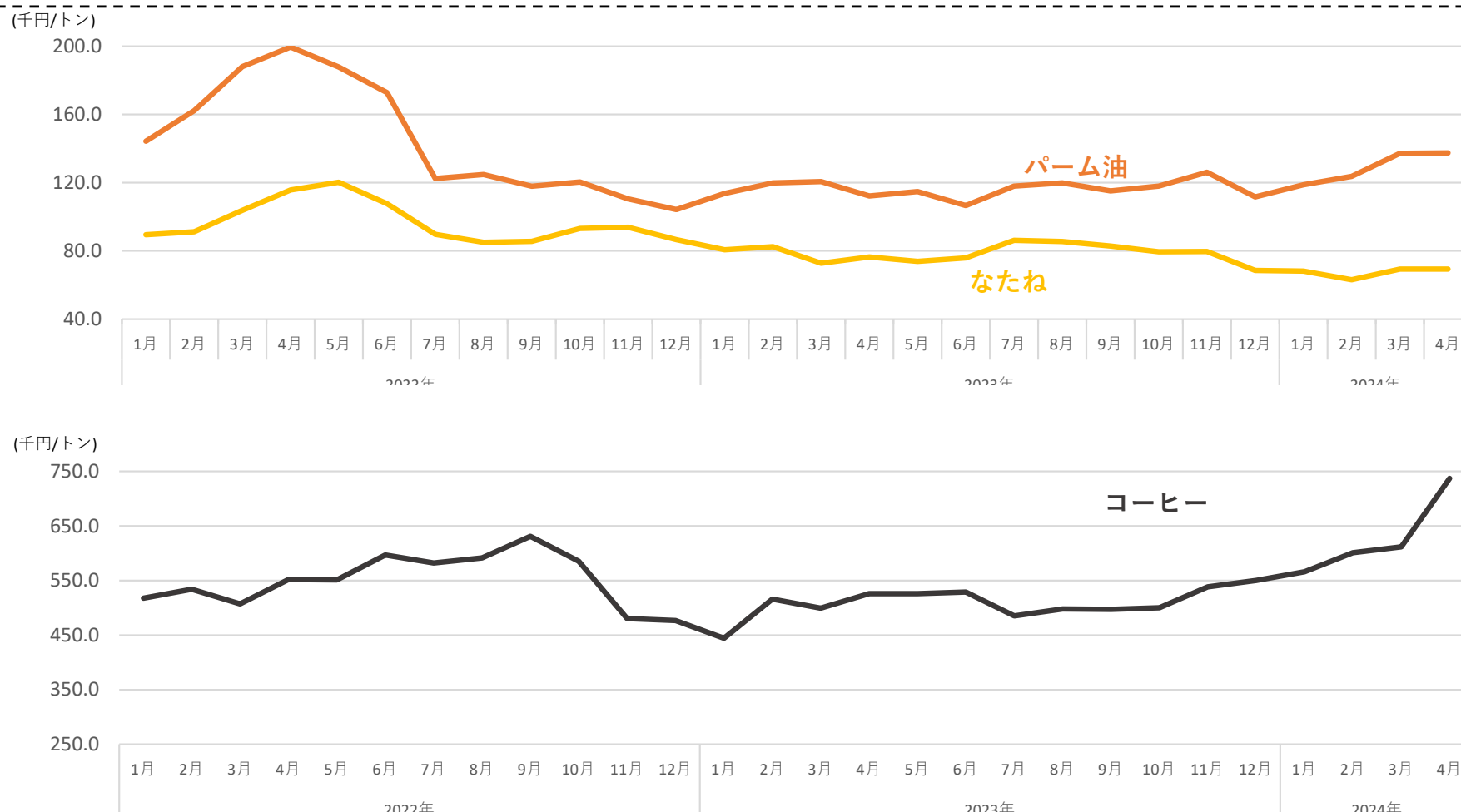
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油の需要の面では、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などにより市場価格上昇の要因となっている。
- なたね、パーム油の供給の面では、なたねについては、**2021年**に主産地であるカナダで減産があったが、**2022年以降**は回復基調から平年並みの収量に近づいた。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも**2022年**の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、**2021年以降**、世界最大の生産国であるブラジルにおける天候不順による収穫量減少や世界的な物流の混乱等により、市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルにおける収穫量の回復等により、市場価格は一時下降したが、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、**2024年以降**は再び市場価格が高騰している。



2024年5月24日現在
□内は2022年1月以降
の最高値。

パーム油
137.4 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
69.3千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

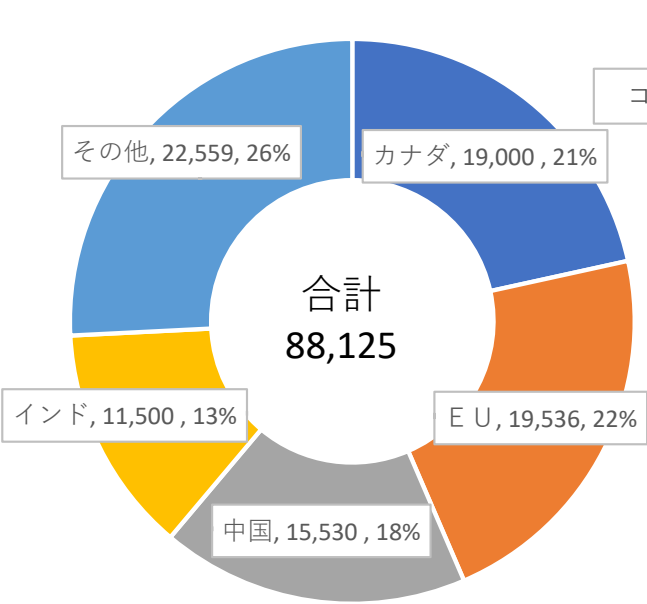
コーヒー
737.0千円/トン
737.0千円/トン
(2024.4)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

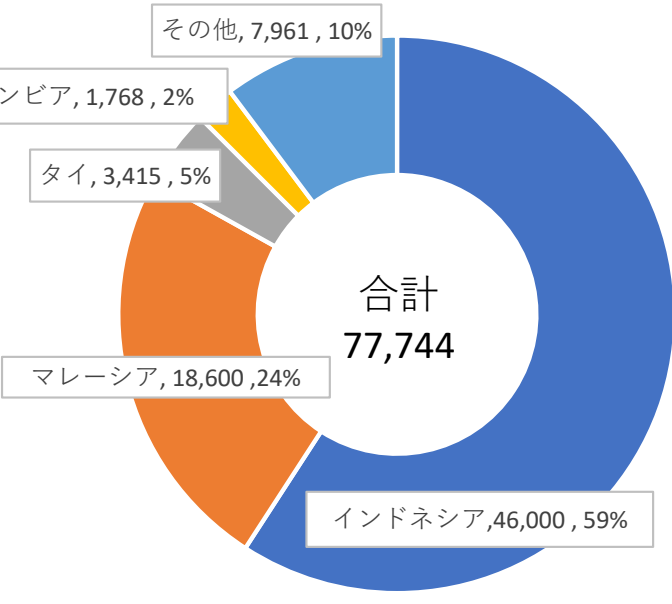
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



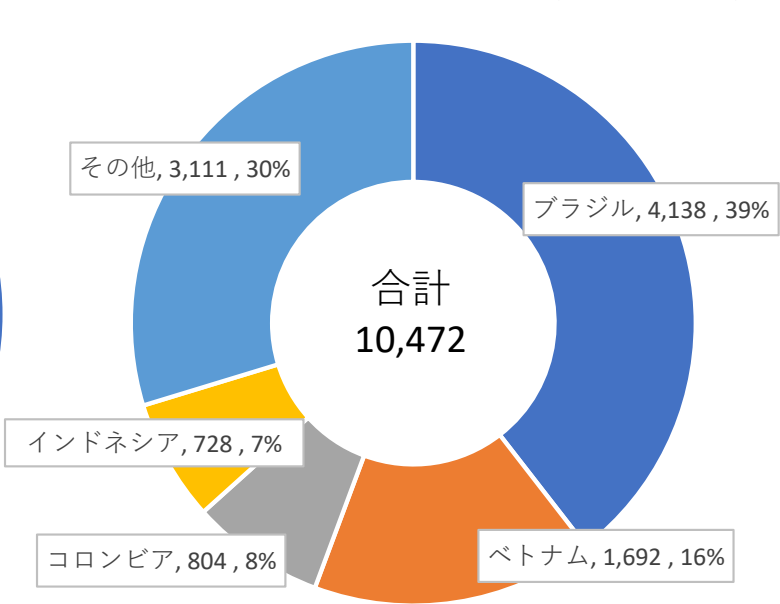
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2023年 6 月時点

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2023年 6 月時点

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3								
前月比	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9								
前年同月比	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8								

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4								
前月比	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2								
前年同月比	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6								

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コー ヒー	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0								
前月 比	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5								
前年 同月 比	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1								

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年4月の国内の加工食品の消費者物価指数は113.3～153.7（前年同月比で-9.2%～9.5%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和5年11月～令和6年4月）

消費者物価指数（総務省）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5		R6				
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	123.2	122.7	122.1	121.8	122.1	121.9	6.2%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	122.9	122.2	122.2	125.2	123.9	123.5	8.4%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	117.0	117.2	116.9	117.5	117.6	118.0	3.1%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	154.8	153.2	152.8	151.3	148.3	148.0	-9.2%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	111.4	111.0	111.5	112.6	112.9	113.3	5.8%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	153.9	154.7	153.5	154.2	153.4	153.7	3.4%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	135.0	131.3	133.0	132.7	134.5	135.3	1.0%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	111.3	115.5	119.0	119.1	118.8	120.2	9.5%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	115.2	115.1	115.0	115.1	115.3	115.5	3.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和5年11月～令和6年5月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5		R6						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	117.1	118.6	117.6	117.4	118.6	115.0	117.8	2.4%	5.8%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	122.2	121.6	119.8	121.0	121.0	117.3	119.8	2.1%	7.2%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	114.1	114.6	114.6	114.6	115.0	118.9	116.7	-1.9%	2.3%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	155.5	153.3	153.3	151.4	150.5	145.1	145.1	0.0%	-10.0%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	110.0	110.6	110.2	110.4	110.2	106.7	108.1	1.3%	3.0%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	143.7	143.7	144.1	144.4	143.4	140.3	138.6	-1.2%	-2.9%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	130.7	122.3	125.8	128.8	129.8	123.8	120.8	-2.4%	-7.3%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	110.5	115.0	118.3	118.5	118.5	119.7	119.4	-0.3%	8.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年6月号（5月24日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）肥育牛出荷頭数の減少により、牛肉生産量はかなり大きく減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003253.html

（EU）牛肉生産量の減少は24年も継続の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003254.html

（豪州）24年3月の牛肉輸出、米国のひき肉需要増が牽引^{けんいん}

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003255.html

（ブラジル）2023年の牛肉輸出量は前年をわずかに上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003256.html

◆豚肉

（米国）米国内外からの堅調な需要により、豚肉卸売価格、肥育豚価格ともに上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003257.html

（カナダ）24年1～2月の豚肉輸出量、前年同期比15.4%増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003258.html

（中国）豚肉価格は引き続き前年同期比を下回って推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003259.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）24年2月の生乳出荷量、6カ月ぶりに前年同月を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003260.html

（豪州）23／24年度の生乳生産量は前年度を上回る見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003261.html

（NZ）生乳生産量、エルニーニョ現象による乾燥気候の影響で減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003262.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）トウモロコシ生産量は下方修正も、期末在庫は高水準を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003263.html

（世界：大豆）大豆期末在庫は下方修正ながらも高水準を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003264.html

（米国）米国のトウモロコシ消費量は増加、生産者価格は引き続き下方修正

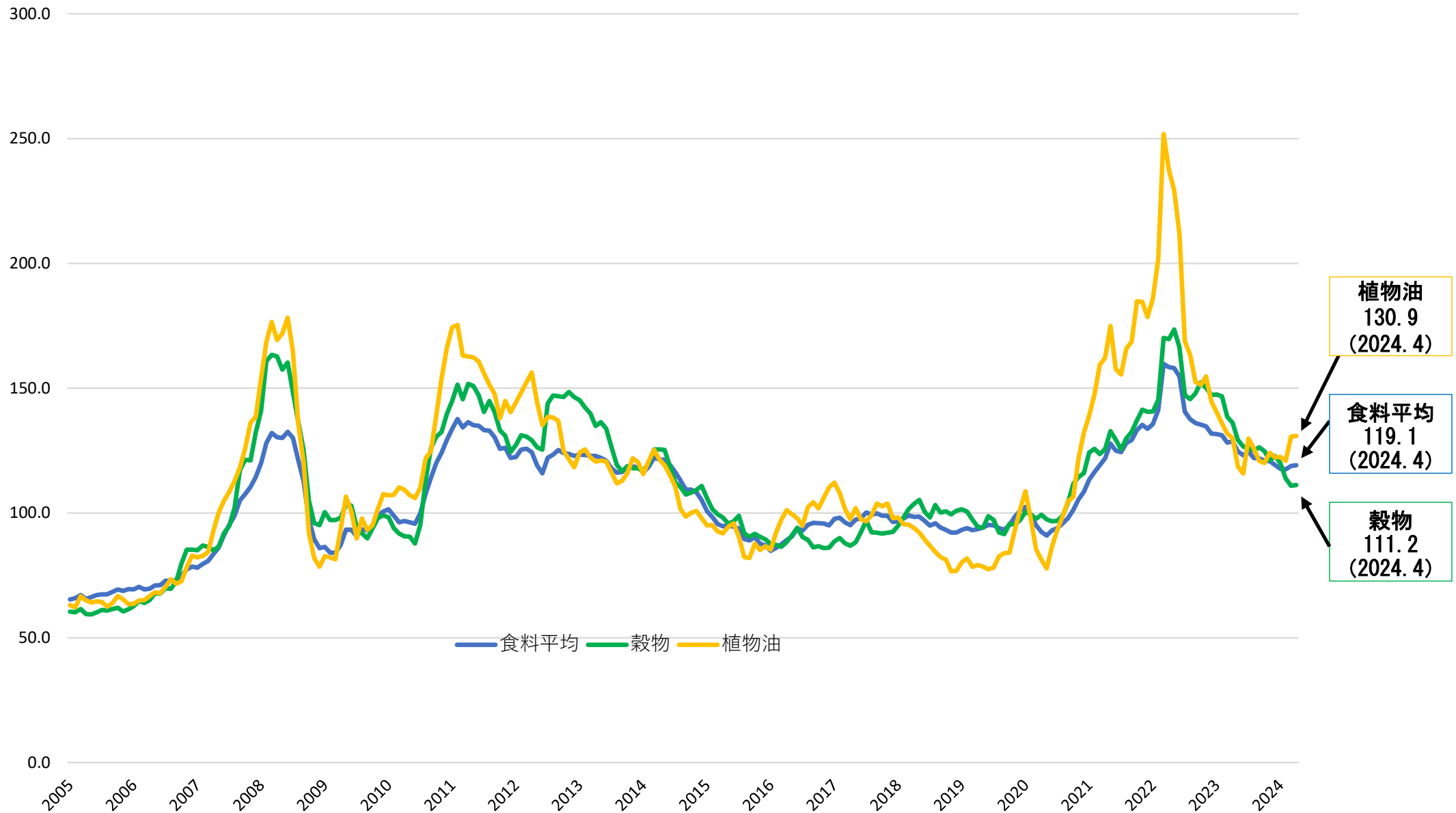
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003265.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003266.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.4)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

ブラジル便り③：ブラジルの代表的料理

今回は、人気のあるブラジルの代表的な料理を御紹介します。

1 シュラスコ

ブラジルの代表的な料理といえばシュラスコです。部位別に串刺しにした牛肉や豚肉に塩をまぶして炭火で焼き、焼きあがった串をスタッフが手に持って回ってきて、好みの肉を切ってもらいます。次々とテーブルに串を持ってこられるので、大量のお肉を食べることができます（写真1）。昔、牧畜が盛んなブラジル南部からアルゼンチンにかけて、ガウチョと呼ばれる牛追いの男たち（ブラジル版カウボーイ）がいて、彼らが牛肉を地面に串刺しにし、たき火で焼いて、ナイフでそぎ落として食べたのが始まりとされています。

写真1 シュラスコ料理店にて



2 フェイジョアーダ

また、フェイジョアーダも有名なブラジル料理です。土鍋に黒豆や牛肉、ソーセージ、豚の尻尾等を入れて煮込んだものをお米の上に載せて食べます。ブラジルでは、水曜日と土曜日の週2回だけ提供されるのが普通です。

写真2 「ポル・キロ」形式の料理



3 「ポル・キロ」形式

ブラジルのビジネスマンの昼食の定番は「ポル・キロ」形式です（写真2）。日本語に訳すと「キロ当たり」という意味で、量り売り形式で、バイキングのような取り放題になります。料理の品目ごとの細かい値段が設定されておらず、野菜ばかり取れば割安になるし、肉ばかりをとれば値段が高くなります。

4 カフェイージョ

ブラジル現地では、“ちょっとのコーヒー”を意味する「カフェイージョ」というコーヒーを小さなカップで飲むことが多いです（写真3）。ミルクは基本入れないで、砂糖をふんだんに入れているので、非常に甘いです。なお、ブラジルは、コーヒー、砂糖ともに世界一の生産・輸出国です。

写真3 ブラジルのコーヒーと砂糖



これまで3回にわたり、ブラジルの生産現場、輸送インフラ、食文化を御紹介してきました。地球の裏側の国ではありますが、日系人の方が多く、現地を訪問した際も、親近感を持って接していただきました。我が国にとって、大豆やとうもろこしの主要な輸入相手国であり、引き続き良好な関係を築いていければと思います。

文責：辻 貫志（農林水産省大臣官房政策課 食料安全保障室）

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介するものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

【データ・出典】

- ・和田昌親編著（2011）、「ブラジルの流儀 なぜ「21世紀の主演」なのか」、中公新書
- ・JTBパブリッシング（2018）、「ひとり歩きの会話集⑨ ブラジル・ポルトガル語」

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2024/25 年度

生産量 前年度比  前月比 **－**

- ・ロシア、英国等で減少したものの、インド、中国等で増加し、前年度から増加した。史上最高の見込み。

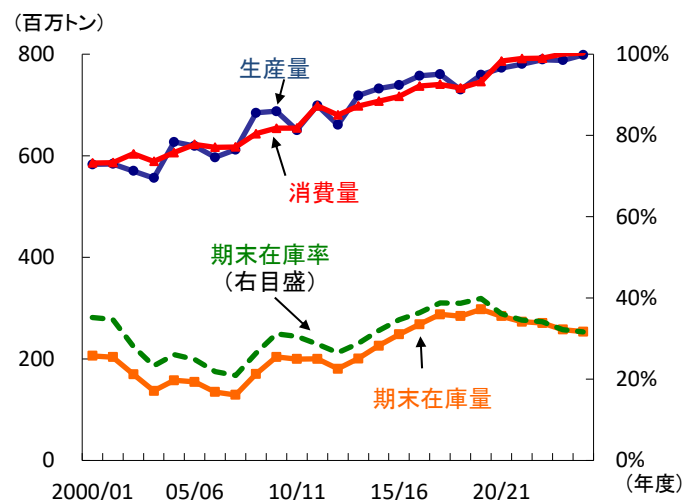
消費量 前年度比  前月比 **－**

- ・中国、ロシア等で減少したものの、アフガニスタン、パキスタン等で増加し、前年度から増加した。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 **－**

- ・ウクライナ等で減少したものの、アルゼンチン、豪州、米国等で増加し、前年度から増加した。

期末在庫量 前年度比  前月比 **－**



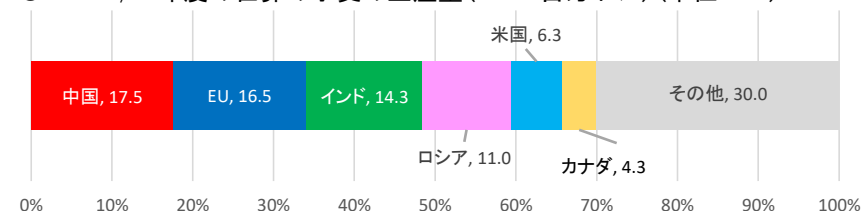
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

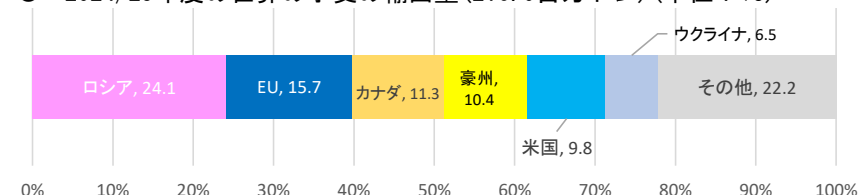
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	789.2	787.7	798.2	－	1.3
消 費 量	791.9	800.3	802.4	－	0.3
うち飼料用	154.9	160.1	151.8	－	▲ 5.2
輸 出 量	220.7	215.7	216.0	－	0.2
輸 入 量	212.1	213.7	209.4	－	▲ 2.0
期末在庫量	270.4	257.8	253.6	－	▲ 1.6
期末在庫率	34.1%	32.2%	31.6%	－	▲ 0.6

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (10 May 2024)

○ 2024/25年度の世界の小麦の生産量(798.2百万トン)(単位: %)



○ 2024/25年度の世界の小麦の輸出量(216.0百万トン)(単位: %)



○ 2024/25年度の世界の小麦の輸入量(209.4百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度比 2.5%増の 50.6 百万トン

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2024/25 年度の実生産量は、前年度から収穫面積及び単収が増加することから 50.6 百万トンと、前年度と比べ 2.5%増、過去 5 年平均(48.2 百万トン)と比べても 4.8%増となる見込み。種類別には、冬小麦が前年度比 2 %増の 34.8 百万トン、春小麦及びデュラム小麦が前年度比 3 %増の 15.8 百万トンとなる見込み。

「Wheat Outlook」(2024.5.14)によれば、2024/25 年度の品種別生産量は、ハード・レッド・ウインター(HRW)は、収穫面積の増加と前年度の干ばつからの回復による単収の増加を受けて前年度比 17%増の 19.2 百万トンとなる見込み。他方、ソフト・レッド・ウインター(SRW)は、前作物のとうもろこし及び大豆の収穫が遅れ作付面積が減少したこと等を受けて前年度比 23%減の 9.4 百万トンとなる見込み。ホワイト・ウインターは、単収増から前年度比 16%増の 6.2 百万トンとなる見込み。

「Crop Progress」(2024.5.13)によれば、5 月 12 日現在、冬小麦の 57%が出穂しており、作柄は「やや良～良」の割合が 50%と、干ばつの影響があった前年度同期の 29%から 21 ポイント上回っている。また、春小麦の作付進捗率は天候に恵まれたこともあり 61%と、前年度同期の 35%、過去 5 年平均の 48%をいずれも上回っていると同時に、出芽進捗率も 25%と、前年度同期の 11%、過去 5 年平均の 18%をいずれも上回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出力は、米国における生産量増による輸出余力の増加に加え、ロシア及びウクライナの生産量減による輸出力の減少に伴う米国産の相対的な価格競争力の高まりを受けて 21.1 百万トンと、前年度に比べ 7.6%増加するものの、過去 5 年平均(23.1 百万トン)比では 8.5%減となる見込み。一方で、高品質小麦については、カナダ及び豪州の生産量も増加することから、高品質小麦の市場であるアジア等で両国との競争が激化すると予想されている。また、2023/24 年度の輸出力は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され 19.6 百万トンとなったものの、前年度に比べ 5.1%減少し、1972/73 年度以降で最低の見込み。

2024/25 年度の輸入量は、生産量の増加により国内需給が緩和することから 3.3 百万トンと、前年度に比べ 14.2%減少となる見込み。

2024/25 年度の期末在庫量は、生産量の増加等により 20.9 百万トンと、前年度に比べ 11.4%増加し 4 年ぶりの高水準となる見込み。

小麦－米国（冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年6月～25年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	44.9	49.3	50.6	—	2.5
消 費 量	30.4	30.3	30.6	—	0.9
うち飼料用	2.1	2.5	2.7	—	11.0
輸 出 量	20.7	19.6	21.1	—	7.6
輸 入 量	3.3	3.8	3.3	—	▲ 14.2
期末在庫量	15.5	18.7	20.9	—	11.4
期末在庫率	30.4%	37.5%	40.3%	—	2.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.36	15.08	15.37	—	1.9
単収(t/ha)	3.13	3.27	3.29	—	0.6

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)

図：米国の小麦の生産量・輸出力等の推移

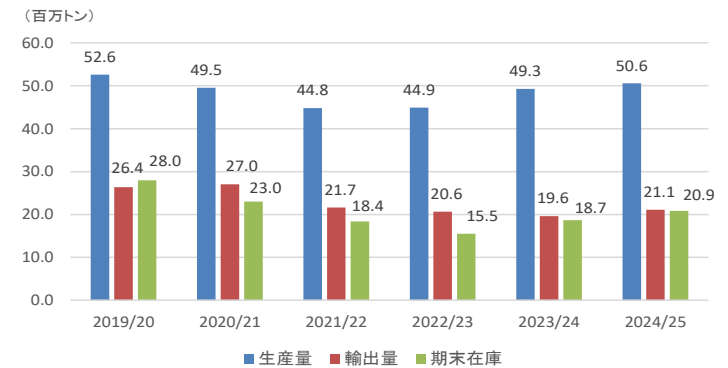


表 米国産小麦の品種別生産量の推移

品種名	2023/24年度	2024/25年度	増減率 (%)
ハード・レッド・ウインター	16.4	19.2	17
ソフト・レッド・ウインター	12.2	9.4	-23
ホワイト・ウインター	5.4	6.2	16
春小麦及びデュラム小麦	15.3	15.8	3
合 計	49.3	50.6	

資料：USDA 「Wheat Outlook」(2024.5.14)をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度比 8.3%増の 34.6 百万トン

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2024.5.21)によれば、2024/25 年度の小麦全体の生産量は、前月予測から変更はなく 34.6 百万トンと、干ばつの影響を受け生産量が減少した前年度に比べ 8.3%増、過去 5 年平均と比べても 10.3%増加する見込み。種類別の生産量は、普通小麦、デュラム小麦ともに前月予測からの変更はなく、それぞれ 28.9 百万トン(前年度比 3.7%増、過去 5 年平均 9.3%増)、5.7 百万トン(同 39.8%増、15.6%増)。デュラム小麦は春小麦に比べ価格が高いことから作付面積が増加し、生産量が増加する見込み。

春小麦の主要産地であるプレーリー平原では、3 月まで乾燥天候であったものの、4 月に平均降雨量を上回る降雨があった。この降雨により表層の土壌水分は改善された一方、深層の土壌水分は不足しているため、生育期の適時な降雨が必要とされている。

カナダ各州政府によれば、サスカチュワン州では、作付けが遅延したものの降雨に恵まれ、表層の土壌水分量が改善した。5 月 13 日現在、普通小麦及びデュラム小麦の作付進捗率はそれぞれ 36%(過去 5 年平均 43%)、38%(同 38%)となった。アルバータ州では平年を超える気温により作付けが早まったものの、5 月 14 日現在、春小麦の作付進捗率は 45%と、前年度同期 70%を大きく下回っている。マニトバ州では、5 月 21 日現在、春小麦の作付進捗率は前週の 58%から 77%に進展し、同州中央部分では早期に作付された小麦の出芽が始まるとともに、最近の降雨により大部分の生産地の土壌水分は良好となっている。冬小麦の主要産地であるオンタリオ州では、大部分の冬小麦の生育状況は良好である。

【貿易情報・その他】AAFCによれば、2024/25 年度の輸出量は、前月予測に比べ 0.2 百万トン上方修正され前年度比 5.5%増の 24.8 百万トンの見込み。種類別には、普通小麦は、世界的な高たんぱく質小麦の需要が堅調なことを受けて前年度に比べわずかに増加し 20.3 百万トンとなるほか、デュラム小麦も生産量の回復により輸出余力が増加するとともに、北アフリカ及び欧州への輸出量の増加を受け前年度比 40.6%増の 4.5 百万トンとなる見込み。

カナダ穀物委員会(CGC)によれば、2024 年 3 月の輸出量は 216.1 万トン。種類別には、普通小麦は 171.1 万トンで、輸出先国はバングラデシュ(22.2%)、中国(15.4%)、インドネシア(11.3%)の順。デュラム小麦は 45.0 万トンで、アルジェリア(42.9%)、モロッコ(26.4%)、米国(11.3%)の順。

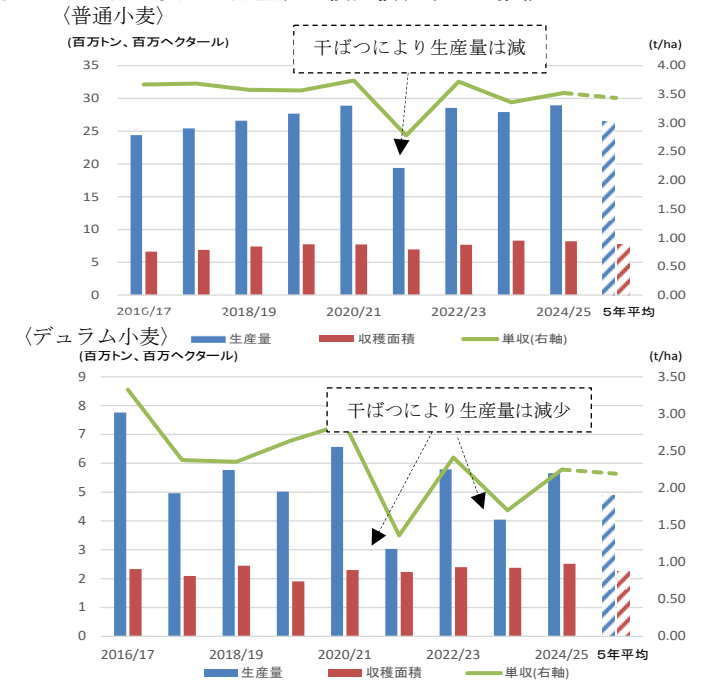
AAFCによれば、2024/25 年度の期末在庫量は、生産量の増加等を受けて前年度比 27.1%増の 3.8 百万トンの見込み。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年8月～25年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	34.3	32.0	34.0 (34.6)	—	6.4
消 費 量	9.5	9.7	9.3 (9.2)	—	▲ 4.1
うち飼料用	4.3	4.5	4.0 (4.9)	—	▲ 11.1
輸 出 量	25.6	24.0	24.5 (24.8)	—	2.1
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.2)	—	▲ 8.3
期末在庫量	3.5	2.4	3.1 (3.8)	—	31.6
期末在庫率	10.0%	7.0%	9.2% (11.0%)	—	2.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.08	10.68	10.70 (10.73)	—	0.2
単収(t/ha)	3.41	2.99	3.18 (3.23)	—	6.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 May 2024)

図 カナダ産小麦の生産量、収穫面積、単収の推移



資料：AAFC 「Reports and statistics data for Canadian Principal Field Crops」
(2024. 5. 21) のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 豪州 ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度比 11.5%増の 29.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、降雨不足であった前年度から単収が増加することを受け 29.0 百万トンと、前年度比 11.5%増となる一方、過去 5 年平均(29.8 百万トン)比では 2.8%減となる見込み。

現地情報会社によれば、5 月上旬現在の作付進捗率は 45%で前年度同期の 70%を下回っている。特に、ウェスタンオーストラリア州（WA 州）では 20%で前年度同期の 70%を大きく下回っており、いずれも乾燥の影響を受けて作付作業に遅れが生じている。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2024.5.14)によれば、WA 州の小麦地帯南部では散発的に降雨があり、表層の土壌水分量は作付けや初期の生長に十分である。一方で、サウスオーストラリア州及びビクトリア州の西部では乾燥した天候が続き、出芽に不向きな状況になっている。その他の小麦地帯では広範囲で降雨があり、作付けや初期の生長に必要な土壌水分量となっている。

西豪州穀物産業協会（GIWA）(2024.5.10)によれば、2024/25 年度の WA 州における小麦の作付面積は、乾燥傾向が続く可能性があることから、前月予想 4.96 百万ヘクタールから 5.2%下方修正され 4.7 百万ヘクタールとなる見込み。なお、今後 2 週間で十分な降雨があった場合には、作付面積は増加する可能性がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、乾燥天候からの回復に伴い生産量が増加すること等により 22.5 百万トンと、前年度に比べ 9.8%増となるものの、過去 5 年平均(22.5 百万トン)と比べれば 0.2%減となる見込み。

ABARES によれば、2023/24 年度のうち 2023 年 10 月～2024 年 3 月の輸出量は 1,140.7 万トンと、前年度同期（1,652.7 万トン）に比べ 31.0%減少している。輸出量の減少は乾燥により生産量が減少したことが主因。このうち、2024 年 3 月の輸出量は 257.5 万トンで、前年度同期（376.7 万トン）に比べ 31.6%減少しており、輸出先国は、中国(28.8%)、インドネシア(16.0%)、イエメン(13.3%)の順で、アジア市場向けの輸出が多くなっている。

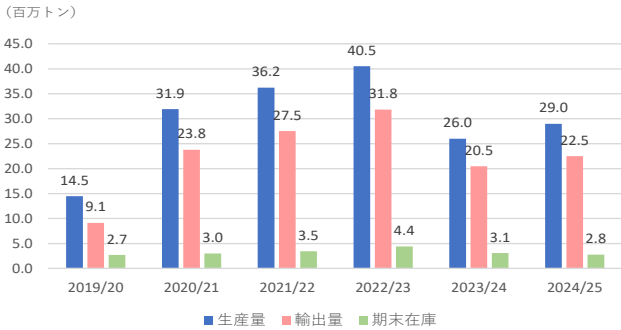
USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、生産量は増加するものの、乾燥天候からの回復に伴い輸出量が増加することから 2.8 百万トンと、前年度に比べ 9.8%減となる見込み。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10年～25年9月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	40.6	26.0	29.0 (30.1)	—	11.5
消 費 量	8.0	7.0	7.0 (8.3)	—	—
うち飼料用	4.5	3.5	3.5 (4.5)	—	—
輸 出 量	31.8	20.5	22.5 (21.5)	—	9.8
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	—	—
期末在庫量	4.4	3.1	2.8 (2.9)	—	▲ 9.8
期末在庫率	11.0%	11.2%	9.4% (9.8%)	—	▲ 1.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)※	13.05	12.50	12.50 (12.50)	—	—
単収(t/ha)	3.11	2.08	2.32 (2.41)	—	11.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC 「Grain Market Report」(18 April 2024)

図 豪州の小麦の生産量・輸出量等の推移



資料：USDA「PS&D」(2024.5.10)をもとに農林水産省で作成

表 豪州産小麦の輸出状況

2024年3月			2023年10月～2024年3月			2022年10月～2023年3月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	74.2	28.8%	中国	291.8	25.6%	中国	444.0	26.9%
インドネシア	41.1	16.0%	インドネシア	206.0	18.1%	インドネシア	227.3	13.8%
イエメン	34.4	13.3%	フィリピン	99.8	8.7%	フィリピン	157.9	9.6%
ベトナム	17.8	6.9%	イエメン	80.5	7.1%	韓国	149.2	9.0%
韓国	16.2	6.3%	ベトナム	73.1	6.4%	ベトナム	135.3	8.2%
フィリピン	13.5	5.2%	日本	64.6	5.7%	タイ	90.7	5.5%
その他	60.3	23.4%	その他	324.8	28.5%	その他	448.2	27.1%
計	257.5	100.0%	計	1,140.7	100.0%	計	1,652.7	100.0%

資料:ABARES「Trade dashboard」をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2024/25 年度の生産量は前年度比 4.2%減の 127.0 百万トン

【生育・生産状況】欧州委員会(2024.4.25)によれば、2024/25 年度の実生産量は、2023 年秋の多雨で冬小麦の作付けが困難となり、また、過剰な降雨等により前年度から収穫面積及び単収が減少することから 127.0 百万トンと、前年度比で 4.2%減少する見込み。このうち、普通小麦は 120.2 百万トンと、前年度比で 4.3%減、5 年平均比でも 5.2%減となる見込み。デュラム小麦も 6.9 百万トンと、前年度比で 2.0%減、5 年平均比でも 7.4%減となる見込み。

2024/25 年度の収穫面積は 22.8 百万ヘクタールと、前年度比で 4.5%減少する見込み。普通小麦は 20.8 百万ヘクタールと前年度比で 4.2%減少する見込みであるほか、デュラム小麦も 2.0 百万ヘクタールと前年度比で 7.6%減少する見込み。2023 年秋の多雨により冬小麦の作付けが困難となり、特にフランス、ドイツ等で収穫面積が減少する見込み。また、過剰な降雨によりスロバキア、チェコ、オーストリア、ドイツ等で前年度に比べ単収が減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、生産量は減少するものの、ウクライナにおける生産量の減少に伴い同国からの輸入量が減少するほか、大麦及びとうもろこしの生産量の増加に伴い飼料用小麦の輸入が減少することを受けて 11.0 百万トンと、前年度比 18.5%減となるものの、過去 5 年平均(8.3 百万トン)に比べ 33.3%増となる見込み。

2024/25 年度の輸出量は、主要輸出国であるフランスの実生産量が 2023 年秋の多雨の影響により減少すること等により 34.0 百万トンと、前年度比で 2.9%減、過去 5 年平均比(34.3 百万トン)と比べれば 0.9%減の見込み。

欧州委員会によれば、2023/24 年度のうち 2023 年 7 月から 2024 年 2 月までの普通小麦の輸出量は 2,477.8 万トンで、前年度同期に比べ 11.3%増加。同期間の輸出先国別のシェアは、モロッコ 14.9%、アルジェリア 10.3%、ナイジェリア 8.6%、中国 7.2%の順となっている。

USDA によれば、5 月 8 日時点における輸出価格 (FOB) は、ロシア産が 224 ドル/トン、EU 産が 238 ドル/トンとなっており、EU 産は価格競争力のあるロシア産との競争が続いており、2024/25 年度もロシア及びウクライナ産小麦との競争が続くと予想されている。

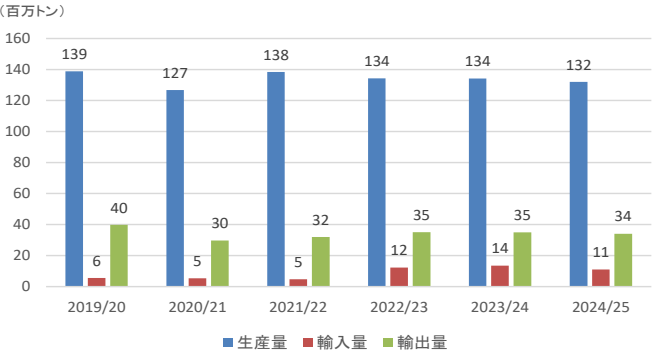
2024/25 年度の期末在庫量は、生産量や輸入量が減少することから 14.4 百万トンと、前年度に比べ 13.5%減となる見込み。

小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生 産 量	134.3	134.2	132.0 (128.7)	—	▲ 1.6
消 費 量	109.0	112.0	111.3 (107.9)	—	▲ 0.7
うち飼料用	45.0	47.5	46.5 (44.0)	—	▲ 2.1
輸 出 量	35.1	35.0	34.0 (32.3)	—	▲ 2.9
輸 入 量	12.2	13.5	11.0 (6.4)	—	▲ 18.5
期末在庫量	16.0	16.7	14.4 (14.3)	—	▲ 13.5
期末在庫率	11.1%	11.4%	9.9% (10.2%)	—	▲ 1.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	24.40	24.20	23.40 (22.84)	—	▲ 3.3
単収(t/ha)	5.50	5.54	5.64 (5.64)	—	1.8

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC 「Grain Market Report」(18 April 2024)

図 EU の小麦の実生産量・輸入量・輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2024. 5. 10) をもとに農林水産省で作成

表 EU の普通小麦の輸出量と輸出先国

2024年2月			2023年7月-2024年2月			2022年7月-2023年2月		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
モロッコ	56.2	19.1%	モロッコ	369.8	14.9%	モロッコ	321.7	14.5%
中国	48.6	16.5%	アルジェリア	254.4	10.3%	アルジェリア	300.4	13.5%
アルジェリア	43.4	14.8%	ナイジェリア	213.5	8.6%	ナイジェリア	190.5	8.6%
サウジアラビア	28.1	9.6%	中国	179.4	7.2%	エジプト	162.9	7.3%
ナイジェリア	22.0	7.5%	エジプト	143.2	5.8%	サウジアラビア	113.0	5.1%
韓国	8.8	3.0%	サウジアラビア	105.6	4.3%	中国	103.1	4.6%
その他	86.9	29.6%	その他	1,211.8	48.9%	その他	1,034.9	46.5%
合計	294.0	100.0%	合計	2,477.8	100.0%	合計	2,226.5	100.0%

資料：欧州委員会「Cereals exports and imports」をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2024/25 年度の生産量は 140.0 百万トンと史上最高の見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、前年度から収穫面積及び単収が増加することから 140.0 百万トンと、前年度比 2.5%増、過去 5 年平均(135.8 百万トン)と比べても 3.1%増となり史上最高となる見込み。

中国国家気象センター「中国気象農業頻道」の 5 月上旬の情報によれば、2024/25 年度の冬小麦は、気温が平年に比べ高く、降水量も平年より多く土壌水分状態に恵まれた。また、日照時間は平年に近く、生育に適した天候となっている。

冬小麦の 4 月末現在の生育状況は、開花期から成熟期を迎えており、南部の雲南省では収穫が始まっており、生育は平年並みか平年より 3 ～ 8 日早くなっている。

また、2023/24 年度と比較した主要産地の冬小麦の単収は、河南省、四川省及び甘粛省は前年比 1.5%以上の増加が予想されており、それ以外の主要産地は前年比 1.5%以内の増減に収まり横ばいが予想されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、経済成長による食生活の変化に伴い小麦粉需要が増加する一方、2023/24 年度に飼料用グレード国産小麦が増加していたものが減少し飼料用消費量が減少することから 150.0 百万トンと、前年度比 2.3%減となるものの、過去 5 年平均(146.1 百万トン)と比べると 2.7%増となる見込み。

USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、史上最高の生産量となり国内需給が緩和することから 11.0 百万トンと、前年度に比べ 4.3%減少する見込み。

中国海関統計によれば、2023 年 1 月から 12 月の輸入量合計は 1,209.9 万トンと、前年比 21.5%増となっており、これは収穫前の豪雨により高品質小麦の国内需給が逼迫したためである。同期間の輸入先国別のシェアは、豪州 57.4%、カナダ 21.1%、フランス 6.8%、米国 7.7%の順で、豪州及びカナダの 2 か国で輸入シェアの 79%を占めている。2024 年 1 月から 3 月の輸入量は 428.7 万トンで、豪州が 168.3 万トン、フランスが 105.9 万トン、カナダが 92.3 万トン、米国が 39.3 万トンとなっており、豪州の輸入シェアが約 40%に減少し、輸出先国のシェアが分散されている。

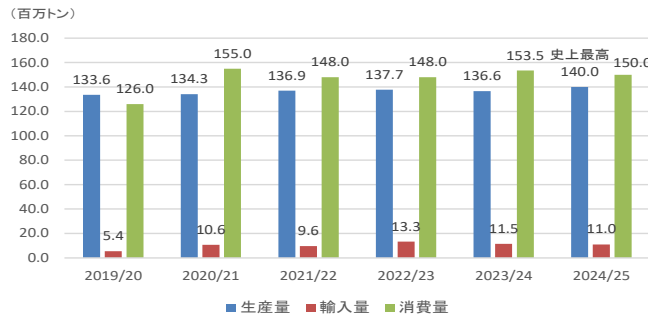
USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、生産量が増加するものの輸入量が減少し 132.6 百万トンと、前年度に比べ 0.1%増に留まる見込み。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	137.7	136.6	140.0 (138.5)	—	2.5
消 費 量	148.0	153.5	150.0 (146.3)	—	▲ 2.3
うち飼料用	33.0	37.0	33.0 (28.0)	—	▲ 10.8
輸 出 量	1.0	0.9	0.9 (1.2)	—	—
輸 入 量	13.3	11.5	11.0 (10.7)	—	▲ 4.3
期末在庫量	138.8	132.5	132.6 (140.2)	—	0.1
期末在庫率	93.2%	85.8%	87.9% (95.1%)	—	2.1

(参考)
収穫面積(百万ha) 23.52 23.63 23.70 (23.65)
単収(t/ha) 5.86 5.78 5.91 (5.86)
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC 「Grain Market Report」(18 April 2024)

図 中国の小麦の生産量・輸入量・消費量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2024. 5. 10)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦輸入量と輸入先国

国 名	2024年1月～3月		2023年1月～3月		2023年1月～2023年12月	
	輸入量	シェア	輸入量	シェア	輸入量	シェア
豪州	168.3	39.3	253.3	58.2	693.9	57.4
フランス	105.9	24.7	77.4	17.8	82.5	6.8
カナダ	92.3	21.5	78.4	18.0	254.8	21.1
米国	39.3	9.2	20.4	4.7	92.6	7.7
カザフスタン	13.5	3.1	1.9	0.4	51.9	4.3
ロシア	8.6	2.0	1.9	0.4	28.5	2.4
その他	0.8	0.2	1.8	0.4	5.7	0.5
計	428.7	100.0	434.9	100.0	1,209.9	100.0

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2024/25 年度の生産量は前年度比 3.8%減の 88.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実生産量(クリミア地域分を含まず)は、前年度から収穫面積及び単収が減少することから 88.0 百万トンと、前年度比 3.8%減となるものの、過去 5 年平均(83.5 百万トン)と比べれば 5.4%増と史上 3 番目となる見込み。種類別には、冬小麦は前年度と変わらず 64.0 百万トンであるも、春小麦は 24.0 百万トンと前年度比 12.7%減の見込み。

ロシア気象センターによれば、2024/25 年度の冬穀物の状況は、ロシアヨーロッパ部の北部及び中部では、4 月は大部分の地域で平年より高い気温のため圃場の雪も早々に溶け、4 月末時点の冬穀物の作柄は概ね「良好」となっていた。また、ロシアヨーロッパ部南部では、4 月は気温が非常に暖かく乾燥した気象条件となっており、4 月末時点で冬小麦の作柄は「良好」又は「平年並み」となっていたが、両地域とも 5 月の寒波で冬小麦の生育に影響を与えるおそれがある。

ロシア農業省によれば、5 月 7 日現在の春小麦の作付面積は 242 万ヘクタールとなっており、作付進捗率は 18.2%で前年度同期 41%に比べ大幅に遅れている。これは主産地のシベリア地域の 4 月の気象条件が冬のような寒さに見舞われたことによる。また、ロシア気象センターによれば、ロシアアジア部のうち極東連邦管区の沿岸地方では、温暖な気候を受け、春小麦の作付けが始まっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、供給量（期首在庫と生産量の合計）の減少により 52.0 百万トンと、史上最高となった前年度に比べ 2.8%減少するものの、過去 5 年平均(41.6 百万トン)に比べ 24.9%増加となる見込み。なお、生産量は減少するものの、EU 及びウクライナ産の生産量も減少することから、両国に比べ引き続き価格競争力を維持する可能性が高いと予想されている。

現地情報会社によれば、2023/24 年度のうち 2023 年 7 月から 2024 年 4 月までの輸出量は、4,473.9 万トンと、供給量の増加等を受け史上最高であった 2022/23 年度の同期間(4,060.4 万トン)を 10.2%上回った。なお、4 月の輸出量は 473.1 万トンで、輸出先国別には、エジプト 99.1 万トン(20.9%)、トルコ 52.5 万トン(11.1%)、バングラデシュ 43.1 万トン(9.1%)、サウジアラビア 38.7 万トン（8.2%）の順となっている。

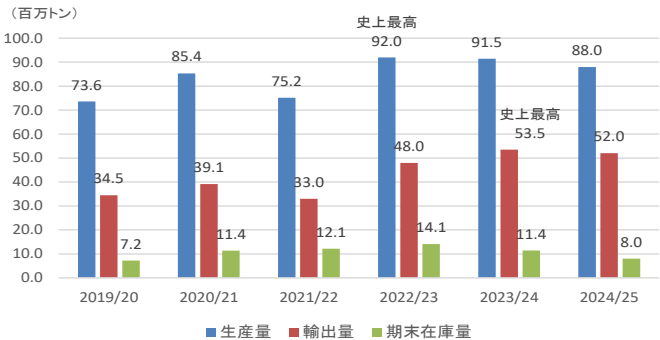
USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、消費量及び輸出量は減少するものの、生産量も減少となることから 8.0 百万トンと、前年度に比べ 30.2%減となる見込み。

小麦ーロシア（主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	92.0	91.5	88.0 (90.4)	—	▲ 3.8
消 費 量	42.3	41.0	39.8 (43.0)	—	▲ 3.0
うち飼料用	19.0	18.0	17.0 (18.4)	—	▲ 5.6
輸 出 量	48.0	53.5	52.0 (48.1)	—	▲ 2.8
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.1)	—	—
期末在庫量	14.1	11.4	8.0 (10.4)	—	▲ 30.2
期末在庫率	15.7%	12.1%	8.7% (11.4%)	—	▲ 3.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	29.00	28.83	28.50 (28.22)	—	▲ 1.1
単収(t/ha)	3.17	3.17	3.09 (3.20)	—	▲ 2.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC 「Grain Market Report」(18 April 2024)

図 ロシアの小麦の生産量・輸出量等の推移



資料：USDA「PS&D」(2024. 5. 10)をもとに農林水産省で作成

表 ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2024年4月)			2023/24年度 (2023年7月～2024年4月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
エジプト	99.1	20.9	エジプト	710.2	15.9
トルコ	52.5	11.1	トルコ	595.6	13.3
バングラデシュ	43.1	9.1	バングラデシュ	334.1	7.5
サウジアラビア	38.7	8.2	パキスタン	213.0	4.8
カザフスタン	25.9	5.5	アルジェリア	193.5	4.3
ケニア	24.7	5.2	カザフスタン	182.0	4.1
リビア	19.2	4.1	サウジアラビア	179.9	4.0
その他	169.9	35.9	その他	2,065.6	46.2
計	473.1	100.0	計	4,473.9	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度比 8.7%減の 21.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、ロシアの侵攻による耕作面積の減少により前年度から収穫面積及び単収が減少することから21.0百万トンと、前年度比8.7%減、ロシアのウクライナ侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22年度、27.9百万トン)と比べても24.8%減と、2012/13年度の15.8百万トン以降最小の収穫量となる見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、2024/25年度の冬小麦の作付面積は4.36百万ヘクタールと、ロシアの侵攻による耕作面積の減少により前年度から0.1百万ヘクタール減少する見込み。4月の気温は平年より5度以上高く、4月末時点での冬小麦の生育は、平年より10～14日ほど早くなっており、作柄は概ね平年並みとなっている。一方で、5月の寒波で冬小麦の生育に影響を与えるおそれがある。

2024/25年度の春小麦の作付面積は5月2日現在0.25百万ヘクタールと、前年度比0.2%減の見込み。5月10日現在の作付進捗率は予定面積に対して99.5%となっており、作付けはほぼ終了している。

【貿易状況・その他】USDA によれば、2024/25年度の輸出量は、生産量と期首在庫の減少により14.0百万トンと、前年度比20.0%減、ロシアのウクライナ侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22年度、18.1百万トン)と比べても22.7%減となる見込み。

現地情報会社によれば、2023/24年度のうち2023年7月から2024年4月までの輸出量は、1,577.8万トンと、前年度同期1,444万トンに比べ9.3%増、ロシアのウクライナ侵攻前の2020/21年度同期1,512.1万トンと比べても4.3%増となっている。このうち、直近4月の輸出量は193.6万トンと過去5年平均比120.7%増となっており、輸出先国別には、スペインが69.1万トン(23.9%)、アルジェリアが23.6万トン(12.2%)、インドネシアが21.8万トン(11.3%)の順で、スペイン向けシェアが高くなっており、これは同国における乾燥天候による生産量の減少や飼料用小麦需要の増加等の影響を受けてのものである。

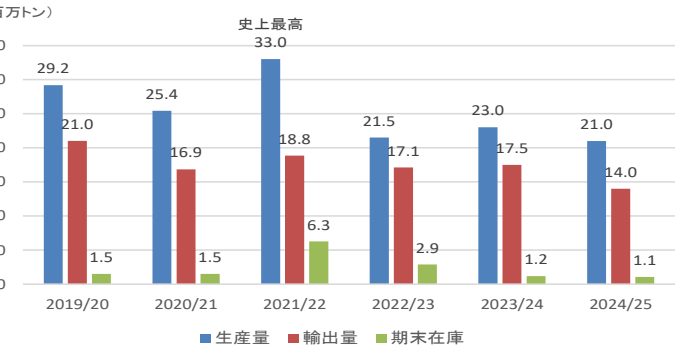
USDAによれば、2024/25年度の期末在庫量は、消費量及び輸出量は減少するものの、生産量も減少となることから1.1百万トンと前年度比10.2%減となり、史上2番目に低い水準となる見込み。

小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値、()	はIGC		
生産量	21.5	23.0	21.0	(24.5)	—	▲ 8.7
消費量	7.8	7.3	7.2	(12.0)	—	▲ 1.4
うち飼料用	3.0	2.5	2.5	(2.1)	—	—
輸出量	17.1	17.5	14.0	(12.5)	—	▲ 20.0
輸入量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	—	—
期末在庫量	2.9	1.2	1.1	(1.4)	—	▲ 10.2
期末在庫率	11.6%	4.8%	5.0%	(5.7%)	—	0.2
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.60	5.01	4.70	(6.00)	—	▲ 6.2
単収(t/ha)	3.84	4.59	4.47	(4.08)	—	▲ 2.6

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC 「Grain Market Report」(18 April 2024)

図 ウクライナの小麦の生産量・輸出量等の推移



資料：USDA 「PS&D」(2024. 5. 10)をもとに農林水産省で作成

表 ウクライナ産小麦の輸出先別数量 (単位: 万トン)

2024年4月		2023年7月～2024年4月	
国名	輸出量	国名	輸出量
スペイン	69.1	スペイン	511.8
アルジェリア	23.6	エジプト	131.2
インドネシア	21.8	トルコ	106.3
ベトナム	13.9	インドネシア	106.1
バングラデシュ	13.6	ルーマニア	100.1
レバノン	9.6	パキスタン	81.4
エジプト	9.3	バングラデシュ	64.4
トルコ	9.2	イタリア	58.2
チュニジア	6.4	ベトナム	54.6
マレーシア	3.3	アルジェリア	50.7
その他	13.8	その他	312.9
合計	193.6	合計	1,577.8

資料：APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2024/25 年度

生産量

前年度比

前月比

—

消費量

前年度比

前月比

—

輸出量

前年度比

前月比

—

期末在庫量

前年度比

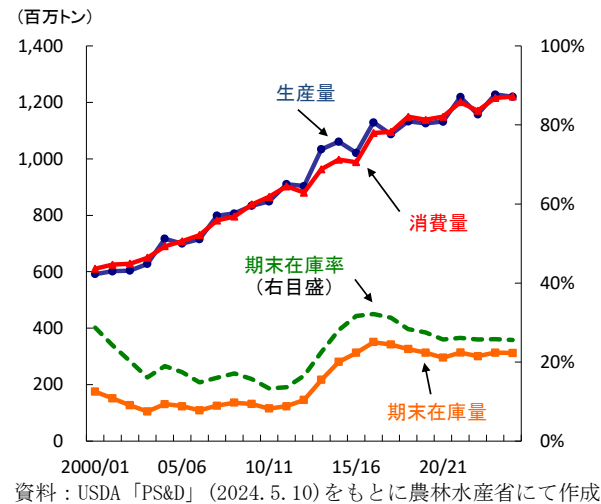
前月比

—

・ブラジル、EU、中国、南アフリカ等で増加も、米国、ウクライナ等で減少し、前年度を下回る見込み。

・中国、インド、ブラジル、米国等で増加し、史上最高の見込み。

・米国、南アフリカ等で増加も、ウクライナ、アルゼンチン等で減少し、前年度を下回る見込み。

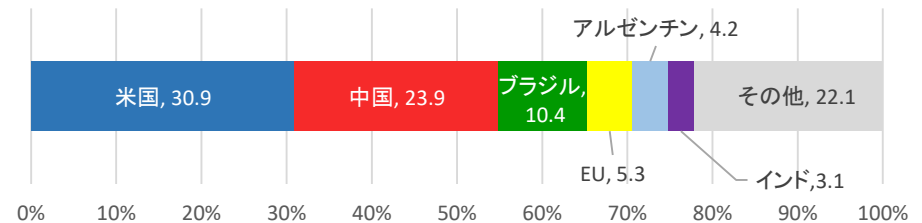


◎世界のとうもろこし需給

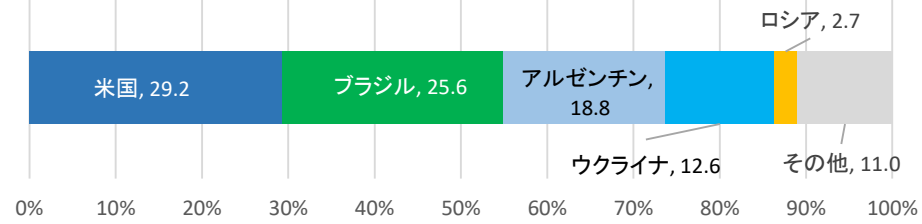
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,157.9	1,228.1	1,219.9	—	▲ 0.7
消 費 量	1,170.6	1,215.9	1,220.8	—	0.4
うち飼料用	732.1	760.3	774.0	—	1.8
輸 出 量	180.4	197.4	191.1	—	▲ 3.2
輸 入 量	173.5	185.8	184.4	—	▲ 0.7
期末在庫量	300.9	313.1	312.3	—	▲ 0.3
期末在庫率	25.7%	25.7%	25.6%	—	▲ 0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（10 May 2024）

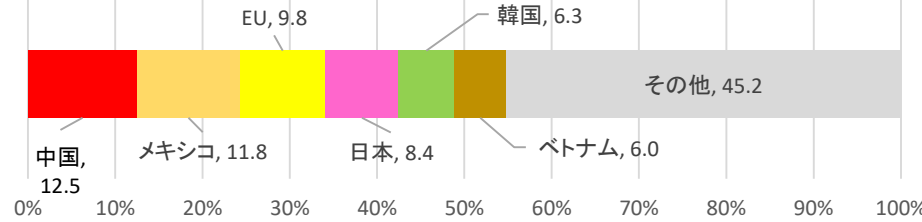
○ 2024/25 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,219.9 百万トン) (単位：%)



○ 2024/25 年度 世界のとうもろこしの輸出量(191.1 百万トン) (単位：%)



○ 2024/25 年度 世界のとうもろこしの輸入量(184.4 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度より 3.1%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実生産量は、収穫面積の減少（対前年度比 5.1%減）を受け、史上最高の前年度より 3.1%減の 377.5 百万トンの見通し。現在の価格相場は大豆の作付けに有利であるため、多くの農家がとうもろこしから大豆の作付けに切り替えるとみられる。

USDA「Crop Progress」（2024.5.13）によれば、とうもろこしの作付進捗率は 49%と、前年度同期（60%）、過去 5 年平均（54%）をいずれも下回っている。主要生産州のアイオワ州では、4 月に降雨があり作付け作業が進展したものの、3 月の干ばつを受けて例年のペースを下回っている。発芽率は 23%と、前年度同期（25%）を下回ったものの、過去 5 年平均（21%）は上回っている。

「OIL WORLD Weekly」（2024.5.10）によれば、4 月に降雨があり、多くの地域で発芽に好影響を与えた。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、安価なとうもろこし価格から飼料需要が増加したことを受けて前年度に比べ 0.4%増の 320.2 百万トンの見通し。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、輸出競合国であるブラジルやアルゼンチン、ウクライナからの輸出が減少する一方、メキシコ等からの需要が増大するとの見通しから、前年度より 2.3%増の 55.9 百万トンの見込み。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2024.5.10）によれば、本年 5 月の米国産の輸出価格は、5 月 7 日現在、輸出成約高が好調なことを受けて前月から 11 ドル/トン上昇し、204 ドル/トン。なお、2023 年 9 月～2024 年 4 月の輸出量は 3,072 万トンと、前年度同時期の 2,127 万トンより 44%増。主な輸出先は、メキシコ（950 万トン）、中国（905 万トン）、日本（318 万トン）の順。干ばつにより減産したメキシコ向け輸出量が最も大きくなっている。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、昨年の史上最高に次ぐ高水準の実生産量となる見通しを受けて、前年度より 4.0%増の 53.4 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より 0.4 ポイント上昇し 14.2%と、過去 3 年平均（11.0%）を上回っている。

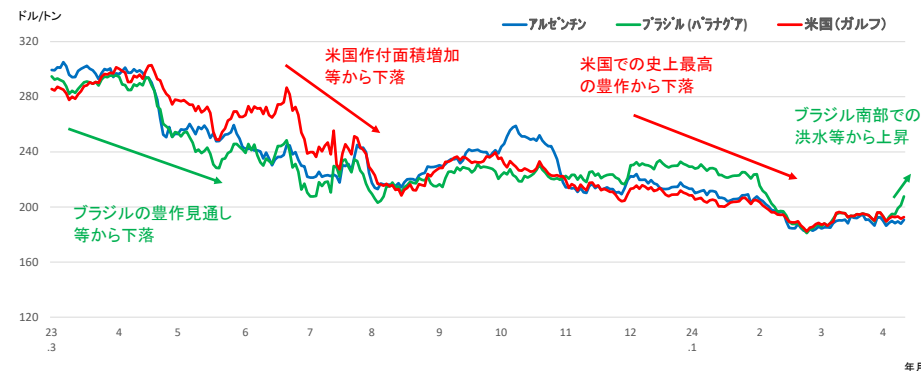
とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年9月～25年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	346.7	389.7	377.5	-	▲ 3.1
消 費 量	306.0	318.9	320.2	-	0.4
うち飼料用 エタノール用等	139.4 131.5	144.8 138.4	146.1 138.4	-	0.9 -
輸 出 量	42.2	54.6	55.9	-	2.3
輸 入 量	1.0	0.6	0.6	-	-
期末在庫量	34.6	51.4	53.4	-	4.0
期末在庫率	9.9%	13.8%	14.2%	-	0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	31.85	35.01	33.23	-	▲ 5.1
単収(t/ha)	10.89	11.13	11.36	-	2.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（10 May 2024）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGC のデータをもとに農林水産省にて作成。

＜ ブラジル ＞ 2024/25 年度の生産量は増加の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2024/25 年度の実産量は、収穫面積の増加を受けて前年度より 4.1%増の 127.0 百万トンと、史上第 2 位の生産量となる見通し。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2024.5.14）によれば、2023/24 年度のとうもろこしの生産量は、前年度比 15.4%減の 111.6 百万トンの見込み（P.23 大豆ーブラジルのクroppカレンダー参照）。夏とうもろこしは、エルニーニョ現象による南部での作付期の降雨過多の影響等により、前年度比 14.2%減の 23.5 百万トンの見込み。冬とうもろこしも、中西部の高温乾燥の影響を受け、前年度比 15.7%減の 88.1 百万トンの見込み。

USDA によれば、5 月上旬、南部のリオ・グランデ・ド・スール州において多雨により洪水が発生し、長引く降雨により農地や保管施設の復旧が遅れている。リオ・グランデ・ド・スール州は、夏とうもろこしの主要生産州であり、とうもろこし全国の実産量の 5 %程度を占めている。リオ・グランデ・ド・スール州における夏とうもろこしの収穫進捗率は 5 月 9 日時点で 83%と、収穫期の終盤を迎えているものの、保管施設等での被害も確認されており、損失が拡大する可能性もある。

一方、冬とうもろこしは、CONAB によれば、5 月 6 日現在、主要生産州の中西部マツト・グロッソ州では登熟期にあり、作柄は良く、土壌水分は十分。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の実消費量は、国内の畜産物消費の増加を背景とした飼料用需要の増加から、前年度より 1.3%増の 80.5 百万トンと史上最高の実込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の実輸出量は、供給量（前年度の実在庫量と本年度の実生産量の合計）の減少を受けて前年度より 2.0%減の 49.0 百万トンとなり、前年に引き続き米国に次ぐ世界第 2 位の輸出国となる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024 年 1 ～ 4 月の輸出量は 7.1 百万トンで、史上最高の増産となった前年度より減産したことから前年度同期比 31%減。内訳は、中国（1.5 百万トン）、イラン（0.9 百万トン）、エジプト（0.7 百万トン）の順。なお、とうもろこし輸出は、大豆の輸出が一巡し、輸送や港湾の輸出キャパシティに余裕が出てくる本年後半以降、冬とうもろこしの収穫を受け本格化するとみられる。

とうもろこしーブラジル

（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約 8 割、夏とうもろこしは約 2 割）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 （見込み）	2024/25（25年3月～26年2月）			
			予測値、（ ）はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）	
生 産 量	137.0	122.0	127.0（121.5）	-	4.1	
消 費 量	78.0	79.5	80.5（82.2）	-	1.3	
うち飼料用	61.5	63.0	64.0（56.5）	-	1.6	
輸 出 量	54.3	50.0	49.0（40.9）	-	▲ 2.0	
輸 入 量	1.3	1.3	1.5（2.0）	-	15.4	
期末在庫量	10.0	3.8	2.8（5.6）	-	▲ 26.0	
期末在庫率	7.6%	3.0%	2.2%（4.5%）	-	▲ 0.8	

（参考）

収穫面積（百万ha）	22.40	21.50	22.30（20.60）	-	3.7
単収（t/ha）	6.12	5.67	5.70（5.90）	-	0.5

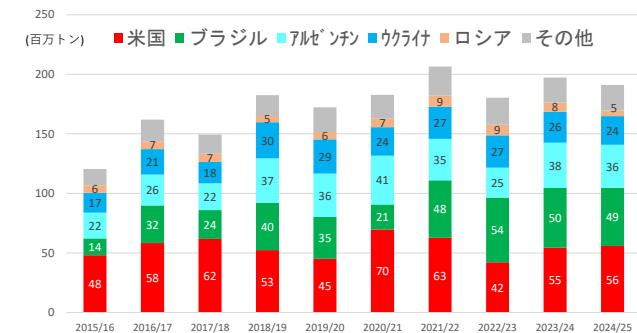
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(10 May 2024)

IGC「Grain Market Report」(18 April 2024)

図 世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移

（ブラジルは米国に次ぐ世界第 2 位の輸出国）



資料：USDA「PS&D」（2024.5.10）をもとに農林水産省にて作成。

＜ アルゼンチン ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から減少する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2024/25 年度の生産量は、大豆の収益性が高まることで農家がとうもろこしの作付面積を減少させる見込みから、史上最高の前年度より 3.8%減となるものの、過去 5 年平均より 1.8%増の 51.0 百万トンとなる見込み。

USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、遅植えとうもろこしの単収が病害虫のヨコバイによる被害を受け低下する見込みを受けて、前月予測から 2.0 百万トン下方修正されたものの、早植えとうもろこしの単収は良好であり、干ばつにより減産した 2022/23 年度より 47%増の 53.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府によれば、5 月 9 日時点でとうもろこしの収穫進捗率は 29%と、前年度同期（32%）より遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、前年度並みの 14.8 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、史上最高の生産量となった前年度からの減産を受けて、前年度より 5.3%減の 36.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023/24 年度のうち、2024 年 1～3 月の輸出量は 7.7 万トンで、2022/23 年産の減産から回復したことを受け、前年度同期（4.7 万トン）比で 64%増となった。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。

前年 12 月 10 日、新大統領に右派のミレイ氏が就任した。同 12 日、カプート経済相は通貨ペソの公式レートを引下げ、1 ドル＝800 ペソとした。

また、2021 年 12 月以降、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、小麦及びとうもろこしに輸出上限数量を設定していたものの、2024 年 5 月、市場に対する規制改革の一環として、小麦及びとうもろこしの輸出上限数量の撤廃を決定した。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (25年3月～26年2月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	36.0	53.0	51.0 (60.0)	-	▲ 3.8
消 費 量	14.2	14.8	14.8 (21.3)	-	-
うち飼料用	10.0	10.4	10.3 (16.0)	-	▲ 1.0
輸 出 量	25.2	38.0	36.0 (37.5)	-	▲ 5.3
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 50.0
期末在庫量	1.3	1.5	1.7 (3.1)	-	13.0
期末在庫率	3.3%	2.9%	3.4% (5.2%)	-	0.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.75	7.00	6.40 (8.10)	-	▲ 8.6
単収(t/ha)	5.33	7.57	7.97 (7.28)	-	5.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC 「Grain Market Report」(18 April 2024)

写真：北部サンタフェ州の遅植えとうもろこしの圃場風景 (2024 年 4 月 30 日撮影)



本圃場のとうもろこしは 2023 年 12 月末に作付けされ、現在、成熟期にある。本圃場では、ヨコバイによる被害は確認されていない。
収穫は 7 月に予定されており、予想単収は 7～8 トン/ヘクタール。

< 中国 > 2024/25 年度の生産量は、前年度から増加する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、作付面積の増加見込みを受けて、前年度より 1.1%増の 292.0 百万トンとなり、史上最高となる見込み。

中国国家気象センター「中国気象農業頻道」によれば、5 月上旬現在、四川省では七葉期を迎えており、主産地の黒竜江省では作付期を迎えている。

USDA によれば、5 月上旬、東北部において降雨があり、例年より温暖な気候を受けて作付けが進展するとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、飼料用需要が増大し、前年度より 2.0%増の 313.0 百万トンと史上最高の見込み。背景には国内の堅調な食肉需要があり、中国国家统计局（2024.1.17）によれば、2023 年の食肉生産量は 9,641 万トンと、前年比で 4.5%増。ただし、業界情報によれば、直近では中国の経済成長が鈍化し、豚肉の価格が低迷する中、中国政府は 3 月から国内の養豚飼育数の生産目標を減らす供給過剰対策を開始しており、飼料用需要減少につながるとの見方もある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、ブラジル産及びウクライナ産への堅調な需要が続くことから、前年度並みの 23.0 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2024 年 1 ～ 3 月の輸入量は、前年度同期より 5.1%増の 790.1 万トン。内訳は、ブラジル（528.4 万トン）、ウクライナ（153.5 万トン）、米国（87.7 万トン）の順。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2024 年 3 月号」によると、3 月の国内価格は、工業用の需要が下支えしており、2,500 元/トンと前月（2,480 元/トン）から小幅に上昇した。また、3 月の輸入価格は、2,120 元/トンと前月（2,160 元/トン）から下落し、前年同月（2,660 元/トン）より低水準で推移している。3 月の内外価格差は 2 月より拡大し、2022 年 12 月以降、国内価格が輸入価格より高い状況が続いている。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、増産により前年度より 0.9%増の 212.8 百万トンの見込み。

とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 （見込み）	2024/25（24年10月～25年9月）		
			予測値、（ ）はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）
生 産 量	277.2	288.8	292.0 (293.0)	-	1.1
消 費 量	299.0	307.0	313.0 (315.5)	-	2.0
うち飼料用	218.0	225.0	231.0 (213.0)	-	2.7
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-
輸 入 量	18.7	23.0	23.0 (22.0)	-	-
期末在庫量	206.0	210.9	212.8 (179.2)	-	0.9
期末在庫率	68.9%	68.7%	68.0% (56.8%)	-	▲ 0.7

（参考）

収穫面積（百万ha）	43.07	44.22	44.70 (44.20)	-	1.1
単収（t/ha）	6.44	6.53	6.53 (6.63)	-	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(10 May 2024)

IGC「Grain Market Report」(18 April 2024)

表 中国のとうもろこし輸入量と輸入元国

（輸入量：万トン、シェア：%）

2024年1～3月			2023年1月～2023年12月			2022年1月～2022年12月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	528.4	66.9	ブラジル	1,280.6	47.2	米国	1,486.5	72.1
ウクライナ	153.5	19.4	米国	714.4	26.3	ウクライナ	526.4	25.5
米国	87.7	11.1	ウクライナ	551.8	20.3	ミャンマー	19.4	0.9
ロシア	5.8	0.7	ブルガリア	73.9	2.7	ブルガリア	14.7	0.7
南アフリカ	5.6	0.7	ミャンマー	38.1	1.4	ロシア	9.5	0.5
ブルガリア	4.6	0.6	ロシア	29.4	1.1	ラオス	5.1	0.2
その他	4.5	0.6	その他	24.5	0.9	その他	0.2	0.0
計	790.1	100	計	2,712.7	100	計	2,061.8	100

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成。

＜ ウクライナ ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度より 12.9%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、油糧種子への作付のシフトを受けて収穫面積が減少（対前年度比 5.0%減）し、天候に恵まれ史上第 2 位となった前年度から単収も減少（対前年度比 8.3%減）する見込みを受け、前年度より 12.9%減、侵攻前の史上最高の豊作となった 2021/22 年度から 35.9%減の 27.0 百万トンとなる見通し。

ウクライナ農業政策食料省によれば、5 月 2 日現在、作付進捗率は 50%と、前年度同期（26%）より進んでいる。温暖な気候で降雨過多もないため、作付は順調に進展しているとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、減産による供給減を受けて前年度より 9.2%減の 4.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、供給量（前年度の期末在庫量と本年度の実産量の合計）の減少、主要輸出先である EU での増産による輸入需要の減少の影響を受け、前年度より 7.7%減、侵攻前の 2021/22 年度からも 11.1%減の 24.0 百万トンの見込み。オデーサ港から陸路を経由せず直接臨時回廊を経由するルートによる輸出も増加しつつあり、2024/25 年度は、EU 向けの輸出は減少することもあり、輸出先が多様化する見込み。

ウクライナ政府等によれば、臨時回廊による輸出が本格化した 2023 年 10 月～2024 年 4 月の輸出量は 1,953 万トン（海上輸送、陸路等による全ての輸出が含まれる）と、黒海穀物イニシアティブの履行停止直後の 2023 年 7～9 月と比較し、月平均で 221.4%増となるも、ロシアによるウクライナ侵攻前の 2019 年 10 月～2020 年 4 月と比較し 19.2%減。輸出先国は、スペイン（465.4 万トン）、中国（367.4 万トン）、エジプト（259.2 万トン）、イタリア（158.4 万トン）の順。2023/24 年度に干ばつとなったスペイン向けが最大となっている。上記の輸送手段としては、港湾が 9 割弱、鉄道・トラック等が 1 割程度となっている。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、減産による供給減から前年度より 49.1%減、侵攻前の 5 か年平均より 40%減の 1.5 百万トンの見込み。2024/25 年度の期末在庫率は、前年度から 4.2 ポイント減の 5.2%となる見込み。

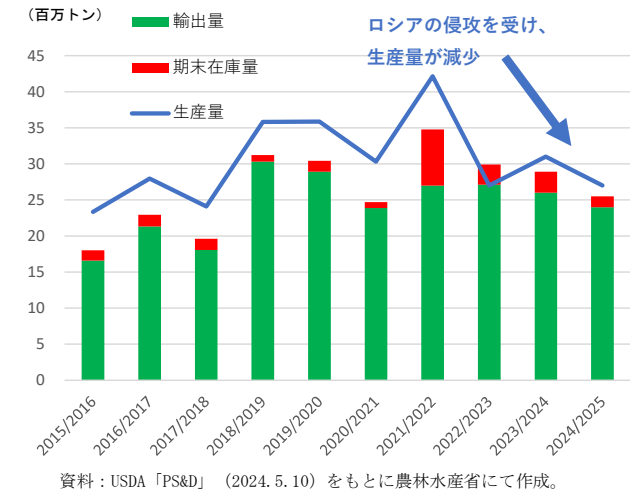
とうもろこしーウクライナ

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	27.0	31.0	27.0 (27.7)	-	▲ 12.9
消 費 量	4.9	4.9	4.5 (6.3)	-	▲ 9.2
うち飼料用	4.0	3.9	3.5 (4.5)	-	▲ 10.3
輸 出 量	27.1	26.0	24.0 (21.5)	-	▲ 7.7
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	2.8	2.9	1.5 (4.4)	-	▲ 49.1
期末在庫率	8.7%	9.4%	5.2% (15.8%)	-	▲ 4.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	4.05	4.00	3.80 (4.06)	-	▲ 5.0
単収(t/ha)	6.67	7.75	7.11 (6.83)	-	▲ 8.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC 「Grain Market Report」(18 April 2024)

図 とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移

(2024/25 年度の輸出量は、2017/18 年度以来の低水準の見通し)



3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2024/25 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 -

・インド、中国、パキスタン等で増加した。前年度を上回り、史上最高の見込み。

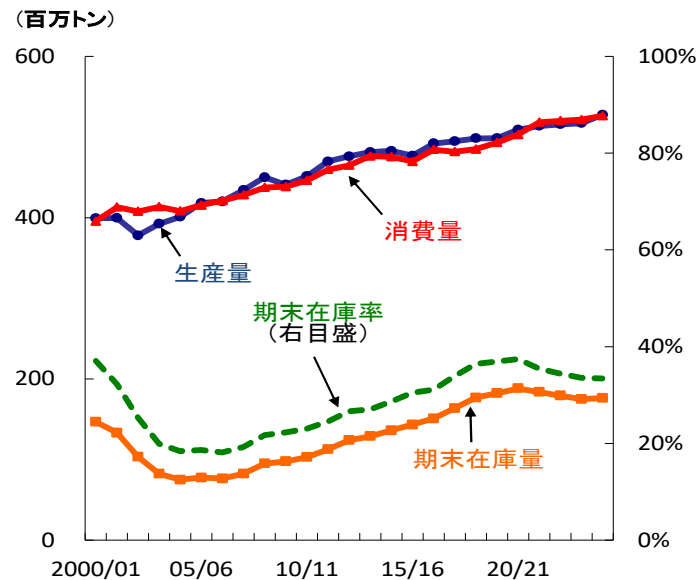
消費量 前年度比 ↑ 前月比 -

・中国等で減少も、インド、インドネシア等で増加した。前年度を上回り、史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 -

・タイ、ベトナム等で減少も、インド等で増加し、前年度を上回る見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 -



資料：USDA「PS&D」(2024. 5. 10)をもとに農林水産省にて作成

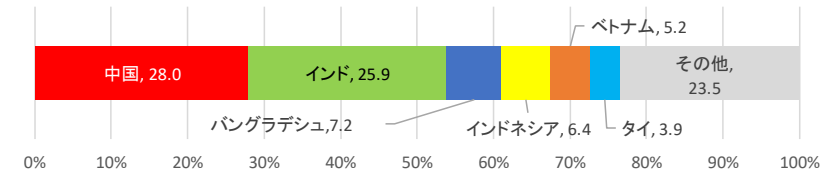
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

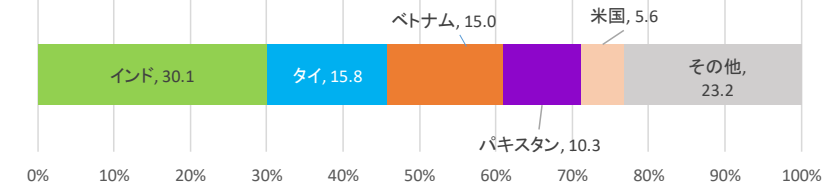
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	515.8	517.3	527.6	-	2.0
消 費 量	520.3	521.6	526.4	-	0.9
輸 出 量	54.6	53.2	53.8	-	1.0
輸 入 量	56.6	50.5	50.0	-	▲ 1.0
期末在庫量	179.2	174.9	176.1	-	0.7
期末在庫率	34.4%	33.5%	33.5%	-	▲ 0.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 May, 2024)

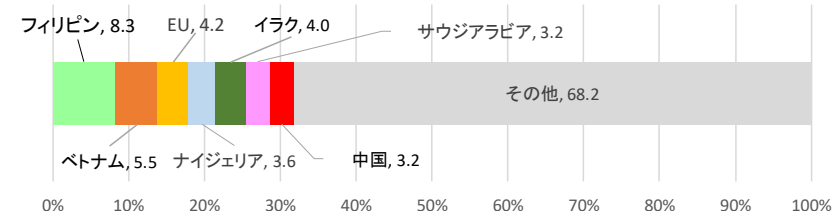
○ 2024/25年度 世界のコメの生産量(527.6百万トン) (単位：%)



○ 2024/25年度 世界のコメの輸出量(53.8百万トン) (単位：%)



○ 2024/25年度 世界のコメの輸入量(50.0百万トン) (単位：%)



（２）国別のコメの需給動向

＜ 米国 ＞ 2024/25 年度の生産量は増加の見込み

【生育・生産動向】USDA によれば、2024/25 年度の実生産量は、前年度比 0.9%増の 7.0 百万トンの見込み。2023 年末から 2024 年初頭の主として南米からの需要増加による国内価格の上昇や、国際価格の高騰継続見込みを受け、作付意向調査（2024.3.28）で長粒種の作付面積増大が短粒種の作付面積減少を上回り、収穫面積が増大（前年度比 0.9%増）することが要因。

同「Weekly Weather」（2024.5）によれば、4 月は平年より高めの気温と多雨がみられた。ただ、中・短粒種の主産地において、4 月末から 5 月初頭に豪雨がいった。

同「Crop Progress」（2024.5.13）によれば、長粒種について、主要生産 6 州の 5 月 12 日時点の作付進捗率は 84%と、作付けに適した気温と十分な土壌水分を受けて前年同期（80%）、過去 5 年平均（72%）より進捗しているとともに、発芽率も 69%と、前年同期（62%）、過去 5 年平均（51%）より進捗している。作柄評価は「やや良から良」が 79%と、前年同期（70%）を上回っている。なお、中・短粒種の主要生産州のカリフォルニア州は 4 月下旬に作付けを開始。作付進捗率は 30%と、前年同期（33%）とほぼ同水準も、4 月末の作付期初期における豪雨等の影響から過去 5 年平均（52%）より遅れている。発芽率は 0%と、前年同期（2%）、過去 5 年平均（9%）より低い。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、増産による供給量増加の見込みから、前年度比 1.8%増の 5.1 百万トンと史上最高の見込み。

2024/25 年度の輸入量は、アジア諸国から香米の輸入増加の継続から、前年度より 3.8 万トン増加し、前年度比 2.2%増の 1.4 百万トンと史上最高の見込み。

2024/25 年度の輸出量は、国内生産量の増加と、それに伴う価格下落予想から、前年度比 6.4%増の 3.2 百万トンの見込み。2023/24 年度(2023 年 8 月 1 日～2024 年 5 月 2 日)の主な輸出先国はメキシコ（76.2 万トン）、ハイチ（33.0 万トン）、日本（30.0 万トン）の順。

USDA「Rice Outlook」（2024.5.14）によれば、5 月 7 日までの週のイラク向け長粒種（2 等、砕米 4 %混入）の価格は 800 ドル／トンと、中南米諸国からの需要増大を受け、本年 4 月から 2008 年 8 月以来の水準（805 ドル／トン）に高止まりしている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。地中海向けカリフォルニア米（1 等、砕米 4 %混入）である中粒種の 5 月 7 日までの週の価格は、生産量の増加見込みを受け 835 ドル／トンと、2023 年 9 月初旬の史上最高値（1,650 ドル／トン）から 815 ドル／トン下落し、本年 2 月以降、2021 年 5 月（983 ドル／トン）以来の安値となっている。

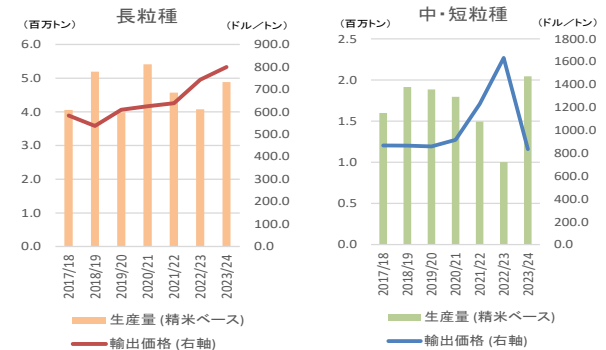
コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年 8 月～25年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	5.1	6.9	7.0	-	0.9
消 費 量	4.6	5.0	5.1	-	1.8
輸 出 量	2.0	3.0	3.2	-	6.4
輸 入 量	1.3	1.4	1.4	-	2.2
期末在庫量	1.0	1.3	1.5	-	11.5
期末在庫率	14.4%	16.3%	17.6%	-	1.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	0.88	1.16	1.17	-	0.9
単収(もみt/ha)	8.28	8.57	8.56	-	▲ 0.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)

図：米国の長粒種と中・短粒種の生産量・輸出価格の推移



資料：USDA「Rice Outlook」（2024.5.14）より。価格は年度内の平均価格。なお、2024/25 年度は 2024 年 5 月の価格。

< インド > 2024/25 年度の生産量は史上最高の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2024/25 年度の実産量は、138.0 百万トンと、前年度比で 3.0%増加、過去 5 年平均比で 7.4%増加し、史上最高の見込み。昨年と異なり、2024 年の雨期が平年通り 5 月から始まるとの予想から、収穫面積は 48.50 百万ヘクタール(前年度比 1.0%増)、単収は 4.27 もみトン／ヘクタール(前年度比 1.9%増)となることが要因。

農産物市場情報システム(2024.5)によると、5 月 2 日現在、播種期及び生育期に水不足に見舞われた南部の州を除き、ラビ米の収穫が概ね良好に進捗している。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2024/25 年度の消費量は、インフレ懸念を受けて政府が備蓄米を市場に放出すると予想されていることもあり、前年度比 3.0%増の 120.0 百万トンの見込み。なお、政府は市場からコメ等を調達の上、低所得世帯(8.80 億人以上)を対象とし、無償又は低価格で配給している。2023/24 年度の調達量は 52.5 百万トンと、インド全体の消費量の半分に相当し、市場のコメ流通量が限られることから、政府による配給向けの調達が国内価格高止まりの一因とみられる。

2024/25 年度の輸出量は、供給量(生産量の増大と前年度の期末在庫の合計)の増加を受け、前年度比 12.5%増の 18.0 百万トンの見込み。依然として世界第 1 位の輸出シェアを維持しており、世界全体のコメ輸出総量の約 30%を占める。2023 年 10 月から 2024 年 2 月までの主な輸出先国は、サウジアラビア(54.8 万トン)、イラン(33.6 万トン)、ベナン(32.9 万トン)、イラク(31.4 万トン)の順。サウジアラビア等中東諸国向けはバスマティ米の輸出が主流となっている。

なお、インドは、非バスマティ米を中心に、2022 年 9 月 9 日以降、様々な輸出規制を発動・強化している。本年 2 月 21 日には、インド財務省が、本年 3 月 31 日までの予定だったパーボイルド米の 20%の輸出関税を無期限に延長した。詳細は右表を参照のこと。

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2024.5.10)によれば、インド産米(碎米 5%混入)の価格は、輸出規制強化後のデータが提示されていない。なお、規制前の 2022 年 7 月時点の輸出価格は 485 ドル/トンと、アジア主要輸出国の中で最低水準の価格となっていた(P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照)。

2024/25 年度の期末在庫量は、前年度並みの 36.5 百万トンの見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年 9 月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	135.8	134.0	138.0 (133.0)	-	3.0	
消 費 量	114.5	116.5	120.0 (114.0)	-	3.0	
輸 出 量	20.3	16.0	18.0 (15.2)	-	12.5	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	35.0	36.5	36.5 (39.9)	-	-	
期末在庫率	26.0%	27.5%	26.4% (30.9%)	-	▲ 1.1	

(参考)

収穫面積(百万ha)	47.83	48.00	48.50 (47.83)	-	1.0	
単収(もみt/ha)	4.26	4.19	4.27 (2.84)	-	1.9	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC「Grain Market Report」(18 April 2024)(単収は精米t/ha)

表:インドのコメ輸出規制(2022 年 9 月 9 日～)

対象品目	措置内容	発動日
全ての種類のコメの粳 (HS 1006 10)	輸出税(20%)	2022.9.9～
全ての種類のコメの玄米 (HS 1006 20)	輸出税(20%)	2022.9.9～
バスマティ米・精米 (HS1006 30 20)	関税:12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t)	(法定税率)
	最低輸出価格導入 (1,200ドル/トン→950ドル/トンに引き下げ (2023.10.26～))	2023.8.27～
パーボイルド米・精米 (HS1006 30 10)	輸出税(20%)	2023.8.25～
バスマティ米・パーボ イルド米以外の精米 (HS1006 30 90)	輸出禁止	2023.7.20～ 2024.12.31
碎米 (HS1006 40 00)	輸出禁止	2022.9.9～

※食料安全保障上の理由でインド政府が認める場合は、輸出を許可。
※有機米は本措置の対象外。
資料:インド政府の公示等をもとに農林水産省にて作成。

＜ 中国 ＞ 東北部は4月末で作付終了、東部・南部の早稲の生育は順調

【生育・生産動向】USDAによれば、2024/25年度の生産量は、収穫面積の増加（前年度比 0.2%増）及び史上最高の単収（前年度比 0.7%増）が見込まれることから、前年度比 1.0%増の 146.0 百万トンの見込み。収穫面積の増大は、小麦やとうもろこしに比べて収益が見込まれることや、政府の最低支持価格の上昇、及び二期作の推進が要因とみられる。

USDA「Weekly Weather」（2024.5）及び中国国家気象センター「中国気象農業頻道」（2024.5）によると、4月は東北地方の大部分で好天と降雨に恵まれ、土壌水分量は十分となっている。一期作稲の播種は基本的に完了し、苗の生育は良好。5月上旬現在、長江中下流域と南部の早稲は、降雨に恵まれ、栄養生長期にある。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2024/25年度の消費量は、2023年9月以降のとうもろこし価格低下による飼料用とうもろこし需要増大に伴い、飼料用米の代替需要が減少となっているほか、高齢化の進展や若年層の食生活の西洋化等に伴う食用需要の減少から、前年度比 2.2%減の 145.0 百万トンの見込み。

2024/25年度の輸入量は、特に飼料用の国内消費量減少や生産量の微増から、前年度比 6.3%減の 1.5 百万トンの見込み。中国はこれまで、もち米や香米に加え、特にとうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、代替としてインド等から砕米を輸入してきたが、2022年9月以降、インドの輸出禁止等により輸入量は規制前の年度（2021/22年度、6.0 百万トン）と比較して 71.7%減少している（2022/23年度）。なお、中国海関統計によれば、2024年1～3月の輸入量は 30.2 万トン（前年同期比 69.7%減）となった。輸入国別では、1位がタイ（37.7%）、2位はミャンマー（34.6%）、3位がベトナム（15.8%）の順。

また、2024/25年度の輸出量は、とうもろこし価格低下を受けた古米等への飼料用代替需要減少を受けた軟調な需要に基づく輸出ペースが続くと予想されることから、前年度比 6.3%減の 1.5 百万トンの見込み。

期末在庫量は、生産量の増加予測を受け、前年度比 1.0%増の 104.0 百万トンの見込み。なお、インドの期末在庫量（36.5 百万トン）と合計すると世界の期末在庫量の約 80%を占める。

コメー中国

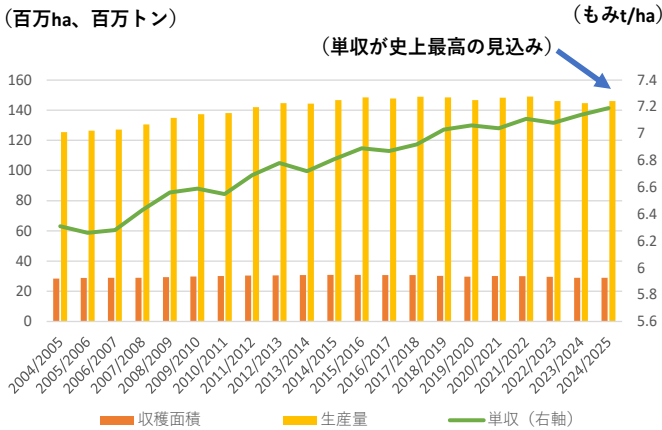
北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年7月～25年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	146.0	144.6	146.0 (145.0)	-	1.0
消 費 量	155.0	148.2	145.0 (146.7)	-	▲ 2.2
輸 出 量	1.7	1.6	1.5 (2.2)	-	▲ 6.3
輸 入 量	4.4	1.6	1.5 (3.0)	-	▲ 6.3
期末在庫量	106.6	103.0	104.0 (100.5)	-	1.0
期末在庫率	68.0%	68.7%	71.0% (67.5%)	-	2.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	29.45	28.95	29.00 (29.45)	-	0.2
単収(もみt/ha)	7.08	7.14	7.19 (4.96)	-	0.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC「Grain Market Report」(18 April 2024)（単収は精米t/ha）

図： 中国の生産量、収穫面積、単収の推移
(2004/05～2024/25年度)



資料：USDA「PS&D」(2024.5.10)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 乾期米の収穫は完了、一部地域で雨期米の作付けを開始

【生育・生産動向】USDAによれば、2024/25年度の生産量は、雨期の開始が遅れ降雨量が少なかった2023年に比べ、2024年は平年通りの雨期（例年5月～10月）となり、収穫面積の回復（前年度比0.5%増）が見込まれることから、前年度比0.5%増の20.1百万トンの見込み。

USDA及び現地情報によると、4月は例年、雨期の到来に向けて降雨量が増え始めるが、エルニーニョ現象による天候不順の影響で例年に比べて全国的に降雨量が少なく、米の主要産地である北部、東北部及び中部の降雨量も例年に比べて60～90%少なかった。気温も全国平均では例年比で2.6度高く、1950年代からの観測史上で最高気温を記録した地点も多かった。乾期米が収穫の最盛期を迎える中、灌漑用水不足に加え、高温障害が収量に与える影響への懸念もあり、前年度比で乾期米の作付面積、収穫量が減少する見込み。なお、5月上旬にまとまった降雨があり、高温の影響が緩和され、雨期作に向け土壌水分が補充された。

アセアン食料安全保障情報システム(2024.5)及び現地情報によると、乾期米の収穫はほぼ完了。エルニーニョ現象による少雨の影響で灌漑用水が不足し、作付面積が減少したことや、干ばつによる影響から、生産量は前年度比で10%程度減少の見込み。一方、雨期米について、一部地域で作付けが始まっている。価格高騰による増収期待から多くの農家が作付面積を拡大させており、作付面積は増加見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2024/25年度の輸出量は、政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していたインドネシアからの需要が減少する見込みから、前年度比10.7%減の7.5百万トンの見込み。

2023/24年度の輸出量は、降雨不足等による減産見込みから、前年度比3.9%減の8.4百万トンの見込み。

タイ関税局によれば、2024年1～3月の輸出量は、前年同期比19.4%増の246.5万トンとなった。このうち、政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシア向けの輸出量は、前年同期の27.0万トンから倍増して62.7万トンと、最大の輸出先国となった。また、米国は21.9万トン（前年同期17.8万トン）、エルニーニョ現象による降雨不足で減産が見込まれるフィリピンは20.4万トン（同2.4万トン）、検疫問題で7年間輸入を停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したイラクは17.5万トン（同33.8万トン）をそれぞれ輸入した。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2024.5.10）及び「Rice Outlook」（2024.5.14）によれば、5月7日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、東南アジア諸国からの需要継続見込みから、前月より23ドル／トン上昇し、613ドル／トンとなった（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメータイ

夏の雨季作と冬の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	(単位: 百万精米トン)			
			2024/25 (25年1月～25年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	20.9	20.0	20.1 (20.5)	-	0.5	
消 費 量	12.6	12.6	12.6 (12.7)	-	-	
輸 出 量	8.7	8.4	7.5 (8.3)	-	▲ 10.7	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
期末在庫量	3.8	2.9	3.0 (2.8)	-	3.5	
期末在庫率	17.6%	13.6%	14.7% (13.5%)	-	1.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	11.07	10.65	10.70 (11.00)	-	0.5	
単収(もみt/ha)	2.86	2.85	2.85 (1.89)	-	-	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC「Grain Market Report」(18 April 2024) (単収は精米t/ha)

表：タイの国別輸出量

国名	(単位: 万トン)		
	2023年 1-3月	2024年 1-3月	増減量
1 インドネシア	27.0	62.7	35.7
2 米国	17.8	21.9	4.1
3 フィリピン	2.4	20.4	18.0
4 イラク	33.8	17.5	-16.4
5 コートジボワール	1.6	12.1	10.5
6 モザンビーク	5.0	12.1	7.2
7 南アフリカ	17.0	9.4	-7.6
8 中国	11.0	7.9	-3.1
9 マレーシア	2.0	7.6	5.6
10 セネガル	12.1	6.7	-5.4
計	206.4	246.5	40.1 (前年比19.4%増)

資料：タイ関税局（2024.5）

＜ ベトナム ＞ 南部メコンデルタ地域の冬春作（乾季米）は海水侵入で単収減少

【生育・生産動向】USDA によれば、2024/25 年度の生産量は、収穫面積の微増が単収減少の影響を相殺することから、前年度並みの 27.0 百万トンの見込み。なお、南部沿岸地域における海水の浸潤やメコン川の水流量減少、肥料価格の高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等から、収穫面積が史上最高の 2014/15 年度（782.3 万ヘクタール）を境に緩やかな低下傾向にある。

アセアン食料安全保障情報システム（2024.5）によると、①北部は、冬春作（乾季米）が出穂期から登熟期にある。良好な天候と豊富な灌漑用水から、収量は増加見込み。②南部では、冬春作（乾季米）が収穫期にある。1.89 百万ヘクタールの作付面積のうち、現時点の収穫面積は 1.69 百万ヘクタール（89.4%）。現時点での単収は、6.94 もみトン／ヘクタールで、メコンデルタ地域の海水の浸潤から、2023 年同時期より 0.05 トン／ヘクタール減少の見込み。③メコンデルタ地域では、夏秋作（雨季米）の作付けが最盛期を迎えており、現在の作付面積は 0.64 百万ヘクタールと、国際価格高騰等を受けた作付意欲向上により、前年度比で 124.4%増加。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、生産量は昨年並みも、飼料用需要等の増加により国内消費量が増加する見込みから、前年度比 6.3%減の 7.5 百万トンの見込み。

USDA 及び現地情報によれば、2023/24 年度の輸出量は、アジア諸国等からの精米輸入需要が落ち着く見込みから、前年度比 2.8%減の 8.0 百万トンの見込み。なお、インドネシアでは、2023 年 10－12 月にかけて、エルニーニョ現象による降雨不足等の影響を受けたコメの減産見込み等から、輸入量が増加した。2023 年（1－12 月）は合計 306.3 万トンを入力し、うちベトナム産の輸入は 114.8 万トン（37.5%）。なお、2024 年 1－4 月のコメの収穫量も前年度比で減少する見込みから、インドネシア政府は合計 360 万トンの輸入枠を決定した。

ベトナム関税総局によれば、2024 年 1－4 月の輸出量は 317.0 万トンと、前年同期（289.5 万トン）に比べ 9.5%増加した。主な輸出先国は、フィリピン（149.0 万トン、15.9%増）、インドネシア（54.9 万トン、79.0%増）、マレーシア（20.2 万トン、26.3%増）、中国（16.9 万トン、66.7%減）の順。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」（2024.5.10）及び「Rice Outlook」（2024.5.14）によれば、ベトナム産米（長粒種、5 %碎米混入）の 5 月 7 日までの週の価格は、東南アジア諸国から需要継続見込みから、前月の価格より 10 ドル／トン上昇し、595 ドル／トンとなった。

コメーベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (25年 1 月～25年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	26.9	27.0	27.0 (28.6)	-	-	-
消費量	21.9	22.0	22.1 (22.0)	-	-	0.5
輸 出 量	8.2	8.0	7.5 (8.0)	-	▲ 6.3	
輸 入 量	2.8	2.8	3.0 (1.6)	-	7.3	
期末在庫量	2.4	2.2	2.5 (2.9)	-	16.1	
期末在庫率	8.0%	7.2%	8.5% (9.5%)	-	1.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.10	7.15	7.15 (7.11)	-	-	-
単収(もみt/ha)	6.07	6.05	6.04 (3.90)	-	▲ 0.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC 「Grain Market Report」(18 April 2024) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2024/25 年度

生産量 前年度比 前月比 **—**

・ブラジル、米国、アルゼンチン等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

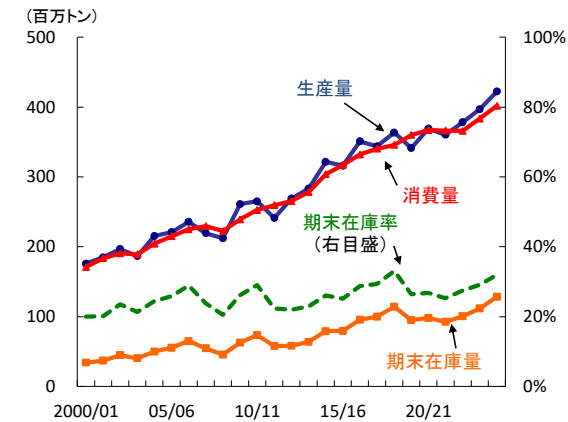
消費量 前年度比 前月比 **—**

・中国、アルゼンチン、米国等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比 **—**

・米国、ブラジル、アルゼンチン等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比 **—**



資料：USDA「PS&D」（2024. 5. 10）をもとに農林水産省で作成

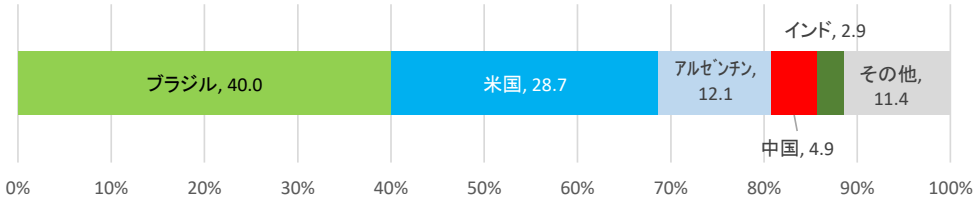
◎ 世界の大豆需給

（単位：百万トン）

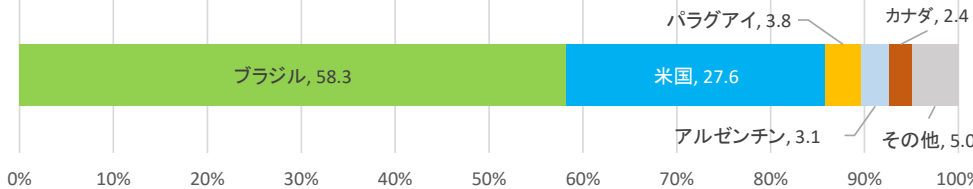
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	378.2	397.0	422.3	—	6.4
消費量	366.0	383.5	401.7	—	4.7
うち搾油用	315.3	330.0	345.9	—	4.8
輸出量	172.1	172.5	180.2	—	4.5
輸入量	167.9	170.3	176.4	—	3.6
期末在庫量	100.5	111.8	128.5	—	15.0
期末在庫率	27.5%	29.1%	32.0%	—	2.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（10 May 2024）

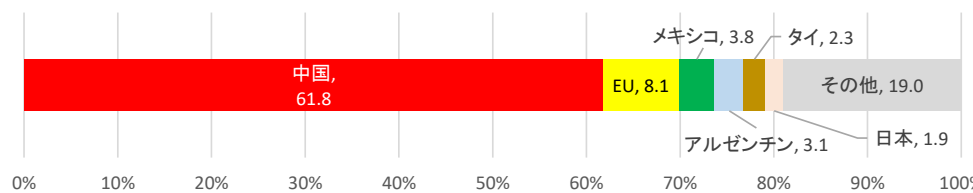
○ 2024/25 年度の世界の大豆の生産量(422.3 百万トン)（単位：％）



○ 2024/25 年度の世界の大豆の輸出量(180.2 百万トン)（単位：％）



○ 2024/25 年度の世界の大豆の輸入量(176.4 百万トン)（単位：％）



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度より 6.9%増

【生育・生産状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、収穫面積及び単収の増加を受け、前年度より 6.9%増の 121.1 百万トンの見通し。現在の価格相場は大豆の作付けに有利であるため、多くの農家がとうもろこしから大豆の作付けに切り替えるとみられている。

USDA「Crop Progress」（2024.5.14）によれば、作付進捗率は 35%と、前年度同期（45%）を下回るものの、過去 5 年平均（34%）と同水準である。発芽率は 16%と、前年度同期（17%）を下回るものの、過去 5 年平均（10%）は上回っている。

「OIL WORLD Weekly」（2024.5.10）によれば、4 月に降雨があり、多くの地域で発芽に好影響を与えた一方、一部地域で降雨による作付作業の遅れが見られた。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、バイオ燃料等需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より 5.0%増の 69.0 百万トンで史上最高の見込み。なお、背景としては、環境志向に伴い、バイオ燃料向けの搾油工場の新設による需要増や、航空燃料（SAF）向け需要増が見込まれていることがある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、世界全体の搾油用需要が増加する見通しから、前年度より 7.3%増の 49.7 百万トンの見込み。

USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」（2024.5.14）によれば、本年 5 月の米国大豆価格は、5 月 6 日現在、ブラジルのリオ・グランデ・ド・スール州における洪水により世界的な減産懸念が生じたことから、前月から 22 ドル/トン上昇し、479 ドル/トン。なお、USDA によれば、2023 年 9 月～2024 年 4 月の輸出量は 4,316 万トンと、ブラジルとの激しい輸出競争を受けて前年度同時期の 4,385 万トンより 2%減。内訳は中国（2,336 万トン）、メキシコ（522 万トン）、日本（294 万トン）の順となっている。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、前年度より 30.8%増の 12.1 百万トンとなる見込み。期末在庫率は 10.2%で、過去 5 年平均（8.0%）を上回り 10%台まで回復したものの、引き続き低水準に留まる見通し。

大豆－米国

（単位：百万トン）

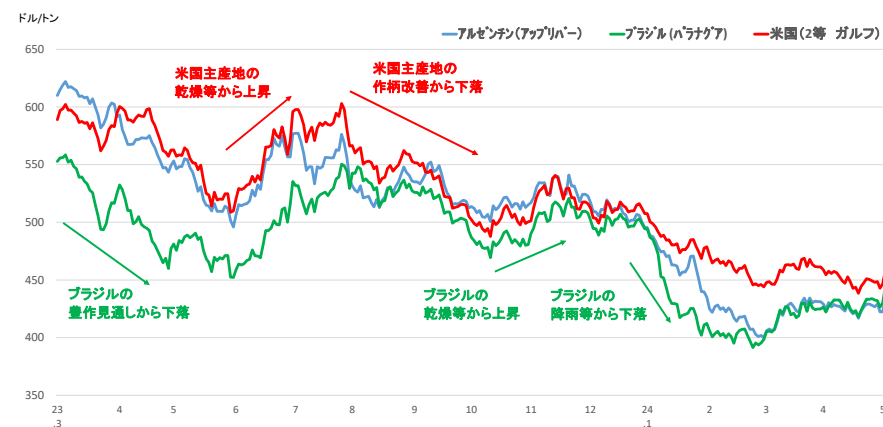
年 度	2022/23	2023/24 （見込み）	2024/25（24 年 9 月～25 年 8 月）		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率（%）
生産量	116.2	113.3	121.1	-	6.9
消費量	63.0	65.7	69.0	-	5.0
うち搾油用	60.2	62.6	66.0	-	5.4
輸出量	54.2	46.3	49.7	-	7.3
輸入量	0.7	0.7	0.4	-	▲ 39.7
期末在庫量	7.2	9.3	12.1	-	30.8
期末在庫率	6.1%	8.3%	10.2%	-	1.9

（参考）

収穫面積（百万 ha）	34.87	33.33	34.64	-	3.9
単収（t/ha）	3.33	3.40	3.50	-	2.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（10 May 2024）

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGC のデータをもとに農林水産省にて作成。

＜ ブラジル ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度より増加

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降作付けが開始される 2024/25 年度の生産量は、作付面積が史上最高となることから、前年度より 9.7%増の 169.0 百万トンと史上最高の見通し。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2024.5.14）によれば、2023/24 年度
の生産量は、とうもろこし等から収益性が高い大豆に作付けがシフトすることで収穫
面積が増加するものの、生育初期の高温乾燥による単収減から前年度より 4.5%減の
147.7 百万トンの見通し。

CONAB によれば、5 月初旬の全国の収穫進捗率は 94%と、収穫終盤を迎えている。
5 月上旬、南部のリオ・グランデ・ド・スール州において多雨により洪水が発生した。
リオ・グランデ・ド・スール州は国全体の大豆生産量の 15%程度を占めている。USDA
によれば、リオ・グランデ・ド・スール州の収穫進捗率は 5 月 9 日現在で 78%と終盤
を迎えているものの、保管施設等での被害も確認されており、損失が拡大する可能性も
ある。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、引き続き堅調な搾油用需要か
ら前年度より 0.4%増の 58.1 百万トンとほぼ横ばいの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸出量は、増産による供給増を
受けて価格競争力も高まる見込みから、前年度より 2.9%増の 105.0 百万トンと史上最
高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024 年 1 ～ 4 月の輸出量は 36.8 百万トンで、前年度同
期（33.4 百万トン）に比べ 10.2%増となっており、中国向け輸出が昨年に引き続き堅
調に推移していることが要因。輸出先は、中国（25.8 百万トン）、スペイン（1.3 百万
トン）、タイ（1.2 百万トン）の順。大豆は輸出最盛期に入っている。

2023 年 6 月、北部のマラニョン州イタキ港と南部のサンパウロ州サントス港を結ぶ南北鉄道が開通した。さらに、マット・グロッソ州から南部サント
ス港まで輸送する鉄道の拡張工事も行われており、これらのアクセス改善が輸出のボトルネックを回避する一助になることが期待されている。

大豆ーブラジル

(単位：百万トン)						
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25（24年10月～25年9月）			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	162.0	154.0	169.0	(159.8)	-	9.7
消 費 量	57.2	57.9	58.1	(57.8)	-	0.4
うち搾油用	53.4	54.0	54.0	(54.8)	-	-
輸 出 量	95.5	102.0	105.0	(101.7)	-	2.9
輸 入 量	0.2	0.5	0.2	(0.5)	-	▲ 66.7
期末在庫量	36.8	31.4	37.5	(2.0)	-	19.3
期末在庫率	24.1%	19.7%	23.0%	(1.3%)	-	3.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	44.60	45.90	47.30	(41.49)	-	3.1
単収(t/ha)	3.63	3.36	3.57	(3.85)	-	6.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
IGC「Grain Market Report」(18 April 2024)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2023/24年度の大豆の作付けは、2023年9月以降、順次開始。
2024年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2023/24年度	2023年				2024年								
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし (リオ・グランデ・ド・スール 州等)	作付 4.0(百万ha)				収穫 23.5(百万t) → 収穫夏冬作計 111.6百万t								
冬とうもろこし (マット・グロッソ州、 パラナ州等)	作付面積夏冬作計 20.6百万ha				作付 16.6(百万ha) → 収穫88.1(百万t)								
大豆 (マット・グロッソ州、 パラナ州等)	作付 45.7(百万ha)				大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし作付け 収穫 147.7(百万t)								

資料：CONAB穀物レポート（2024. 5. 14）

＜ アルゼンチン ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度より増加

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 11 月以降作付けが開始される 2024/25 年度の生産量は、大豆の収益性が高まることで農家がとうもろこしから大豆へ作付をシフトさせる見通しから、前年度から 2.0%増の 51.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府によれば、5 月 11 日現在、大豆の収穫進捗率は 48%と、前年度同期 (59%) より遅れている。4 月上旬の北部での降雨過多の影響で収穫に遅れが出ていることも影響しているとみられる。

ブエノスアイレス取引所週報 (2024.5.16) によれば、北東部において、降雨過多による収穫遅延が発生している。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、増産に伴い搾油量が増加することから、前年度比 11.3%増の 47.6 百万トンの見込み。アルゼンチンは、丸大豆の搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、世界有数の大豆油及び大豆粕の輸出国である。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より 15.4%減の 5.5 百万トンの見込み。

2024/25 年度の輸出量は、中国向け輸出が増加する見通しから、前年度より 19.6%増の 5.5 百万トンの見込み。

なお、2024 年 1～3 月の輸出量は、前年度の干ばつによる減産からの回復を受けて 6.1 万トンで前年度 (4.1 万トン) より 49%増。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻している。

2023 年 12 月 10 日、新大統領に右派のミレイ氏が就任した。同 12 日、経済相は通貨ペソの公式レートを現行の 1 ドル＝350 ペソから 50%以上切り下げ、1 ドル＝800 ペソにした。また、大豆の輸出税は引き続き最大 33%に設定すると発表した。

大豆－アルゼンチン

(単位：百万トン)						
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	25.0	50.0	51.0	(51.0)	-	2.0
消 費 量	36.6	42.8	47.6	(49.5)	-	11.3
うち搾油用	30.3	35.5	40.0	(42.5)	-	12.7
輸 出 量	4.2	4.6	5.5	(4.9)	-	19.6
輸 入 量	9.1	6.5	5.5	(5.4)	-	▲ 15.4
期末在庫量	17.0	26.2	29.6	(11.6)	-	13.0
期末在庫率	41.7%	55.2%	55.6%	(21.3%)	-	0.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	14.40	16.50	16.90	(15.87)	-	2.4
単収(t/ha)	1.74	3.03	3.02	(3.21)	-	▲ 0.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (10 May 2024)
IGC 「Grain Market Report」 (18 April 2024)

写真：北部サンタフェ州の大豆の圃場風景
(2024 年 4 月 28 日撮影)



本圃場の大豆は、11 月上旬に作付され、収穫作業が行われている。本圃場の大豆子実は小粒であるが、重量は十分にあり、単収は 5.2 トン/ヘクタールが記録された。

＜ 中国 ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度より減少する見通し

【生産・生育状況】USDA によれば、2024/25 年度の実産量は、作付面積が増加（対前年度比 0.3%増）するものの、単収が平年並みに戻り減少（対前年度比 1.0%減）すると見込まれることから、前年度より 0.7%減の 20.7 百万トンとなるも、史上 2 番目の見込み。

なお、例年、5 月、主産地の黒竜江省等では作付期を迎えている。USDA によれば、5 月上旬、東北部において降雨があり、例年より温暖な気候を受けて作付けが進展するとみられる。

2 月 3 日に発表された中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央一号文件には、引き続き大豆の作付け確保や単収の向上等の取組等について記載された。

【需要状況】USDA によれば、2024/25 年度の消費量は、国内の畜産物需要増から大豆粕需要が増加することから、前年度より 4.2%増の 126.8 百万トンと史上最高の見込み。ただし、業界情報によれば、直近では中国の経済成長が鈍化し、豚肉の価格が低迷する中、中国政府は 3 月から国内の養豚飼育数の生産目標を減らす供給過剰対策を開始しており、飼料用需要減少につながるの見方もある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2024/25 年度の輸入量は、大豆粕需要増を受けて、前年度より 3.8%増の 109.0 百万トンと史上最高の見込み。

中国海関統計によれば、2024 年 1 ～ 3 月の輸入量は、前年度同期より 10.8%減の 1,857.7 万トン。内訳は、ブラジル（998.6 万トン）、米国（713.7 万トン）、カナダ（90.3 万トン）の順となっている。ブラジルと米国を合わせたシェアが 9 割以上を占めている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2024 年 3 月号」によると、3 月の国内価格は、肉、卵及び牛乳の供給増に伴い大豆製品に対する消費者の需要が低下したことにより、5,360 元/トンと前月（5,620 元/トン）から下落した。

USDA によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、輸入増を受けて、前年度より 7.7%増の 39.2 百万トンと史上最高の見込み。2024/25 年度の期末在庫率は、前年度より 1.0 ポイント増の 30.9%となる見込み。

大豆－中国

(単位：百万トン)					
年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年10月～25年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	20.3	20.8	20.7 (21.5)	-	▲ 0.7
消 費 量	117.5	121.7	126.8 (124.4)	-	4.2
うち搾油用	96.0	99.0	103.0 (102.5)	-	4.0
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-
輸 入 量	104.5	105.0	109.0 (103.0)	-	3.8
期末在庫量	32.3	36.4	39.2 (40.2)	-	7.7
期末在庫率	27.5%	29.9%	30.9% (32.3%)	-	1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.24	10.47	10.50 (8.40)	-	0.3
単収(t/ha)	1.98	1.99	1.97 (1.95)	-	▲ 1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (10 May 2024)
IGC 「Grain Market Report」 (18 April 2024)

表 中国の大豆輸入量と輸入元国

(輸入量：万トン、シェア：%)

2024年 1 ～ 3 月			2023年 1 月～2023年12月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	998.6	53.8	ブラジル	6,993.0	70.7
米国	713.7	38.4	米国	2,374.3	24.0
カナダ	90.3	4.9	アルゼンチン	199.2	2.0
ロシア	22.4	1.2	カナダ	146.6	1.5
アルゼンチン	21.2	1.1	ロシア	129.3	1.3
ウルグアイ	3.2	0.2	南アフリカ	14.7	0.1
その他	8.3	0.4	その他	38.6	0.4
計	1,857.7	100	計	9,895.7	100

資料：中国海関統計をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2024/25 年度の生産量は 6.9 百万トンの見込み (AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省 (AAFC) 「Outlook for Principal Field Crops」 (2024.5.21) によれば、2024/25 年度の実産量は、作付面積が前年より減少することを受け、前年度から 1 %減の 6.9 百万トンの見込み。大豆価格が低下しているものの、大豆粕需要と輸出は堅調であり、生産量は微減に留まるとみられる。土壌水分量は現時点で十分とみられる。作付面積の減少は、前年度に作付面積を増加させたマニトバ州の農家が反動で作付面積を減らしたことが要因とみられる。

なお、カナダの大豆生産は、小麦やなたねと異なり、東部のオンタリオ州が主産地で、生産量の半分以上のシェアがある。オンタリオ州に隣接するマニトバ州及びケベック州でも生産されている。

オンタリオ州では、大豆の作付期を迎えている。AAFC によれば、カナダ東部では、降雨と冷涼な気候を受け、作付け作業に遅れが生じている。

【需要状況】AAFC によれば、2024/25 年度の消費量は、飼料用等の需要の減少により前年度から 1.5%減の 2.4 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2024/25 年度の輸出量は、前年度より 1.0%増の 5.0 百万トンの見込み。主要な輸入相手国である中国において、搾油用需要増に伴い、輸入量が増加することが要因の一つとみられる。

カナダ穀物委員会 (Canadian Grain Commission) によれば、2023/24 年度 (2023 年 8 月～2024 年 7 月) の 2023 年 8 月～2024 年 3 月の輸出量は 322.5 万トンで、前年度同期 (305.6 万トン) を上回っている。国別では、中国 (143.9 万トン) が 40%以上のシェアを占め、次いでアルジェリア (54.9 万トン)、イラン (54.6 万トン)、イタリア (15.0 万トン) の順となっている。

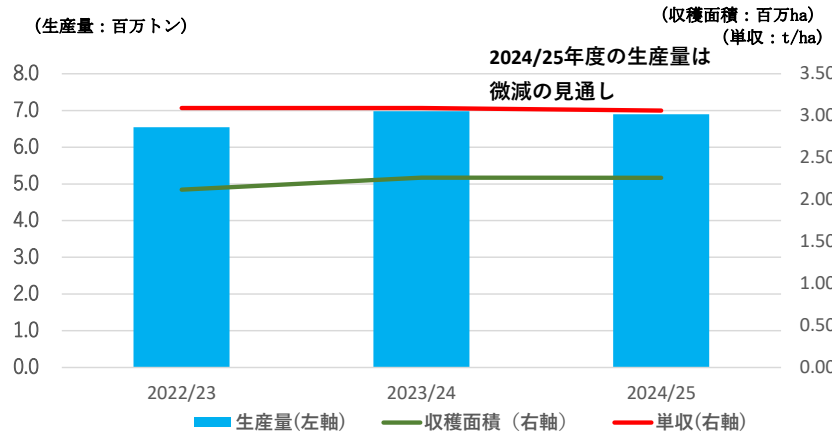
AAFC によれば、2024/25 年度の期末在庫量は、減産により前年度から 10.8%減の 0.4 百万トンの見込み。

大豆－カナダ

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25 (24年8月～25年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.5	7.0	6.7 (6.9)	-	▲ 4.0
消 費 量	2.7	2.8	2.7 (2.4)	-	▲ 3.6
うち搾油用	1.8	1.8	1.7 (1.9)	-	▲ 5.7
輸 出 量	4.2	4.6	4.3 (5.0)	-	▲ 5.5
輸 入 量	0.5	0.4	0.4 (0.5)	-	14.3
期末在庫量	0.4	0.4	0.6 (0.4)	-	37.2
期末在庫率	5.3%	5.5%	8.0% (5.0%)	-	2.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.12	2.26	2.20 (2.26)	-	▲ 2.7
単収(t/ha)	3.09	3.09	3.05 (3.06)	-	▲ 1.3

資料：USDA「PS&D」
「World Agricultural Production」(10 May 2024)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(21 May 2024)

図 カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2024.5.21) を
もとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2024/25年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	24年6月～25年5月	24年9月～25年8月	24年8月～25年7月	24年9月～25年8月
カナダ	24年8月～25年7月			24年8月～25年7月
豪州	24年10月～25年9月		25年3月～25年2月	
EU	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月		
中国	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月
ロシア	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月		24年9月～25年8月
ウクライナ	24年7月～25年6月	24年10月～25年9月		
ブラジル		25年3月～26年2月	25年4月～26年3月	24年10月～25年9月
アルゼンチン	24年12月～25年11月	25年3月～26年2月		24年10月～25年9月
タイ			25年1月～12月	
インド	24年4月～25年3月		24年10月～25年9月	
ベトナム			25年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2024/25年度は、米国の小麦では2024年6月～2025年5月、ブラジルのとうもろこしでは2025年3月～2026年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

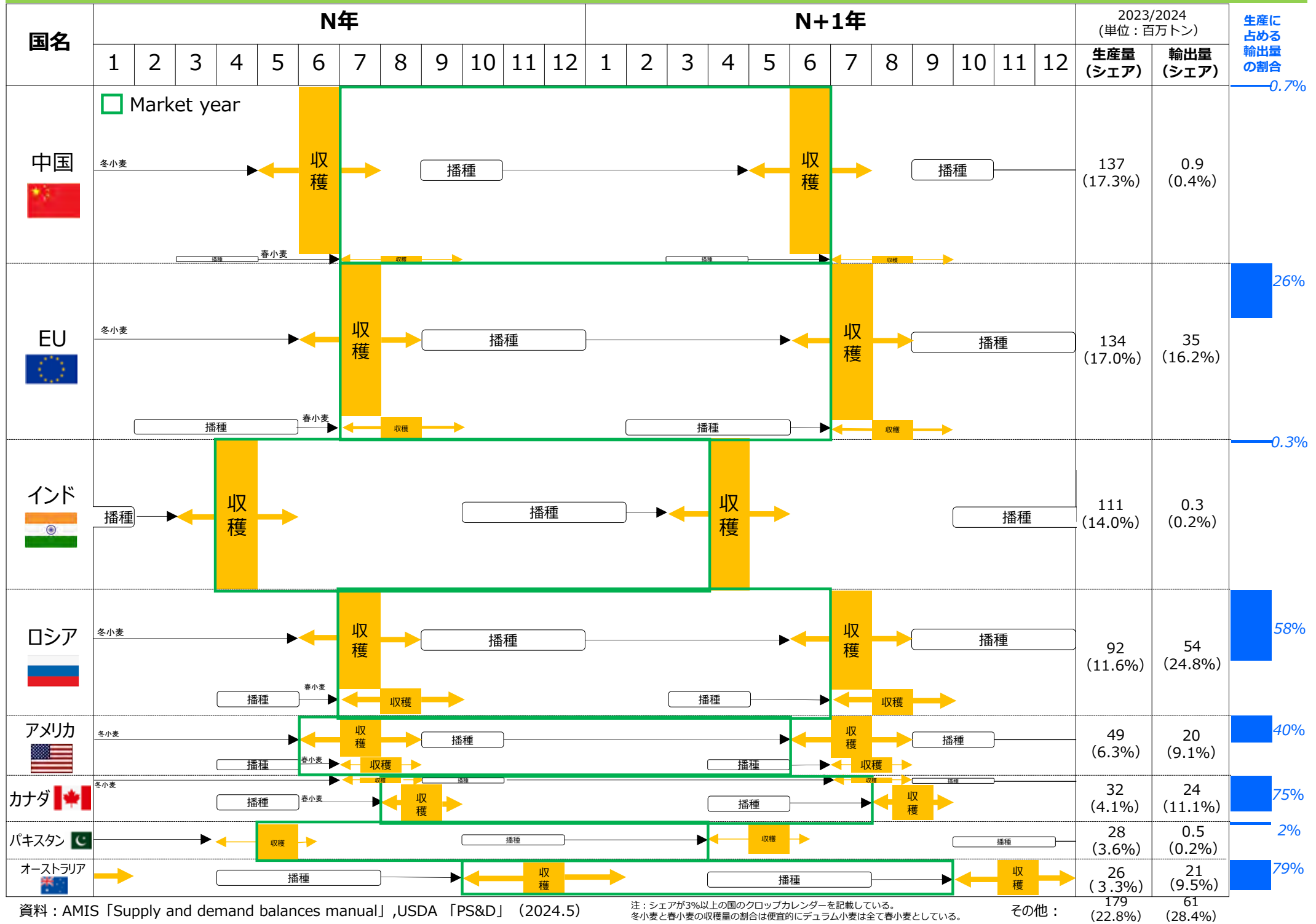
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏：℃＝(° F－32)÷1.8			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

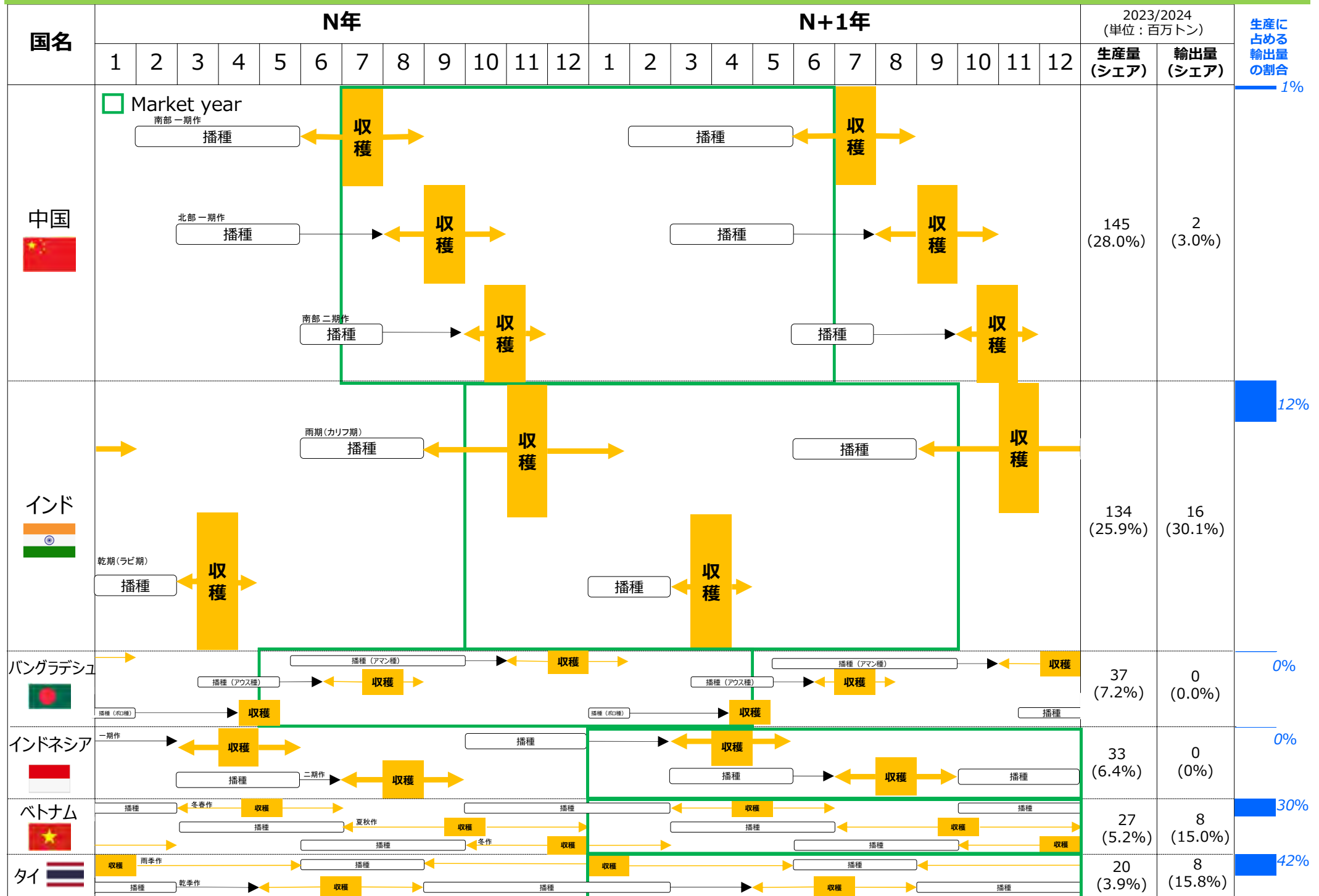
主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料 : AMIS 「Supply and demand balances manual」, USDA 「PS&D」 (2024.5) 注 : シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他 :

122
(23.5%)

19
(36.1%)

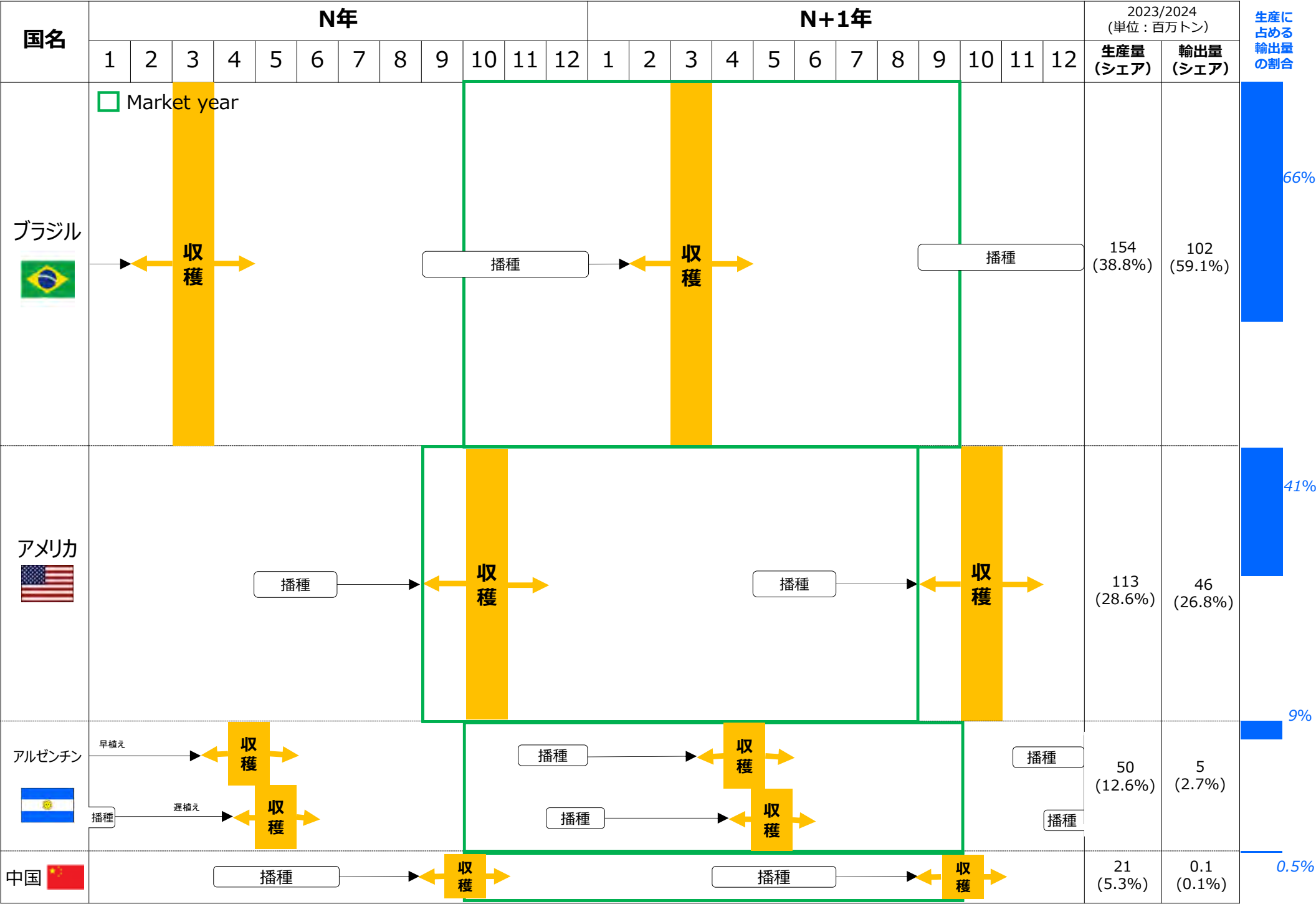
主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2023/2024 (単位：百万トン)		生産に 占める 輸出品 の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出品 (シェア)	
アメリカ 	□ Market year								播種 → 収穫 → 播種 → 収穫												390 (31.7%)	55 (27.7%)	14%				
中国 	播種 → 春作 → 収穫 → 播種 → 夏作 → 収穫								播種 → 収穫 → 播種 → 収穫												289 (23.5%)	0 (0.0%)	0%				
ブラジル 	夏とうもろこし → 播種 → 収穫 → 冬とうもろこし → 播種 → 収穫												播種 → 収穫 → 播種 → 収穫												122 (9.9%)	50 (25.3%)	41%
EU 	播種 → 収穫												播種 → 収穫												61 (5.0%)	4 (2.1%)	7%
アルゼンチン 	播種 → 収穫												播種 → 収穫												53 (4.3%)	38 (19.3%)	72%
インド 	乾期(ラビ期) → 播種 → 収穫 → 雨期(カリフ期) → 播種 → 収穫												播種 → 収穫 → 播種 → 収穫												38 (3.1%)	0.8 (0.4%)	2%

主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」,USDA「PS&D」(2024.5) 注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他：59 (14.8%) 20 (11.3%)

主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2023/2024 (単位：百万トン)		生産に 占める 輸出品 の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出品 (シェア)	
EU 	□ Market year						収穫	播種										収穫	播種				20 (22.6%)	0.6 (3.3%)	3%		
カナダ 	播種						収穫	播種										収穫	播種				19 (21.3%)	7 (39.3%)	35%		
中国 	収穫						播種										収穫	播種				15 (17.4%)	0 (0%)	0%			
インド 	収穫						播種										収穫	播種				13 (14.1%)	0 (0%)	0%			
オーストラリア 	播種						収穫	播種										収穫	播種				6 (6.4%)	5 (27.6%)	81%		
ウクライナ 	収穫						播種	収穫										播種	収穫				4 (5.0%)	3 (20.5%)	78%		
ロシア 	播種						収穫	播種										収穫	播種				4 (4.8%)	0.8 (4.8%)	19%		

第35号特別分析トピック:世界の食料需給の動向

世界の食料需給の動向

令和6年3月
農林水産政策研究所



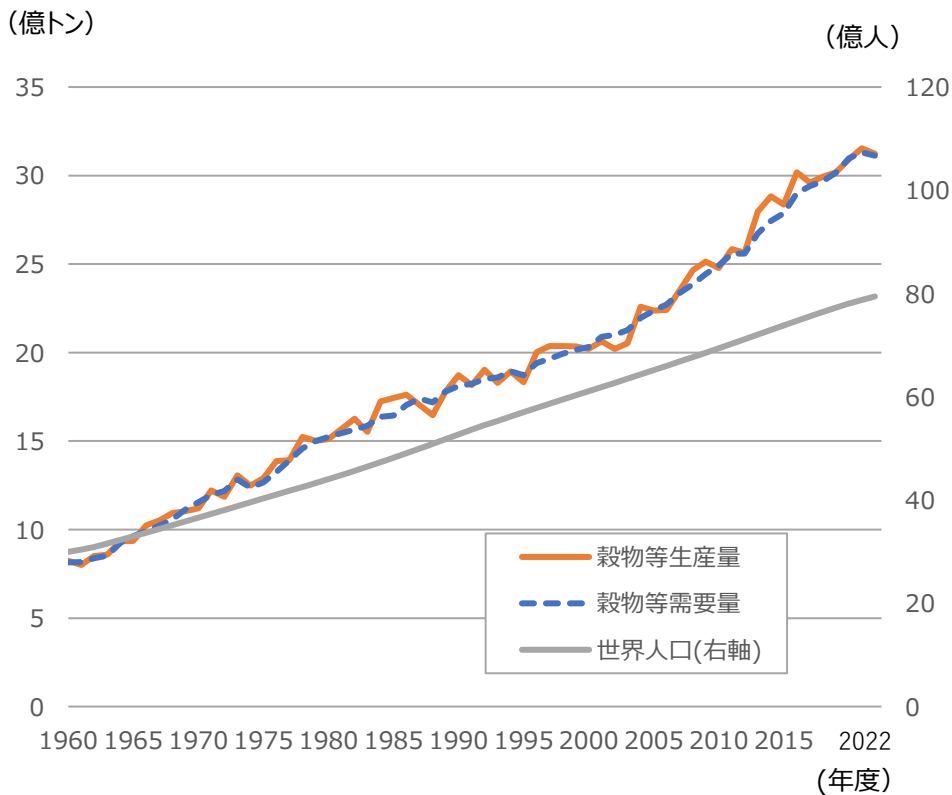
目次

1 . 世界の穀物及び大豆の需給動向	1
2 . とうもろこしの需要動向	2
3 . とうもろこしの生産量変化	3
4 . とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2002年とうもろこし貿易フロー図	4
5 . とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2021年とうもろこし貿易フロー図	5
6 . 大豆の生産量変化	6
7 . 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2002年大豆貿易フロー図	7
8 . 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2021年大豆貿易フロー図	8
9 . 小麦需給と貿易動向	9
10 . 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2002年小麦貿易フロー図	10
11 . 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2021年小麦貿易フロー図	11
12 . 米需給と貿易動向	12
13 . 中国：食糧安保最重視し、「農業強国」建設目指す。単収向上で食糧7億トン生産へ	13
14 . 中国における豚肉等の生産・価格の動向	14
15 . ロシアとウクライナ：供給量は漸増	15
16 . ブラジル：大豆・とうもろこしの生産動向	16
17 . アルゼンチン：気候変動を背景とした異常気象による単収増減の年較差拡大とその影響	17
18 . インドの穀物輸出・植物油輸入動向	18
19 . バイオ燃料の需要動向	19
20 . 消費者物価の高止まりと重なる紛争による海上輸送運賃の急変動	20
21 . 新型コロナウイルス禍・ウクライナ侵攻後の穀物等の価格動向	21
22 . 国際商品価格・穀物及び大豆の価格の推移	22

1 世界の穀物及び大豆の需給動向

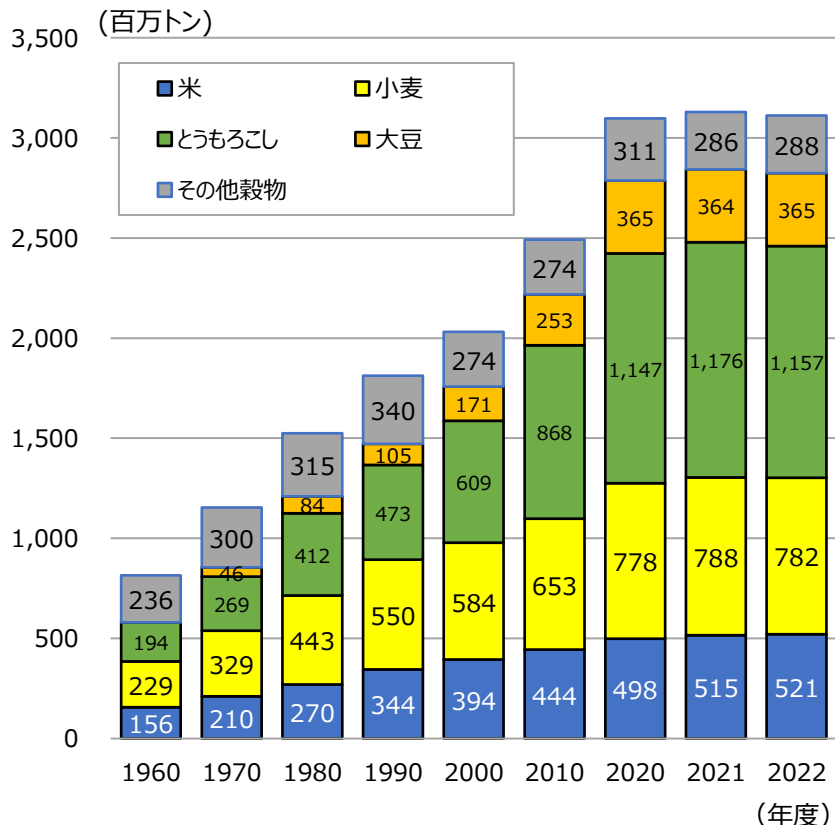
- 世界の穀物及び大豆の需要量は、総人口の伸び率を上回って増加。
 - 需要量は、とうもろこし及び大豆の伸びが大きく増加。穀物の中でとうもろこし需要量が最大。
 - 需要量の増加に対して、生産量も増加。短期的には豊凶等による変動はあるが、コロナ前は生産量が需要量をやや上回り、近年は生産量と需要量がほぼ均衡。
- (参考) 1970年に比べ、2022年の人口は2.2倍、需要量はそれぞれ小麦が2.4倍、米2.5倍、とうもろこし4.3倍、大豆7.9倍

① 世界の穀物及び大豆の需給と世界人口の動向



資料：USDA PS&D Online data,
UN World Population Prospects: The 2022 Revision.

② 穀物及び大豆の需要の品目別内訳

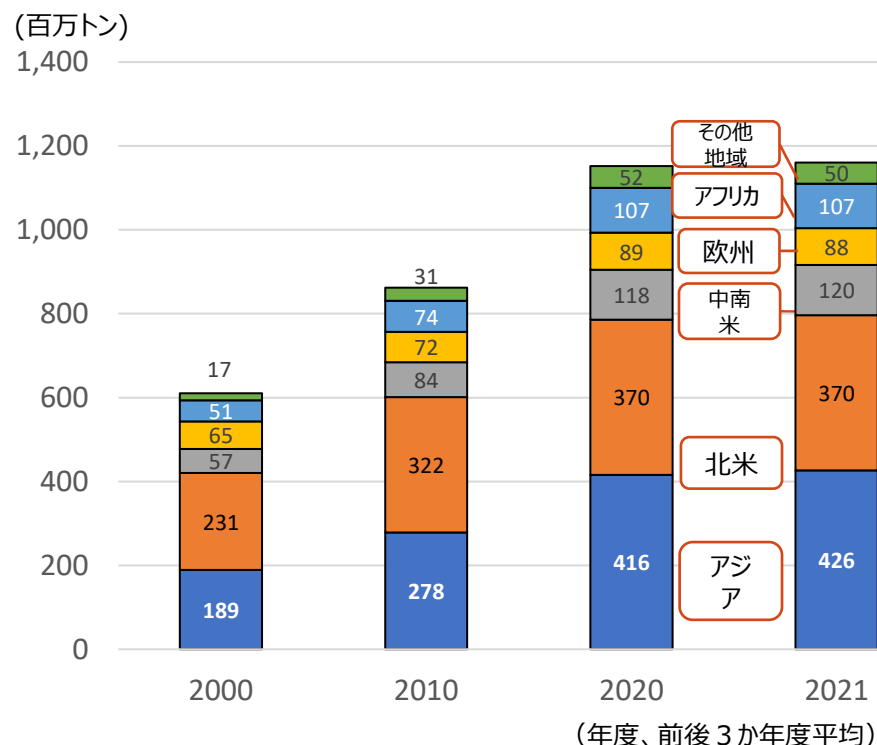


資料：USDA PS&D Online data

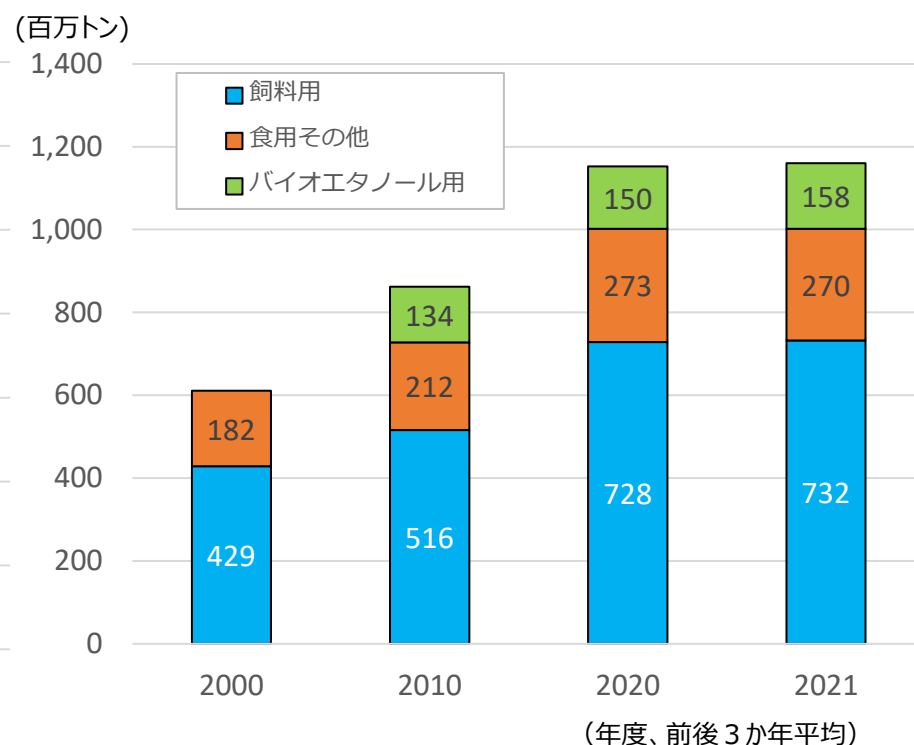
2 とうもろこしの需要動向

- 2021年度(前後3か年度平均)の世界のとうもろこし需要量は、2000年度(同平均)に比べて90%増加。地域別では、アジアの需要量が125%増加し、2021年度に37%のシェアを占める。
- 現在の用途別内訳では、2000年度に比べて飼料用が71%増加し、食用等は48%増加。2000年代後半からバイオエタノール用が新規需要として消費量を「底上げ」している。
- 2010年度(同平均)から2021年度までの用途別の増加率は、飼料用・食用等がそれぞれ42%・27%に対して、新規需要のバイオエタノール用の伸びは18%に留まる。

① 世界のとうもろこし需要動向の地域別内訳



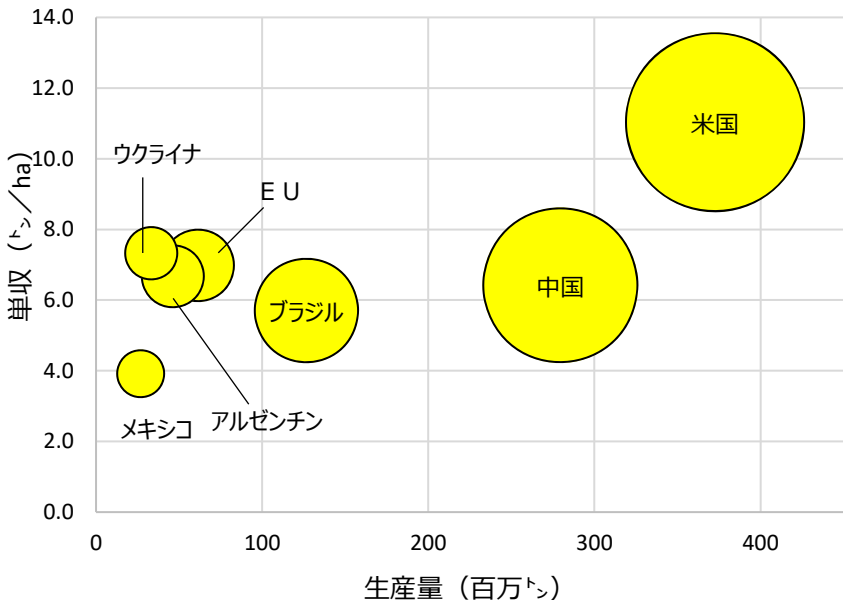
② とうもろこし需要の用途別内訳の動向



3 とうもろこしの生産量変化

- 世界のとうもろこしの生産(2020-22年度平均)は、米国が世界生産量の32%のシェアを占めてトップを維持し、中国、ブラジルを加えた上位3か国で67%のシェア。
- 米国は、主に単収の伸びが生産拡大に寄与。ブラジル、アルゼンチン、ウクライナは、収穫面積の拡大も生産に大きく寄与。単収は各国で差異があり、ブラジルの単収は5.7トン/haで、米国の11.0トン/haの約半分。ブラジルは2000年度に比べ生産量が3倍以上に増加。アルゼンチン、ウクライナの生産量は、それぞれ2倍以上、7倍程度に拡大。

① 世界のとうもろこし生産量・単収と主要国の生産量シェア（2020-22年度平均）



資料：USDA PS&D Online data

② 主要とうもろこし生産国における生産量の増減要因
(2020年度=100)

		1990年度	2000年度	2010年度	2020年度	2022年度
米国	生産量	56.32	70.39	88.21	100.00	96.90
	収穫面積	81.48	88.16	99.12	100.00	95.79
	単収	69.14	79.83	89.03	100.00	101.21
中国	生産量	37.14	40.66	73.18	100.00	106.34
	収穫面積	51.87	55.87	84.76	100.00	104.38
	単収	71.52	72.78	86.23	100.00	101.90
ブラジル	生産量	27.97	47.74	65.98	100.00	157.47
	収穫面積	67.79	65.19	69.35	100.00	112.56
	単収	41.19	73.23	95.19	100.00	140.05
アルゼンチン	生産量	14.78	29.54	48.46	100.00	65.38
	収穫面積	29.01	42.99	57.25	100.00	102.29
	単収	51.01	68.64	84.63	100.00	63.98
ウクライナ	生産量	15.64	12.70	39.34	100.00	89.12
	収穫面積	22.87	23.71	49.08	100.00	75.07
	単収	68.33	53.56	80.07	100.00	118.68
世界計	生産量	42.68	52.41	75.25	100.00	102.39
	収穫面積	64.98	69.05	83.88	100.00	100.99
	単収	65.73	75.92	89.63	100.00	101.41

資料：USDA PS&D Online data

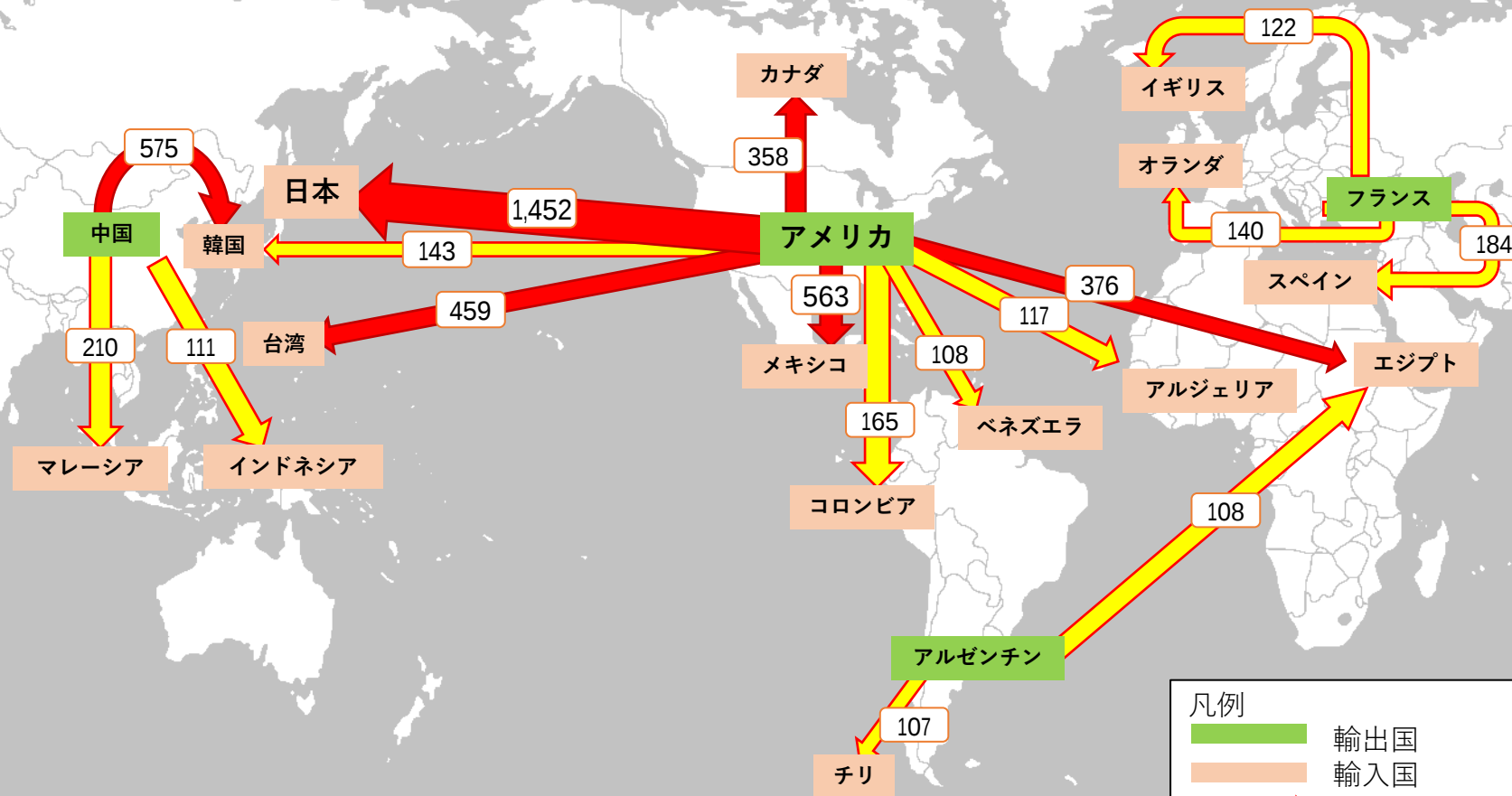
4 とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2002年とうもろこし貿易フロー図

2002年（前後3か年平均）の輸出货量シェアは、米国が60%と圧倒的に高く、次いで中国が13%、アルゼンチンが12%と続く。また、輸入量におけるシェアは、日本が22%を占め、次いで韓国、メキシコ、エジプト等が続く。

(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、とうもろこし(HS1005)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

(単位：万トン)



凡例

輸出国

輸入国

100～300万トン

300万トン以上

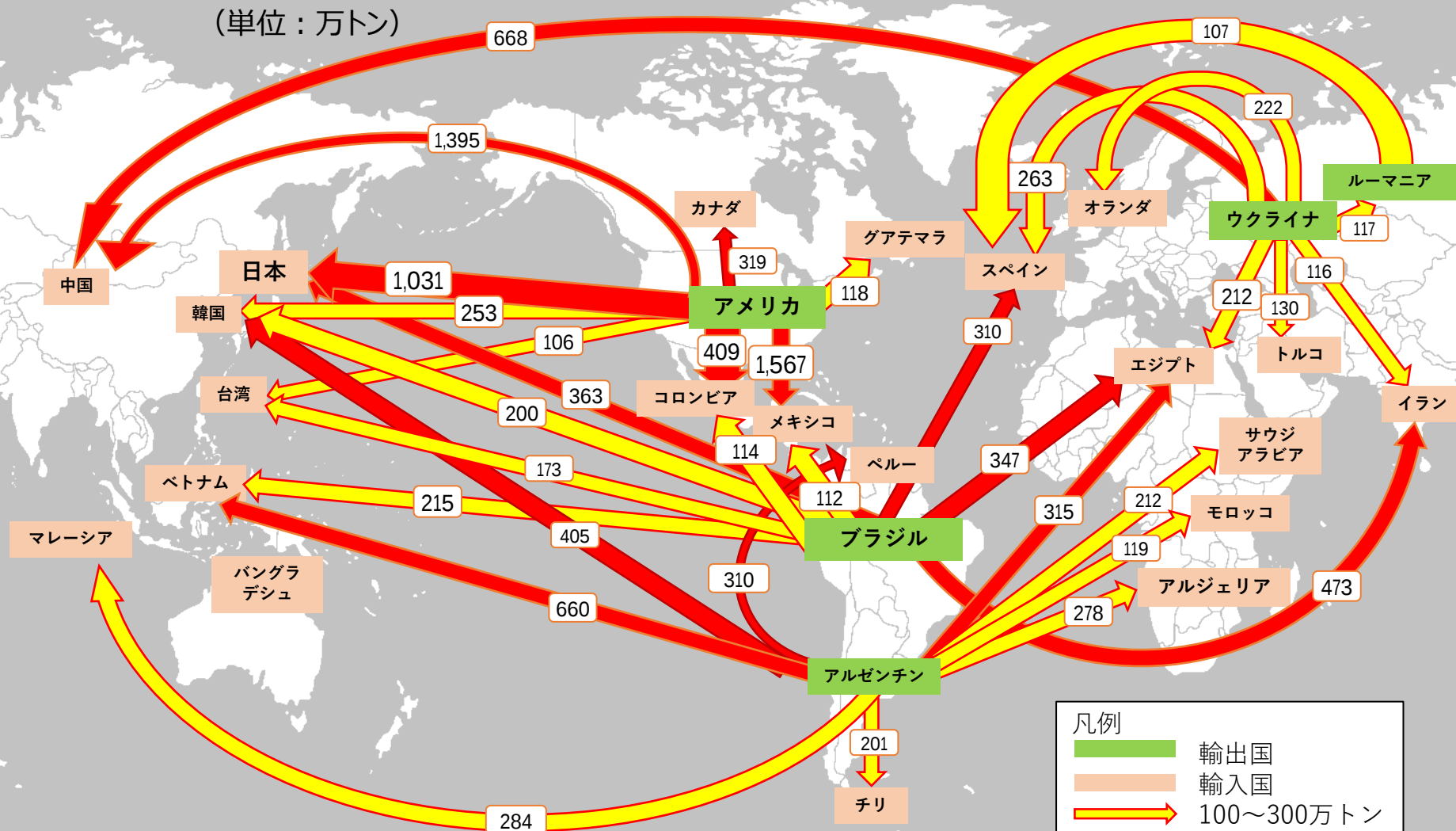
注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

5 とうもろこしの需給動向と貿易フローの変化：2021年とうもろこし貿易フロー図

2021年（前後3か年平均）の輸出シェアは、ブラジルとアルゼンチンで大幅に高まっている。
 なお、ウクライナは14%まで増加（ウクライナ侵攻後の輸出量を含む）。輸入量シェアは日本が8%まで低下する一方、中国のシェアが13%まで増加。（USDA PS&D Online data）

注：Global Trade Atlasのデータ（2024.01）で、とうもろこし(HS1005)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

（単位：万トン）



凡例

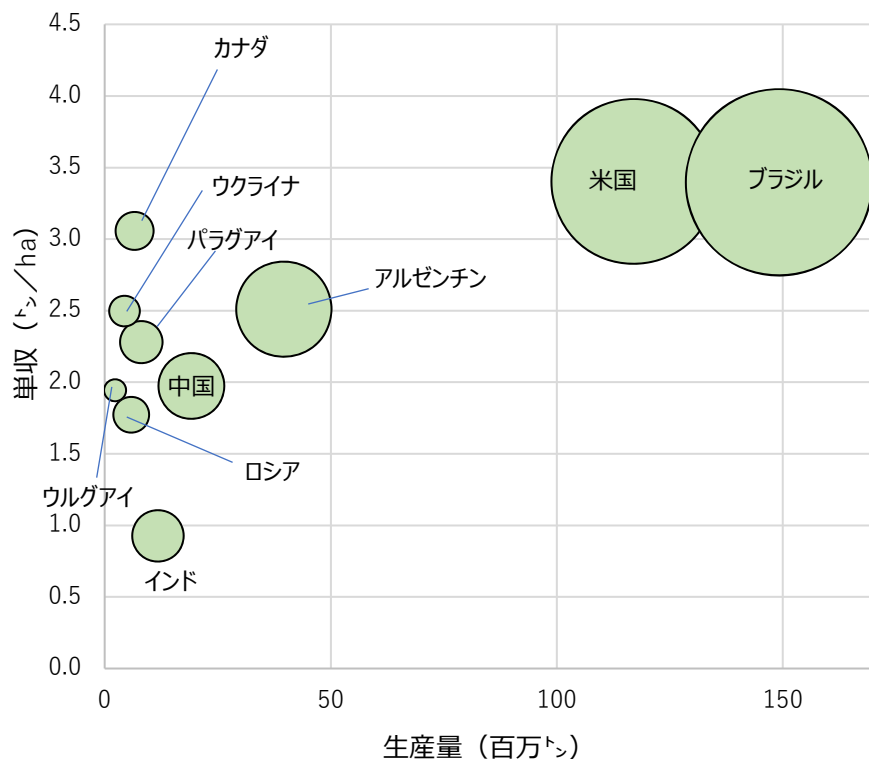
- 輸出国
- 輸入国
- 100～300万トン
- 300万トン以上

注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

6 大豆の生産量変化

- 大豆生産量は(2020-22年度平均)、ブラジル、米国がそれぞれ世界の生産量の40%、32%のシェアを占め、アルゼンチンを含めた上位3か国のシェアが83%を占めて偏在化している。
- ブラジル、アルゼンチンは2000年以降、単収だけでなく、収穫面積の増加が大きく生産量の増加に寄与し、それぞれ2000年度に比べて3倍、1.3倍程度まで拡大。米国は、単収の増加が主に寄与。

① 世界の大豆生産量・単収と主要国の生産量シェア
(2020-22年度平均)



資料 : USDA PS&D Online data

② 主要大豆生産国における生産量の増減要因

(2020年度=100)

		1990年度	2000年度	2010年度	2020年度	2022年度
ブラジル	生産量	11.3	28.3	54.0	100.0	114.7
	収穫面積	24.7	35.3	61.3	100.0	112.2
	単収	45.9	80.5	88.1	100.0	102.3
米国	生産量	45.7	65.4	79.0	100.0	101.3
	収穫面積	68.4	87.7	92.7	100.0	104.3
	単収	66.8	74.6	85.1	100.0	97.1
アルゼンチン	生産量	24.9	60.2	106.1	100.0	54.1
	収穫面積	28.8	63.1	111.1	100.0	87.4
	単収	86.1	95.0	95.4	100.0	61.9
中国	生産量	56.1	78.6	78.6	100.0	103.5
	収穫面積	76.5	94.2	88.0	100.0	103.7
	単収	73.7	83.8	89.4	100.0	100.0
インド	生産量	24.9	50.2	96.9	100.0	118.7
	収穫面積	19.8	44.9	74.3	100.0	101.3
	単収	125.9	112.3	130.9	100.0	117.3
世界合計	生産量	28.2	47.6	71.7	100.0	101.7
	収穫面積	41.9	58.3	79.9	100.0	105.2
	単収	67.4	81.8	89.5	100.0	96.5

資料 : USDA PS&D Online data

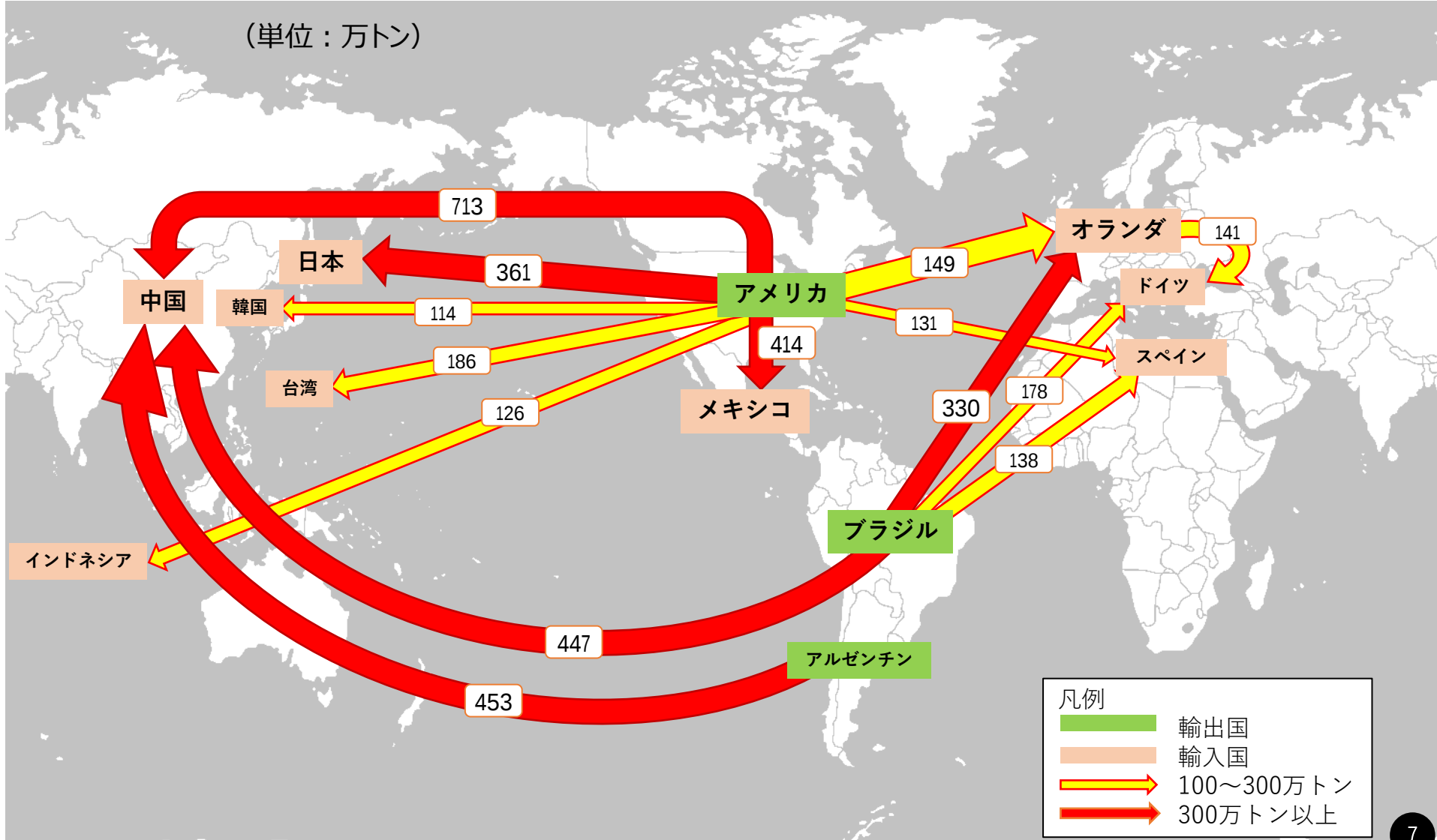
7 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2002年大豆貿易フロー図

2002年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が48%と高く、次いでブラジルが32%を占めた。輸入量シェアは、中国が28%、日本とメキシコがそれぞれ約8%を占めた。

(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、大豆(HS1201)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

(単位：万トン)



注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

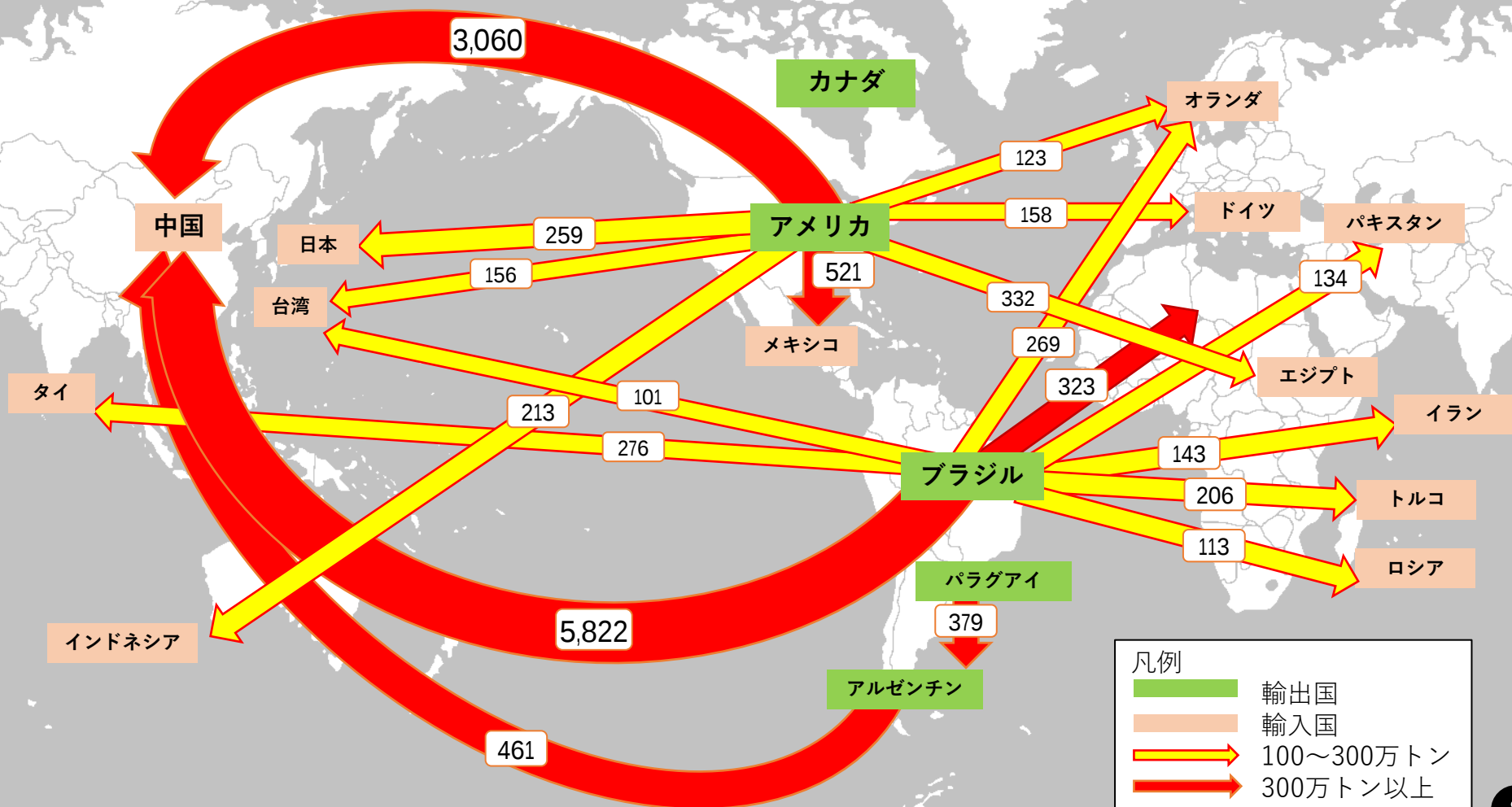
8 大豆の需給動向と貿易フローの変化：2021年大豆貿易フロー図

2021年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、ブラジルが52%と大幅に高まっている。輸入量シェアは中国が59%と大幅に上昇する一方、日本は2%に低下。

(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2024.01）で、大豆(HS1201)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

(単位：万トン)

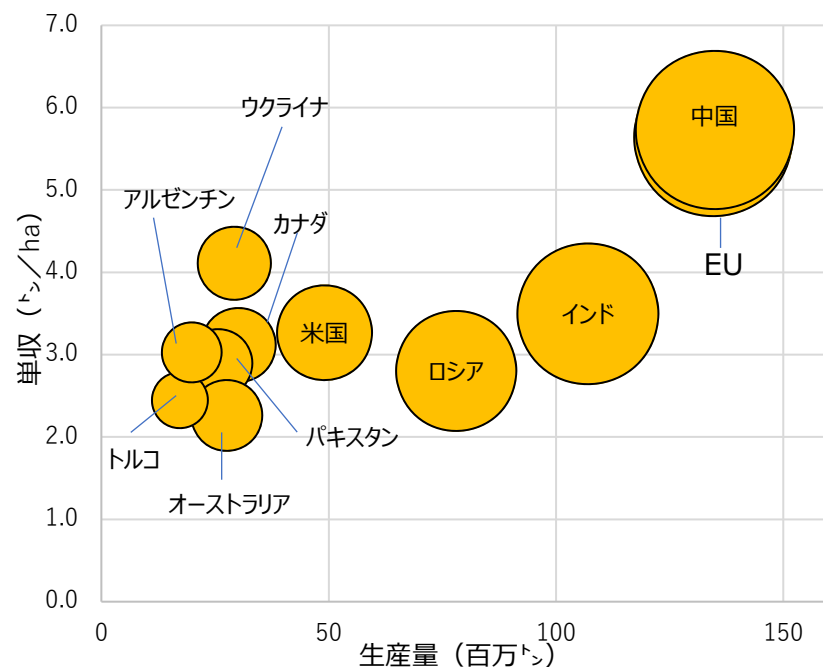


注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

9 小麦需給と貿易動向

- 世界の小麦生産量(2020-22年度平均)は、中国、EUがそれぞれ17%を占め、次いで、インド、ロシア、米国と続き、上位5か国・地域で65%のシェア。米国のシェアは低下傾向。
- 小麦は、主に単収の伸びにより生産量が増加する一方、先進国の収穫面積は、若干の減少傾向。
- 2000年代以降、伝統的な主要輸出国である米国、カナダ等に加えて、新興のロシア、ウクライナが輸出市場で台頭。ロシアの輸出量は2010年代後半に米国の輸出量を超过している。
- 北アフリカ・中東地域ではエジプト等、東南アジアではインドネシア、フィリピン等が輸入拡大。ロシア、ウクライナ等の新興輸出国が、中東・北アフリカ等へ輸出を増やした。

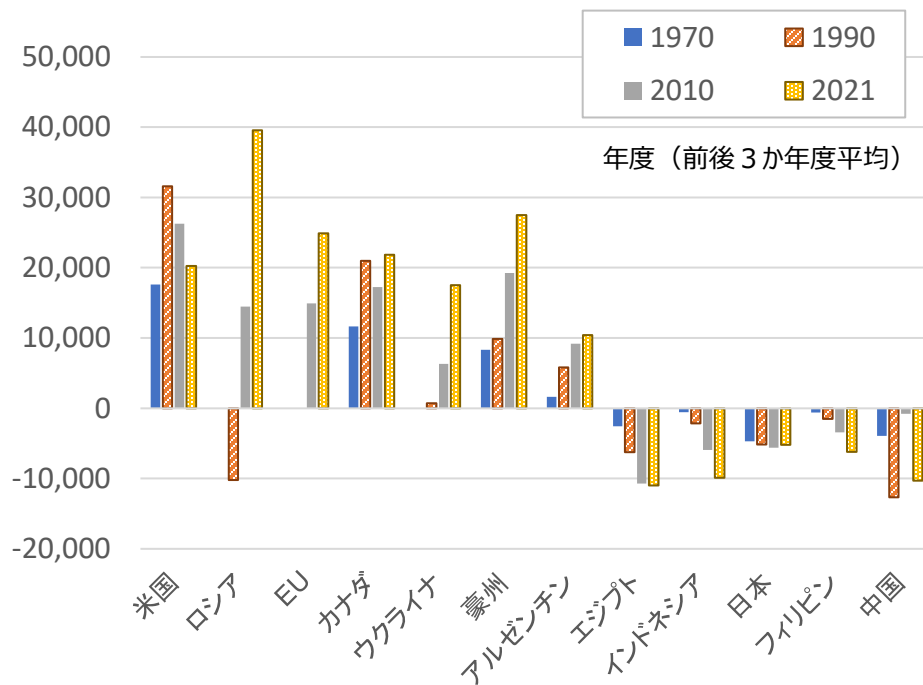
① 世界の小麦生産量・単収と主要国の生産量シェア（2020-22年度平均）



資料：USDA PS&D Online Data

② 国別小麦純輸出量の推移

(1,000トン)



資料：USDA PS&D Online Data

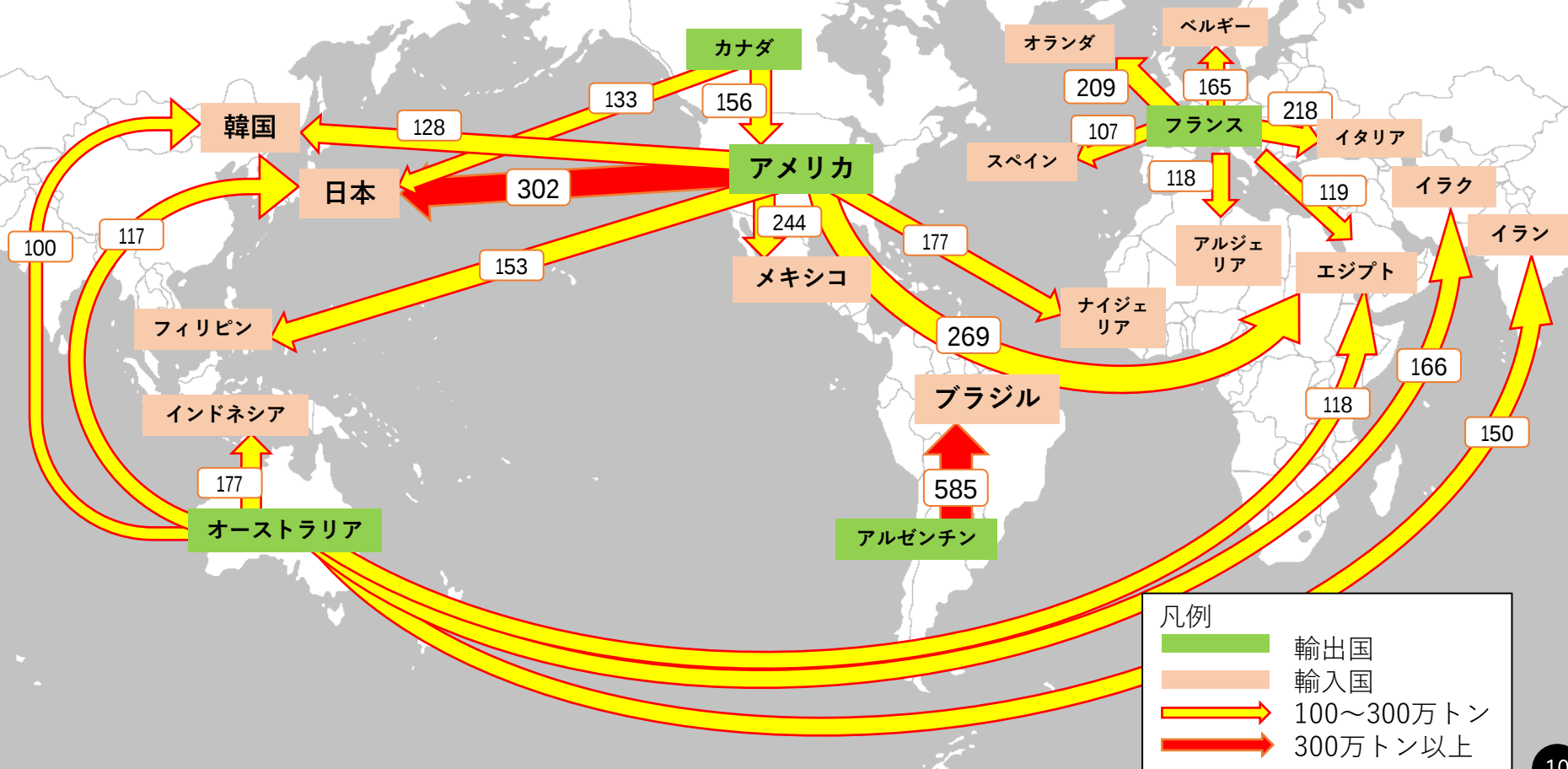
10 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2002年小麦貿易フロー図

2002年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が25%で最大。豪州、カナダ、アルゼンチン等が続く。輸入量シェアは、エジプト、ブラジル、日本等がそれぞれ約6～8%を占めた。

(USDA PS&D Online data)

注：Global Trade Atlasのデータ（2020.01）で、小麦(HS1001)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

(単位：万トン)

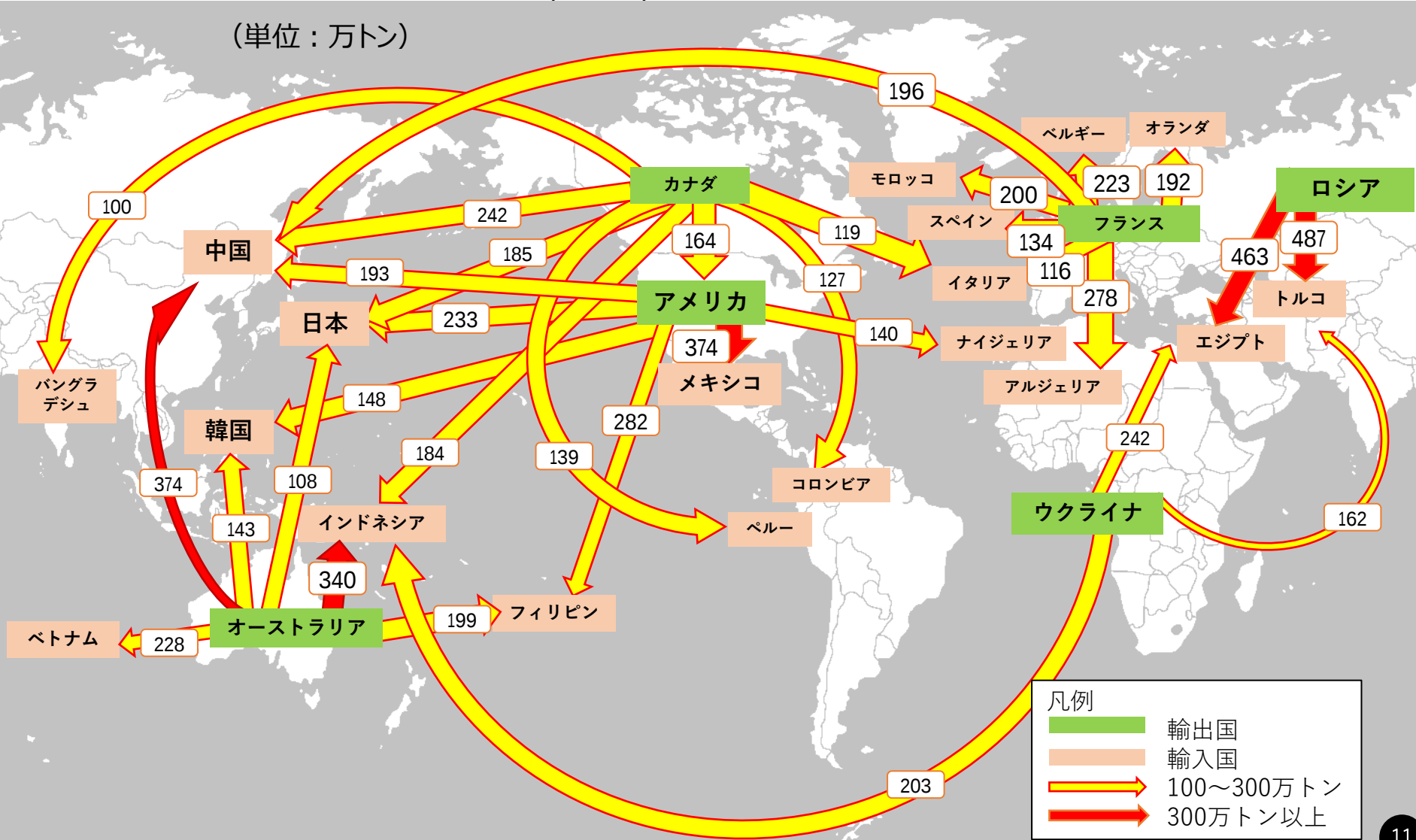


注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

1 1 小麦の需給動向と貿易フローの変化：2021年小麦貿易フロー図

2021年（前後3か年平均）の輸出量シェアは、米国が13%に低下する一方、ロシアが19%、増加。東南アジア、中東・アフリカへの輸出が増加。ウクライナの輸出量シェアは8%に増加（ウクライナ侵攻後の輸出量を含む）。

注：Global Trade Atlasのデータ（2024.01）で、小麦(HS1001)の輸出上位5か国から、100万トン以上輸出している貿易フローを作図

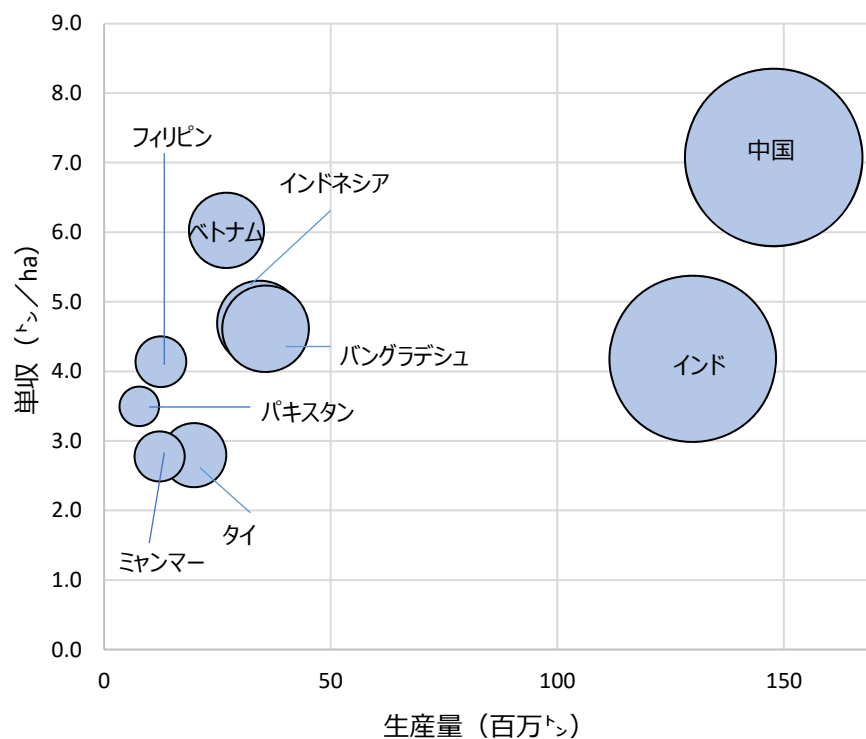


注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある。

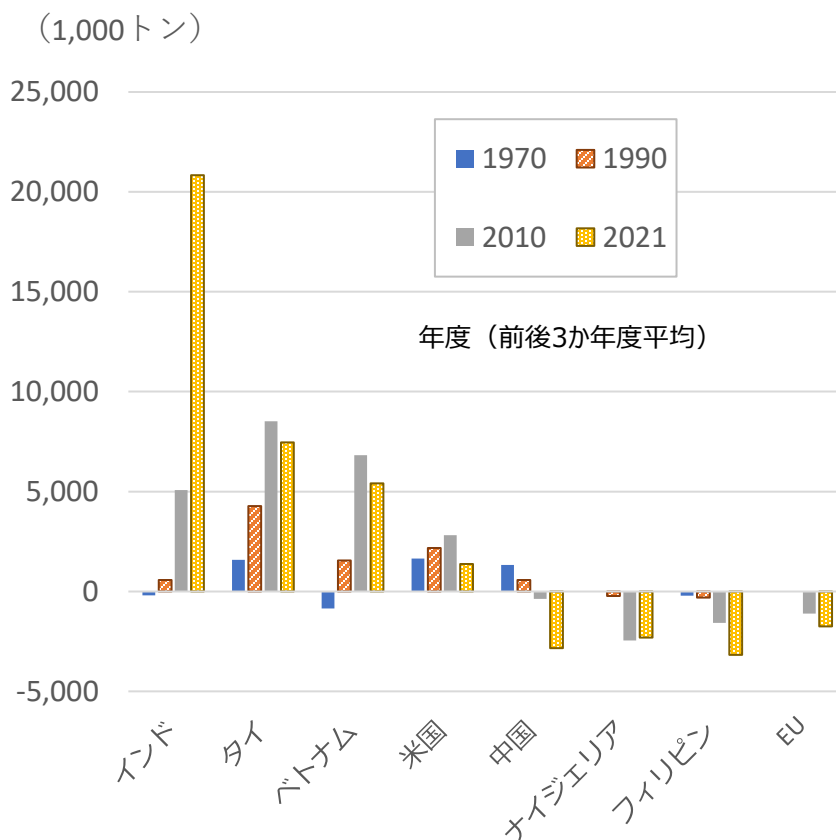
12 米需給と貿易動向

- 世界の米生産量(2020-22年度平均)は、アジアが生産量の9割を占める主要穀物。中国、インドの上位2か国で54%のシェアを占め、バングラディシュ、インドネシア、ベトナム、タイと続く。
- 輸出量は、インドが38%のシェアを占め、タイ、ベトナムが続く。
- 単収は、主要輸出国のインド、タイ、ベトナムや主要生産国の中国の間でも差が大きい。
- ナイジェリア等のアフリカ諸国の輸入量が増加。サブサハラ・アフリカの輸入量は世界の輸入量の約1/3。

① 世界の米生産量・単収と主要国の生産量シェア（2020-22年度平均）



② 国別米純輸出量の推移



1 3 中国：食糧安保最重視し、「農業強国」建設目指す。単収向上で食糧7億トン生産へ

- 2023年の食糧(コメ、小麦、とうもろこし、その他穀類、豆類、いも類)の総生産量は6億9,541万トンと史上最高を記録。2015年以降9年連続6億5千万トン超え、とうもろこしは史上最高の2億8,884万トン、大豆増産も継続し2,084万トン。小麦は長雨等により、コメは播種面積減によりともに1%減(小麦1億3,659万トン、コメ2億0,660万トン)
- 2023年の輸入は、とうもろこしが前年より3割増え2,713万トン、うち5割弱がブラジル産。小麦は2割増の1,188万トン、5割以上が豪州産。大豆は1割増の9,941万トン、うち7割超がブラジル産。コメは6割減の260万トン。
- 食糧安全保障を最優先。供給保障・科学技術装備・経営体系・産業強靱性・競争力備えた「農業強国」建設を前面に。食糧6.5億トンが絶対目標、更に2023年より新たな5千万トン増産活動スタート。栽培耕地面積確保と単収向上に注力。
- 栽培等への補助金と最低買付価格保障で利益を支え、「党と政府が同責」の「責任制」徹底で生産目標達成を目指す。

① 小麦・トウモロコシ・大豆の生産と輸入



② とうもろこし・大豆・コメ生産者補助制度(黒竜江省の例)

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
とうもろこし	133元	25元	30元	38元	68元	28元	14元
大豆	173元	320元	255元	238元	248元	248元	366元
コメ		132.79元	133元	136元	133元	140元	172.67元

注：①ムー(1/15ヘクタール当たりの単価。)

②補助対象は、トウモロコシ・大豆は黒竜江・吉林・遼寧・内蒙古のみ。コメは各省。

③コメの単価は地表水の場合。地下水の場合には各年、これより50元低く設定。

③ 近年のコメ、小麦の最低買付価格の推移(単位：元/50kg)

	早生 インディカ	中・晩生 インディカ	ジャポニカ	白小麦、混合 麦、紅小麦
2015年	135	138	155	118
2016年	133	138	155	118
2017年	130	136	150	118
2018年	120	126	130	115
2019年	120	126	130	112
2020年	121	127	130	112
2021年	122	128	130	113
2022年	124	129	131	115
2023年	126	129	131	117
2024年	127	129	131	118

注：対象はコメが黒竜江省など11省・自治区、小麦が河北省など6省。

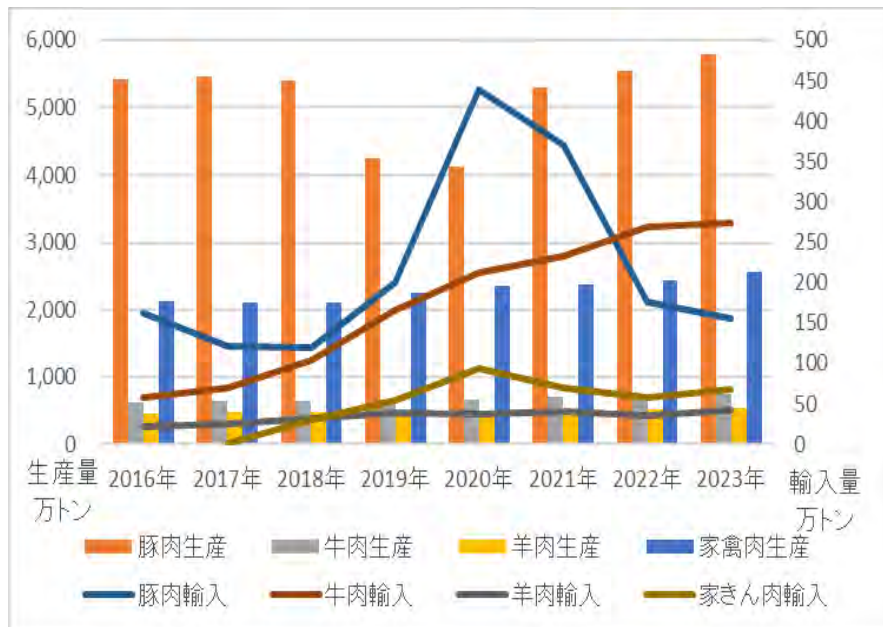
【参考】2016年以降、「量から質への転換」と「糧經飼三元構造」目指す方向。2021年からは、再度食糧増産へ転換。種子対策と耕地の面積確保・高規格化改良を推進。

- ・ とうもろこしは、養豚回復による飼料用需要のため輸入急増。2017年以降の生産抑制から、再度増産へ。大豆増産との両立目指し、「带状複合栽培」や多毛作を推進。
- ・ 2022年より輸入減目指し大豆増産へ。食用油と油糧種子(菜種等)にも注力。
- ・ 国民の節約と生産・流通・加工各段階の減損抑止に注力、備蓄と食糧管理も重視。

14 中国における豚肉等の生産・価格の動向

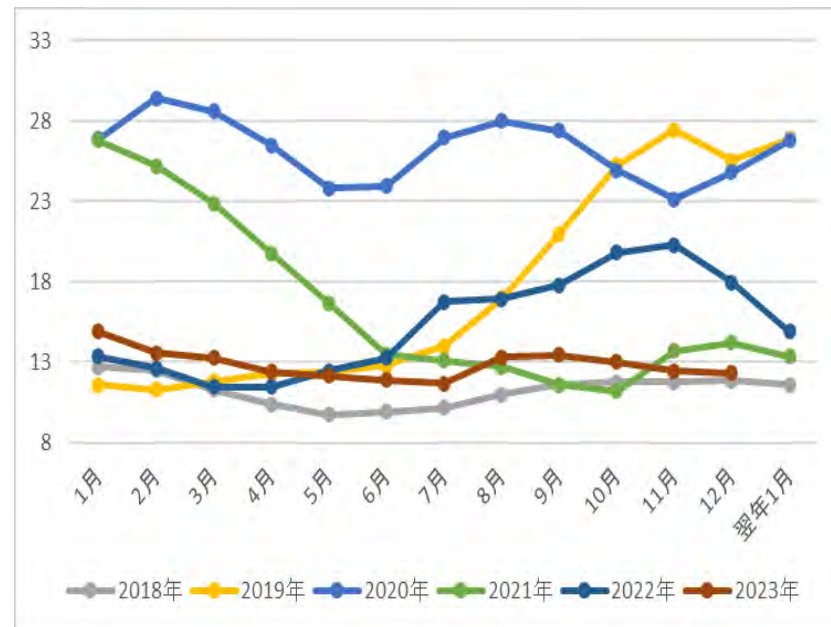
- 2018年8月にアフリカ豚熱（ASF）が発生し、2019年にかけて全国に拡大。豚肉生産量は5,404万トン（2018年）→4,133万トン（2020年）へ縮小。この間、輸入量は119万トン→430万トンへ増加。
- 2021年の豚肉生産量は5,296万トンへ急回復、2022年は5,541万トン、2023年は5,794万トンと安定。2021年以降、豚肉輸入量は減少傾向、2023年は155万トンまで減少。
- 2021年7月から政府は供給安定に向け、金融対策や、立地規制の緩和、繁殖母豚飼養数の合理的水準保持、大規模生産拠点整備、大規模養豚企業と中小養豚の連結体制づくりを推進。地方政府の供給安定責任を重視。
- 2019年9月秋から急騰した豚肉価格は、2021年に急落。供給安定優先の政策運営の中、2022年秋以降、価格は低迷傾向で推移。2023年は「この十年で初めて、通年で経営赤字」となり、中小業者には厳しい状況。
- 畜産分野の自給率目標(2025年末)として、豚肉：95%、牛・羊肉：85%、家きん肉：100%を目指す。家畜家きんの遺伝的改良、育種・繁殖体制の強化策を推進。
- 2023年の牛肉生産は753万トン（前年比5%増）、輸入は274万トン(2%増)。羊肉生産は531万トン(1%増)、輸入は43万トン(21%増)。家きん肉生産は2,563万トン（5%増）、輸入は68万トン(17%増)。

① 食肉の生産量と輸入



資料：生産量は国家統計局、輸入量は海関総署。

② 豚肉価格の推移（元/500g）



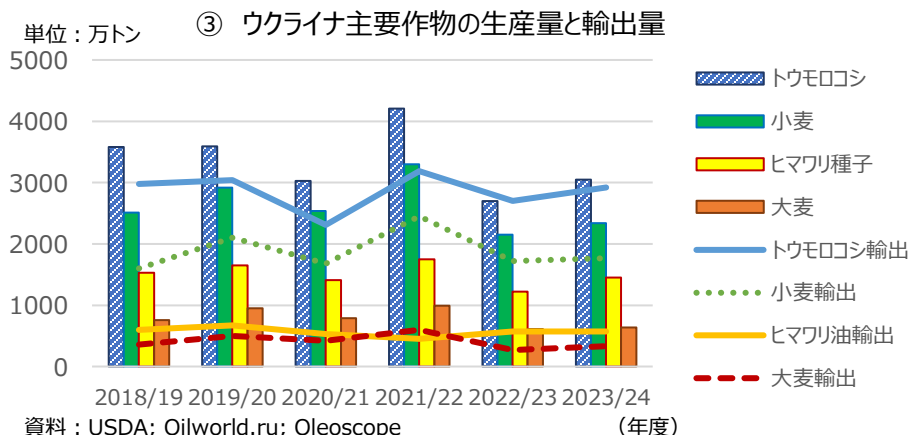
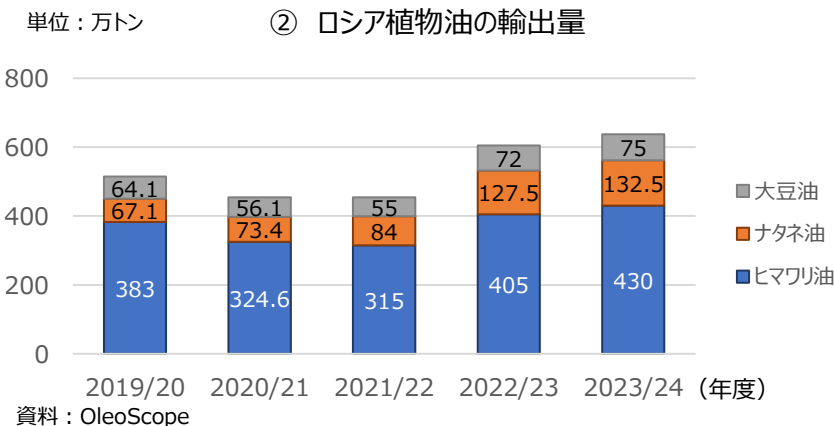
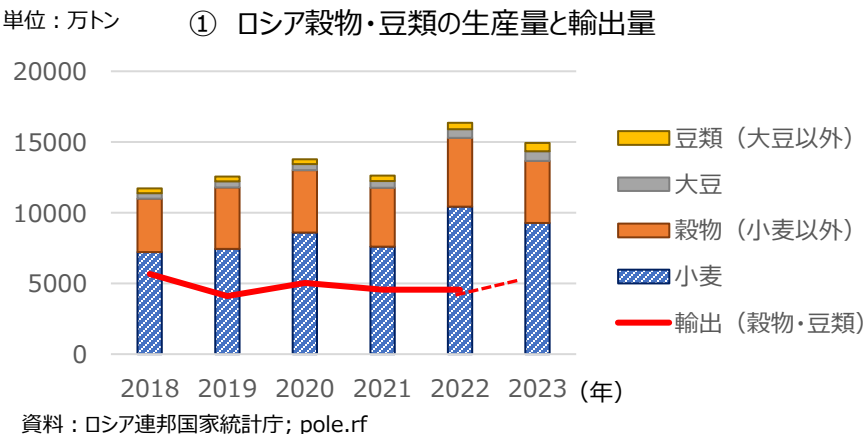
資料：農業農村部農産品需給形勢分析月報

15 ロシアとウクライナ：供給量は漸増

○ ロシアでは過去最大の穀物生産量を記録した2022年には及ばないものの、2023年はそれに次ぐ生産量となった。ウクライナでも軍事侵攻を受けて落ち込んでいた農作物の生産が回復しつつあるが、物流の障害から輸出量は横ばい。

○ 2023年7月にはカーギルやバイテラ、ルイ・ドレフュスといった西側のメジャーが相次いでロシア穀物取引市場から撤退するという波乱が起きたものの、市場を揺るがすような大きな影響は見られず、ロシアは主に中東や北アフリカを中心に輸出を伸ばしている。

○ ロシアの油糧種子は、輸出関税（ヒマワリ50%、320ドル／トン以上；ナタネは輸出禁止）の効果で輸出が減少。その一方で、主に中国とインドに向けた植物油の輸出が伸びている。



④ ロシアの穀物輸出割当量

期間	割当量	詳細
2020年4月1日～6月30日	700万 t	
2021年2月15日～6月30日	1,750万 t	以後関税割当
2022年2月15日～6月30日	1,100万 t	うち小麦800万 t
2023年2月15日～6月30日	2,550万 t	穀物種類の区別なし
2024年2月15日～6月30日	2,400万 t	穀物種類の区別なし

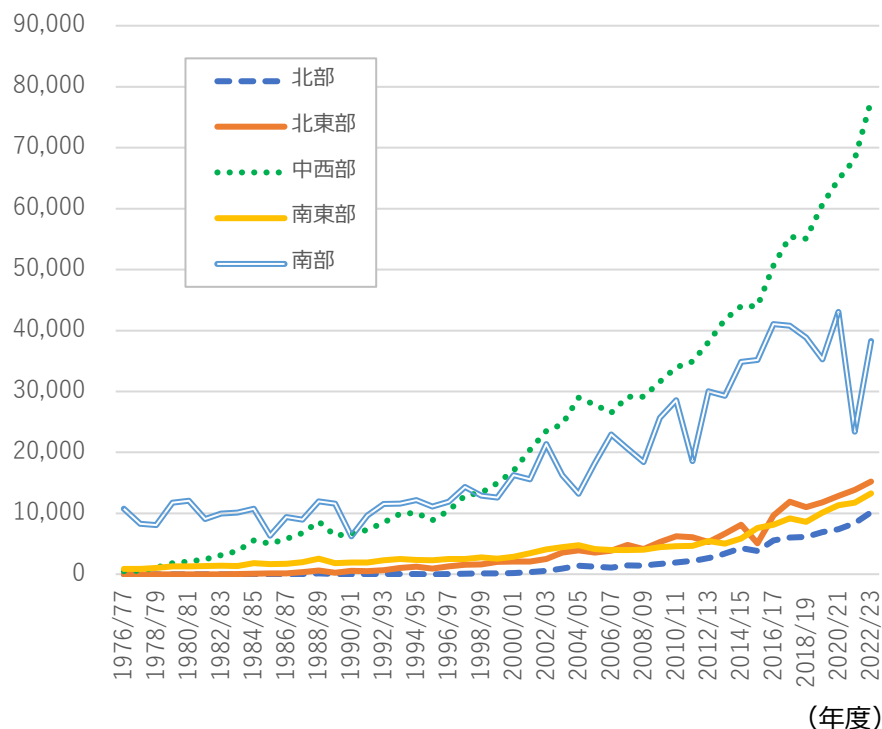
資料：Interfaks

16 ブラジル：大豆・とうもろこしの生産動向

- 大豆やとうもろこし生産は、「セラード」地帯が位置する中西部を中心に生産されている一方、小麦やコメについては伝統的な穀倉地域である南部で生産。
- 大豆：中国の堅調な輸入需要により、2022年度の生産量について1億5,461万トンと過去最高の生産量の見込み。
- とうもろこし：国内におけるバイオエタノール需要ならびに中国をはじめとする国外の需要の増加により、2022年度の生産量について1億3,195万トンと過去最高の生産量を見込む。

① 大豆生産量推移

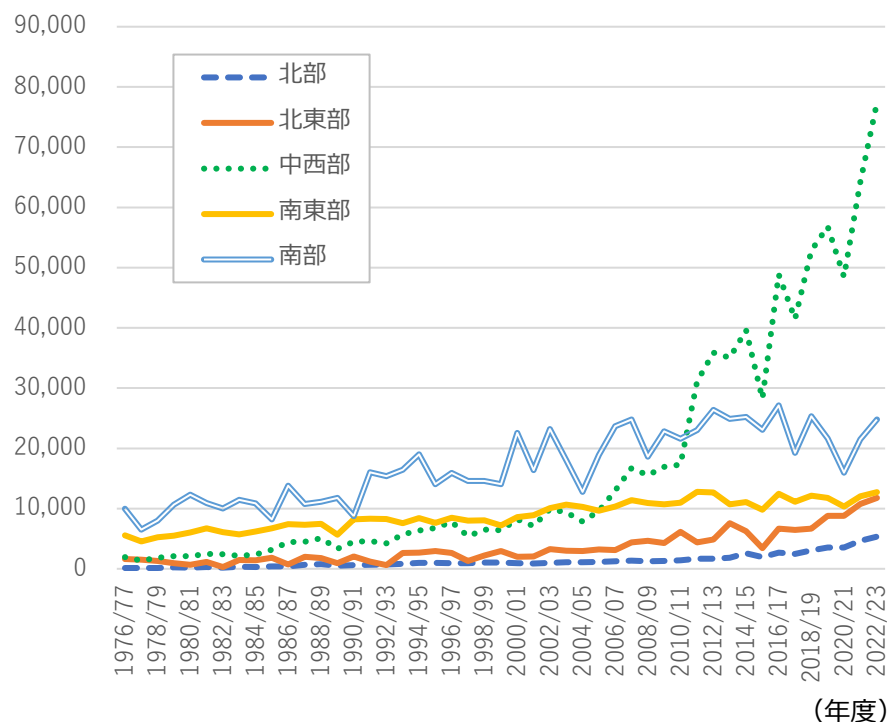
(単位：1,000トン)



資料:CONAB (2023)

② とうもろこし生産量推移

(単位：1,000トン)

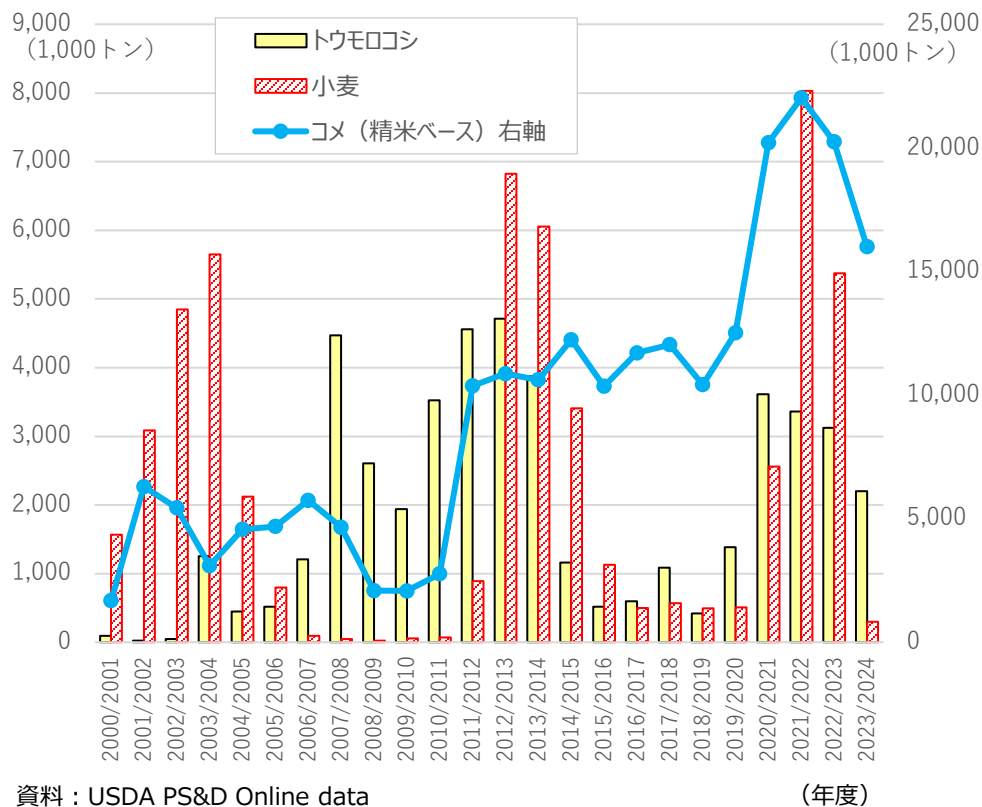


資料:CONAB (2023)

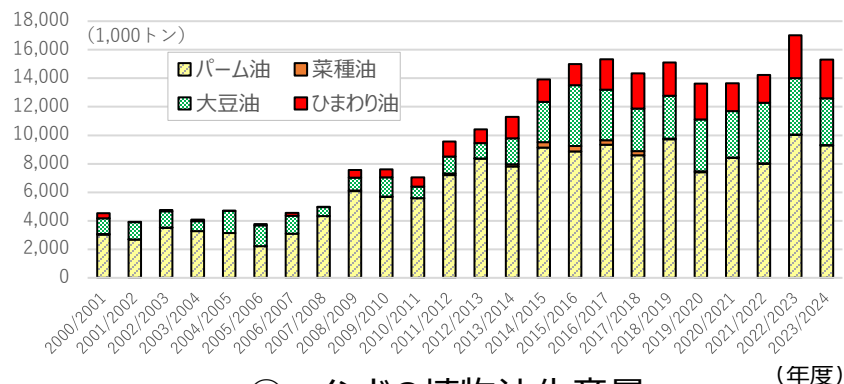
1 8 インドの穀物輸出・植物油輸入動向

- インドの小麦や米等の主要穀物は基本的に自給し、輸出量も多い。米は2010年代後半にタイを抜いて世界一の輸出量を維持している。しかし、小麦と米の輸出制限措置により2023/24年度の輸出量は大きく減少。
- 一方、インドの植物油の輸入は年々増加し、2000年代前半の500万トン程度の輸入量から、2010年代後半には3倍程度まで拡大。特に、パーム油の輸入量が多く、輸入量の半分以上を占める。大豆油、ひまわり油の伸びも大きい。インドの植物油の生産量の増加は、消費量に比べて限られ、伸びは限定的。

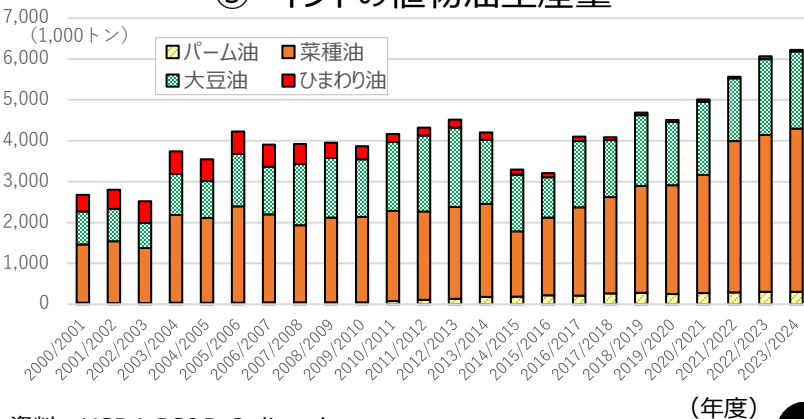
① インドの穀物輸出量



② インドの植物油輸入量



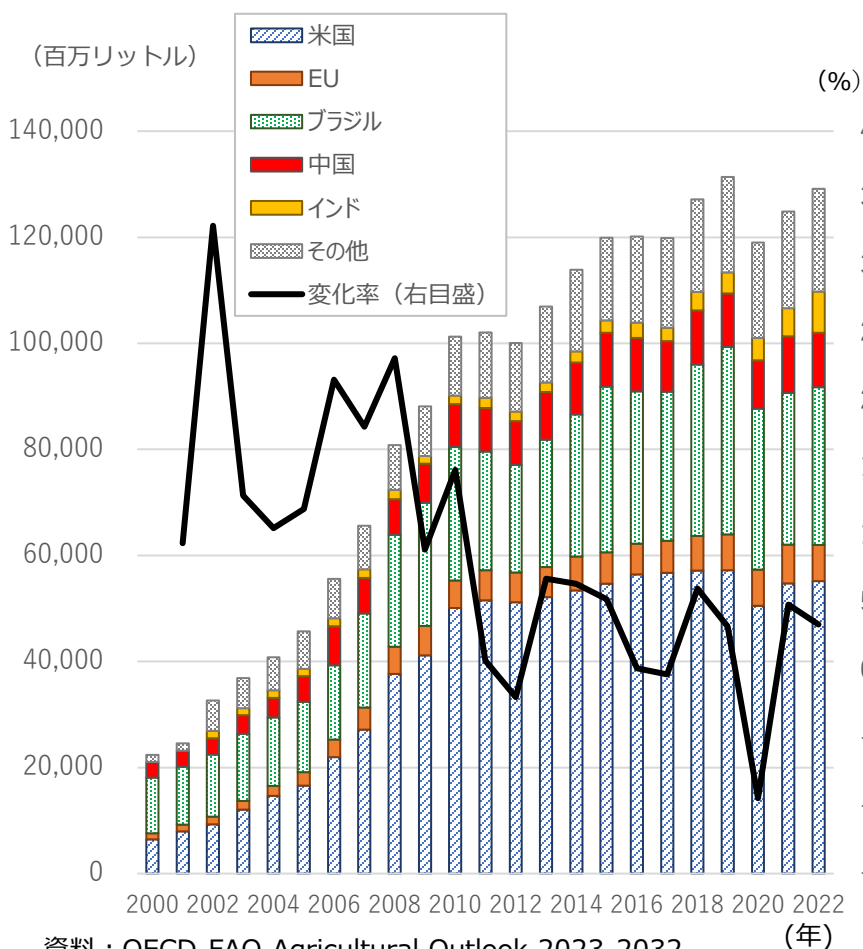
③ インドの植物油生産量



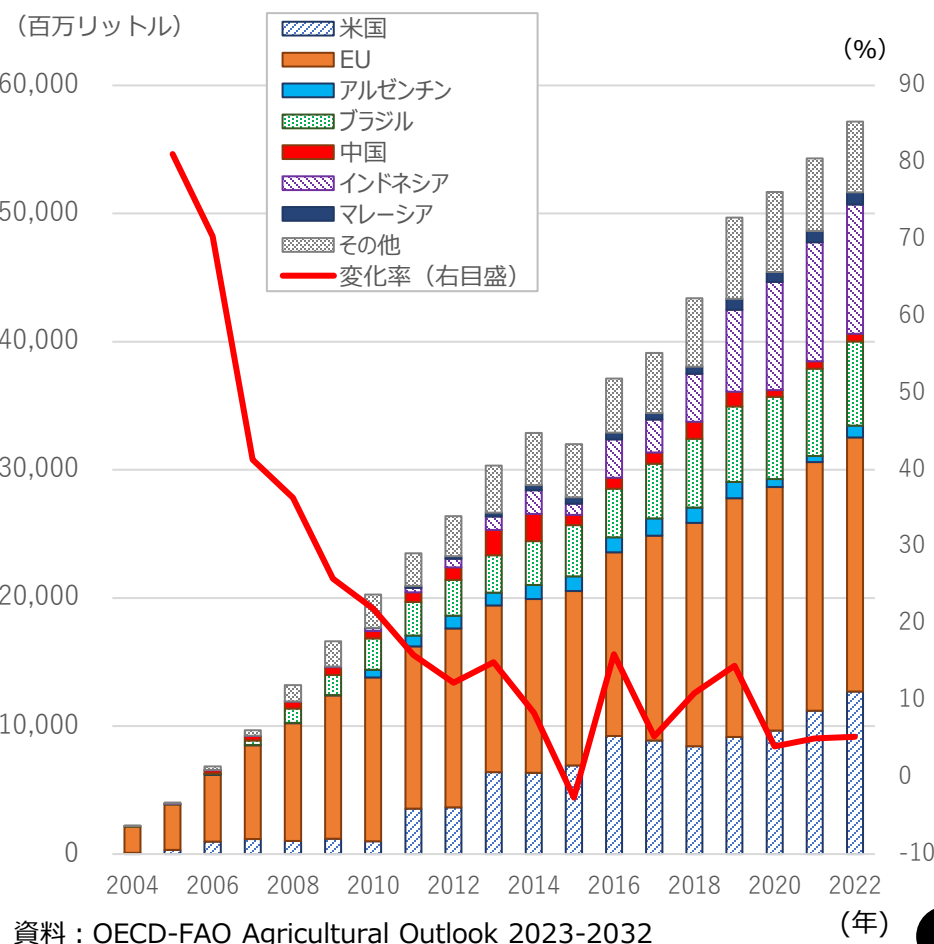
1 9 バイオ燃料の需要動向

- 世界のバイオエタノール需要量は、COVID-19のパンデミックに対する各国の移動制限措置等の影響を受けて2020年は急減。2021年以降は輸送用燃料需要の回復等からバイオエタノール需要量は増加するものの、パンデミック前の水準を下回る。
- バイオディーゼル需要量は、インドネシアを中心とする混合率上昇等の影響から2020年以降も増加。

① 世界のバイオエタノール需要量と増加率



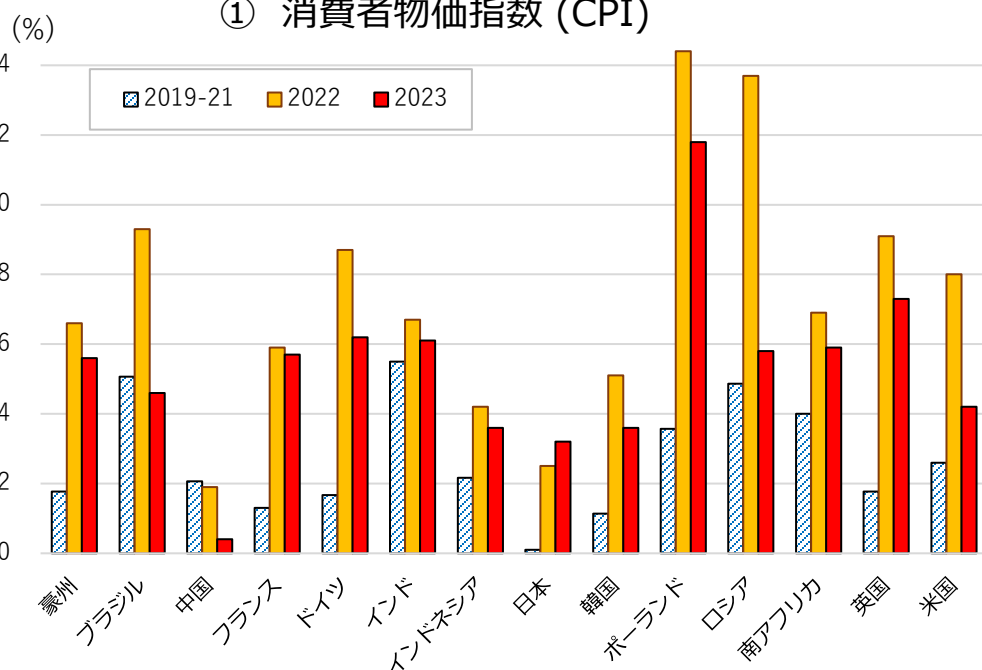
② 世界のバイオディーゼル需要量と増加率



20 消費者物価の高止まりと重なる紛争による海上輸送運賃の急変動

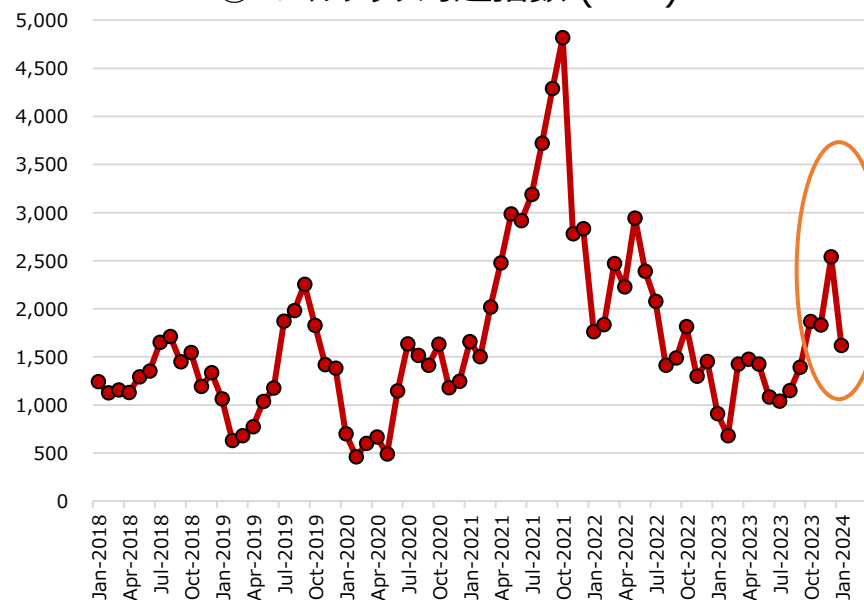
- ウクライナ侵攻等の影響を受けてエネルギーや資源・食料価格が上昇したことに伴って、2022年は消費者物価数が多い国で急上昇して、インフレ圧力が増した。重なる紛争による影響等から2023年以降も、多くの国でインフレが高止まりする傾向にある。ただし、経済減速の懸念から地域的なばらつきはあるが物価を押し下げる動きもみられる。
- バルチック海運指数（BDI^注）は、コロナ禍における世界的なサプライチェーンの混乱等から高騰したが2022年から落ち着きを取り戻し、2023年に同指数はコロナ前の水準まで戻ったものの、重なる紛争等の混乱から紅海周辺の通航量が減り、2023年10月以降、急激な変動をみせている。
（注：鉄鉱石、石炭、穀物等の梱包されないドライ貨物を運ぶばら積み不定期船運賃に関する総合指標。）
- またコンテナ船運賃は、コロナ禍でサプライチェーンの混乱等により世界的に高騰したが、落ち着きを取り戻し、2023年にはパンデミック前の水準まで戻っていた。しかし、紅海周辺の混乱でアフリカを回る迂回ルートが増え、パナマ運河の水位低下による通航制限も加わるなど、中国等の経済減速が懸念される中でも、同運賃は大きく変動している。2024年1月の上海積みロッテルダム向けのコンテナ船運賃が前年平均の2倍を超えている。（日本海事センターによる主要航路コンテナ運賃動向より）

① 消費者物価指数 (CPI)



資料：OECD Statistics 注：2023年は推計値

② バルチック海運指数 (BDI)

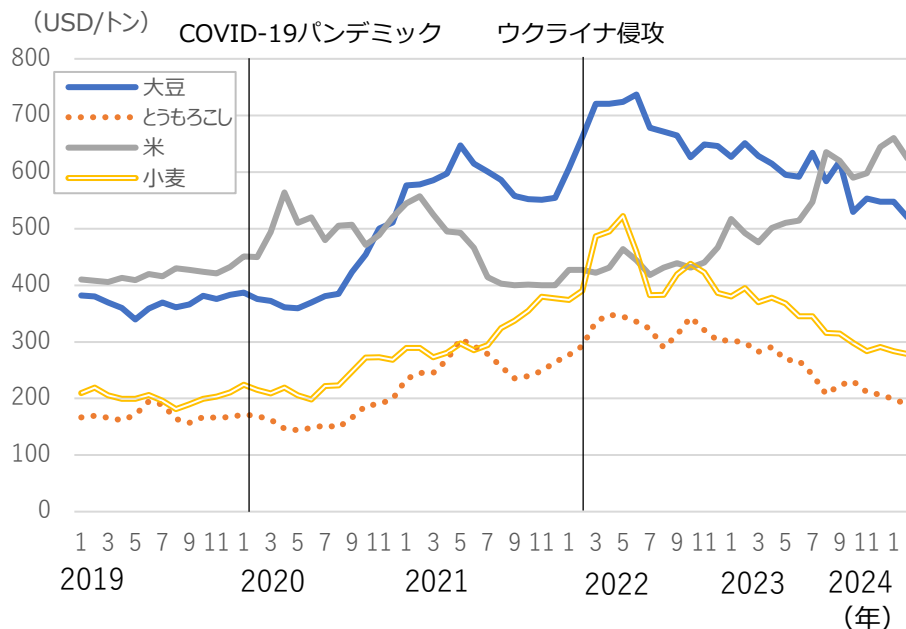


資料：日本海事センター企画研究部

21 新型コロナウイルス禍・ウクライナ侵攻後の穀物等の価格動向

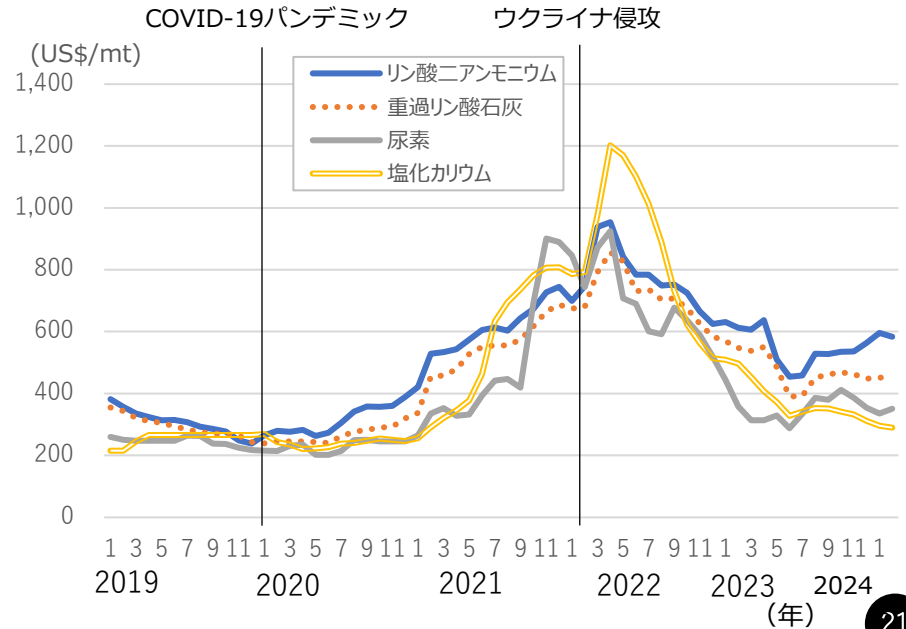
- とうもろこしは、パンデミック前の2020年2月まで、良好な生産見通し等を背景に価格は低位で推移。小麦も同様に、2020年2月まで、良好な生産見通しを背景に比較的低位で安定していた。その後、良好な生産見通し等を受けて、弱含みの価格推移となり、2020年夏頃まで穀物等市場全体に、豊作期待から価格は低く安定していた。
- 2020年夏以降、北米の乾燥、南米の降雨不足、飼料需要を中心とする穀物・大豆等市場で中国の輸入が急増。2021年には、ラ・ニーニャ現象等の影響による南米の乾燥や北米の高温乾燥、コンテナ船運賃高騰の継続も背景に、穀物・大豆価格は上昇基調で推移。
- ロシアによるウクライナ侵攻の影響により、2022年3月以降の穀物等の価格は急上昇し、小麦はシカゴ先物市場で史上最高値を更新し、とうもろこし、大豆は10年ぶりの高値。同年夏以降、ウクライナ侵攻前の水準程度に戻るものの、高値で推移。一方、米は豊富な供給量を背景に比較的、安定的に推移したが、2023年以降、天候不良等から上昇基調で推移。
- 窒素肥料の原料となるアンモニア生産に必要な天然ガス価格の高騰、ロシアを中心とする肥料輸出国による輸出規制、COVID-19による(サプライチェーンの混乱)肥料輸送の制約等により、2021年後半から肥料価格は高騰し、ウクライナ侵攻後の2022年4月にピークとなる。その後、下落基調で推移。ただし、COVID-19パンデミック発生前の水準を上回って推移。

① 国際穀物・大豆の月次価格(2019-2024年)



資料：World Bank Pink Sheet Data (2024.3)

② 化学肥料の月次価格(2019-2024年)



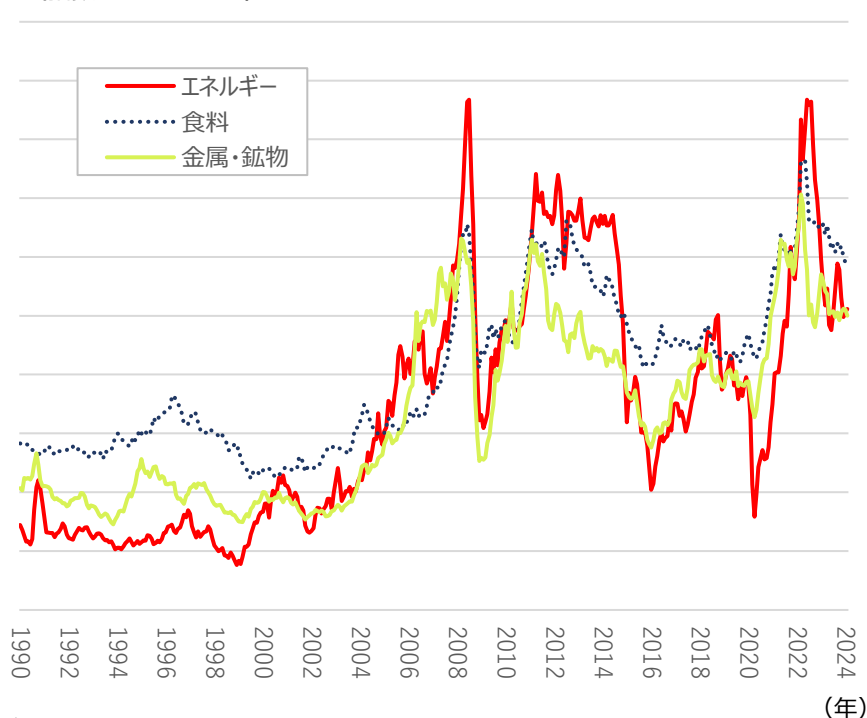
資料：World Bank Pink Sheet Data (2024.3)

2.2 国際商品価格・穀物及び大豆の価格の推移

- 食料、金属・鉱物の価格は、2021年以降、世界経済の回復基調とCOVID-19パンデミック禍の労働力不足やサプライチェーンの遅延、コンテナ船運賃の高騰、環境政策の影響等もあり、堅調に推移。
- 国際市場における穀物及び大豆価格は、2020年後半から北米・南米の乾燥とCOVID-19からの経済回復に伴う中国等の輸入増や、2021年の南米・北米の高温乾燥等の影響で高値圏で推移。
- ウクライナ侵攻により、2022年3～6月にかけて国際商品価格はさらに上昇し、食料指数は2008年や2011年の価格高騰の水準を更新。2022年7月以降は下落し、前年同月の水準を下回るものの、パンデミック前の水準を上回って推移。

① 国際商品価格の月次推移

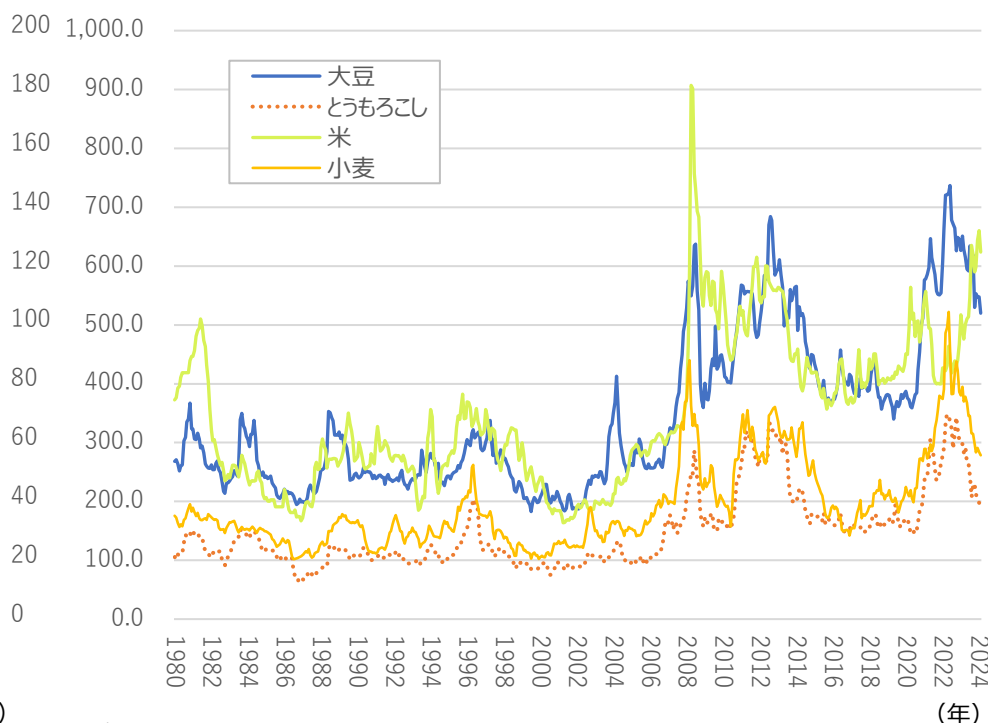
(指数：2010=100)



資料：World Bank Commodities Price Data (2024.3) より作成
注：食料は、穀物、植物油、肉類、砂糖、バナナ、オレンジ、エビ、フィッシュミールを含む。金属・鉱物は、鉄鉱石、銅、アルミニウム、すず、ニッケル、銅、亜鉛、鉛を含む。エネルギーは、原油、天然ガス、石炭を含む。

② 国際穀物及び大豆価格の月次推移

(USドル/トン)



資料：World Bank Commodity Price Data (2024.3)より作成
注：とうもろこしはU.S. No.2 Yellow, FOB Gulf ports, price, 米は5 percent broken, white rice, milled Bangkok, 大豆はU.S. soybeans, cif Rotterdam, 小麦はNo.2, soft red winter, export price delivered at the US Gulf portの価格。

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2024 年 5 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2024/25 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。



https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html